北辰會雜誌

第四高等學校北辰會

明治三十二年五月十三日發行

第貳拾參號

（非賣品）

北辰會

北辰會雜誌第二十三號目次

論說

商事會社の經濟上の性質　矢板寛

史傳

史海指鍼(續)　浦井鍠一郎

西と東　漪堂小史

雜錄

十番諺合　紫影

わが家の冊子のうち　三諸

迷へる西行　俗露濱

古物語に見えたる雁の玉章　松下花樵人

"Lautmalerei in der Spiache"　E. Yunker.

文苑

よしゐ草　花廼舍吹雪

野馬　潮花

春興雜吟　三諸

歌廿九首、俳句二十二句　村上函峯

二川　明石華陵

東京　菅君峰

題支那三省地圖　荒岳

節酒說　鳩園

詠史百絕序　金井秋蘋

草色幷序

詩二十首

批評

文苑擔當の編輯子へ　飛ッ栗屋主人

燈下漫評　食栗屋山人

雜報

春○春草○偶感○詩歌壇○落花一片○雪中行軍○青年歌文會に寄す○推心錄○氣魄稜々○節酒會人員名錄○盡得春興六時間○若松兎狩行○擊劍大會記事

北辰會雜誌第二十三號

論說

商事會社の經濟上の性質

矢板寛

商事會社とは二人以上集合し各若干の出資を爲し之を其集合体の資本に供し共同の社名と計算とを以て商業を營む團体を云ふ我商法(現行法)の規定に依れば商事會社は常に法人をして一個人と均しき權利義務を有す即ち商事會社は獨立して會社財産を有し權利義務の主体となり又訴訟の當事者となることを得るものとす

商事會社に加盟せる各人を社員と云ふ社員は相倚りて會社を組織するが故に會社事業より生ずる損益は總て社員間に於て之を分擔せざるべからず斯の如き會社の事業に對して自己に義務を負ふを社員の責任と云ふ而して會社及其社員の責任の所在幷に程度は各商業會社は經濟上の價値を異にする所以にして又商事會社の種類に依りて分かるゝ所あり

會社及社員の責任に三種の區別あり第一を有限責任とし第二を無限責任とし第三を第一と第二との中間にあるもの即ち一部は有限にして一部は無限なるものとす有限責任とは社員の出資額に限り會社に負債を辯償する義務を負ふを云ひ無限責任とは其會社の爲したる負債の全額を辯償する義務を有するを云ふ此責任の如何に從て商事會社に三種の區別を生ず

第一、二人以上集合して各々共通の出資（金錢又は有價物若くは勞力）を爲して商業を營み社員は責任無限あるを合名會社と云ふ

第二、二人以上集合して各々共通の出資（金錢又は有價物）を爲し其社員中特に契約を以て無限責任を帶ぶる者の外他は社員の責任は有限なるを合資會社と云ふ

第三、七人以上集合して其共有資本を株式（株式とは會社の資本の一部分又は株主たる權利を指ふもはにして株主たる權利の證書を株券と云ふ）に分ち其業務に對して會社財產はみに限り責任を負ふを株式會社と云ふ

合名會社及合資會社は專ら人に重きを置きて成立をる會社なるが故に其會社の社員は容易に社員たる權利を讓渡すことを得ず之に反し株式會社は資本に重きを置きて成立をる會社なるが故に社員は容易に株式を以て其權利を讓渡を得べく何人と雖ども自由に社員たるを得べし

合資會社と合名會社とは主たる差違は下の如し卽ち合名會社は必ず無限責任なるべきも合資會社は有限あるを原則とし特別は契約ある場合に於て無限責任社員を置くことを得るの点及合資會社に有りては社員は金錢又は有價物若くは勞力を以て出資と爲すことを得るも合資會社に有りては勞力は出資を認めざるの点に在り

總て商事會社の大なる效益は之を各個人の企業に比し巨多の資本及勞力を得るの容易なると資本は損失及業務者の死亡より生ずる困難を忘るゝを得ることに在り然れども他方には其業務を當初の計畫の如く指揮する能はざる患あるのみならず會社の種類に依りて各經濟上の利害得失を異にするものあり

以下各種の商事會社は經濟上の利害得失を講究せんとす

第一　合名會社

合名會社に於ては巨多の資本を合併し得るのみあらず又數種の勞力（材能智識等）を出資と爲し得るが故に單獨企業に比し一層大事業を營み得るは勿論又性質を異にする數種の商業上の目的を同時に達せんとをる場合例へば數個の場所に於て別箇の事業を起さゞるべからざるか若くは場所は一個あるも數種の智能勞力を要する場合等に於て殊に適當とす且合名會社の性質として各社員は無限の責任を有する故に大なる擔保を與ふるは勿論各社員をして常に事業の消長に注意せしむる利あり然れども各社員均しく無限責任にして各社員の取引は第三者に對し會社全体の取引となるが故に社員たるものは互に深く相信依せざるべからず從て其社員は數も多數なるを得ざる不利あり且各社員出資の種數を異にすること甚しきに從ひ社員間互に相容れず軋轢を生ずる恐あり是れ實に合名會社は實質上は短所を示すものにして之が爲め往々一致運働を薄弱ならしめ責任の所在を不明にし往々營業經濟の紛亂を來すことあり此事たる責任と自由との範圍を全然一に歸する單獨企業に比し最も不利益ある点にして合名會社の永續するもの罕なる所以も亦此点に存するあるべし其他同一は場所に於て小資本を以て各別に營業するの餘地ある場合に合名會社を組織する時は其利益配當は各營業が獨立して得べき額より却て小あるべし故に斯の如き場合に於ては寧ろ單獨企業に依るを優れりとす

第二　合資會社

資本の不足と或資本に對し高き利潤を得んとすることゝは合資會社を組織する主たる動機となるものなり而して合資會社の特質として各社員は其中れ無限責任社員卽業務擔當人れ一身に信用を置くこと最も深きを要するが故に該會社は親密なる間柄以外れ者に涉りて社員を得る事難し殊に業務擔當人が不適任にして不注意若くは不德義の人物なるときは其權力を濫用して爲に少なからざる危險を生ずる恐あり故に廣大にして永續を希望する企業を爲すには此種の會社組織は適當なりと云ふべからず且又一方に於ては合資會社は只其無限責任社員が花客より非常の信用を受くる場合にれみ利用し得べきもれなるを以て自身に巨多の資本を有そる業務擔當社員は單に一定れ出資の義務のみを有する社員と損益を共にするよりは寧ろ尋常の擔當を爲し一定れ利子を支拂ふて利益を占めんことを好むの情あり又他方に於ては合資會社れ特質として其業務擔當人は無限責任を有する必要あるを以て動もすれゞ他れ出資者に不充分の利益を與へんとする傾あるのみならず他人の資本に重きを置き自己の資本に重きを置のざるゞ爲め其費用を他の社員の肩頭に懸ふしめんとそる等出資者をして擔當人の犧牲とおふしめんとする危險を生ずるおとあり爲に往々相互れ利害相容れざることおきにあらざるなり

第三　株式會社

株式會社の特質は會社れ組織が毫も社員れ一身に關係おき結合より成立するに在り此特質は企業を爲そ上に於て便利多きは他の會社の及ぶ能はざる所にして容易に多額の資本を結合し得ること

も亦他の會社の比にあらざるあり株式會社は其會社財產のみに限りて責任を有するもれにして各社員は資本を放下するに方り其危險の負擔に限りあるに拘はらず利益の配當に限度おく又毫も一身上に煩を及ぼさゞるの利あり然れみならず株式を作りて種々の小資本を蒐集し得るより從て何人と雖ども株式を買得して入社するを得へく又何時と雖ども株券を賣却するときは任意に退社そるを得るの便あり是等の諸点は卽ち株式會社の他種會社に比して容易に大なる資本を募集し得る所以にして且つ廣大にして永續を要そる企業に適當する所以なり然ども株式會社にも亦其利益に相當する不利おき能はず株式會社は他の會社に比し資本を蒐集し得ること容易なるの結果時として投機的れ事業を企圖そる傾を生じ易く爲めに往々他人の財產を以て無謀の企圖れ犧牲とおふしむることあり又株式會社は管理法の組織復雜なるが爲め決斷の迅速なるを要し且つ決定せる規約を有效に實行せんとそる企業に關しては頗る不適當の場合少なからず其管理者は通例一定れ給料を受けて事業に執掌し其負ふ所れ責任も株式を限度とするが故に從て其財產と名譽とを擧げて企業の利益に供する点に至りては遙に合名會社れ社員に及ばざる所あるのみおふず又其總會に於ても必ずしも常に充分の監督を行ふ能はざる弊あり其他實際總會に出席するもれは概して株主れ一小部分なるを以て總會の意志は一定の確乎たる定見なく各自會社れ利益よりも寧ろ自己れ利益を增進せんことを務め爲に必要なる改正變更の考案も不注意に看過せらるゝれ弊あり殊に其甚しきに至りては管理者中往々法律に違ひ德義を顧みざるもの出でゝ或は種々の奸黠手段を旋らして計算を曖昧にし或は社員の利益配當に重きを置くを奇貨として表面的多額の配當を爲し或は故意

に相場を狂はしめて株式を暴騰せしめ其機に乘ずて社會の耳目を瞞着し以て暴利を占めんことを計る等に在り又株式總會に於ても利益配當れ充分なる間は深く當事者を信用して議論あきを常とするも一朝變動を來すときは皆危惧の念を懷き議論頗る沸騰するを常とす是蓋し株式會社に於ては株主は各其株式を以て己の責任の極度とし直接に事業の衝に當らざるが故に一方には自ら企業者の地位に在るもれたることを忘れ會社の利害に掛念をすること少なきと他方には各自受くる所の利益配當は本來の報酬に過ぎざることを忘却するに由るにあらざるはなし

結論

要するに一個人れ資力不足にして大商業の動作を爲すに堪へざるときは所謂商業團体を作りて資力を合同すること固より必要なる方法ありと雖ども各種の會社は各一短一長あり且つ商業の如き社會れ變遷の迅速なる事情に應ずる組織を備ふべき企業に在りては何れれ種類の會社と雖ども單獨企業に比し寧ろ劣れりと謂はざるべからず何者各種れ會社の社員は其業務擔當人若くは管理者れ如く進んで其責を負擔せざるのみならず其擔當人も表面上は全く獨立して他の撿制を受けざる如くなるに拘はらず實際は直接間接に他の社員の干渉を免かるゝ事能はざればあり之に反し只堅固に結合せる二人若くは多くとも三人の商業共算組合及び合名商事會社は最も商企業に適當せる種類の商業團体なりと謂ふべし勿論是等の組合及會社に於ても尙仲間れ異論と軋轢とを生ずることなきにあらずと雖ども多數の資本家より成立せる合資會社又は株式會社れ如き比にあらざるや明かなり蓋し此種の會社は或特種の目的を遂ぐる手段としては極めて迂拙なるものにして其業務は頭取若くは支配人の管掌する所なるを以て如何に巧妙熟練なる者と雖ども之を一個人又は少數なる有爲の組合員若くは合名會社員が商業を經營し常に市場の好機を外づさゞるもれに比しては其業務に於ける措置緩急其宜しきを制し得るの如何、損益計算れ精否其他一般れ注意に於て大に讓る所あれば故に到底一個人若くは通常組合又は少數員の合名會社れ經營し能はざる大仕掛の事業若くは其他例外の場合にあらざれば是等れ會社は企業上不得策なりと謂はざるべからず以上の理由あるを以て殊に普通れ株式會社れ如きは貨物れ商業を營むには最も不適當ありと謂ふべし而して株式會社に適する事業は其業務れ施設簡單にして規則正しく且つ時々自然に進歩する性質を有する種類の事業即ち鐵道、堀割、築港、鑛山、銀行、保險、其他各種れ大製造業等にして就中紡績業を以て最も株式會社に適當したるものとす　（完）

Liberty is my Principle,
Progress my Law,
the Trial my Type.　　Victor. Hugo.

史傳

史海指鍼（續）

浦井鍠一郎

プルターク氏れ比較傳記れ流行せる時代は既に過ぎ去れり今之を說く陳腐の感なきにあらざれど

も此書は實に前三世紀間に於て歐洲人が希臘羅馬に關する歴史的智識は殆んど唯一の泉源なりしことを記憶せざるべからず此人は希臘ベオシア州のケロネアに生まる其年月を詳にせず（五〇年か）長じて後羅馬を始め以太利地方に在りて官吏となり公務に從ふ傍ら哲學を講せりドミタン帝の時羅馬府に在りて哲學の講義を爲せることは確實なれど氏がトラジアン帝の師傅たりきとは說は憑る處無きが如し晩年ケロネアに退隱して專ら文筆に樂みトラジアン帝の第八年まで生存せしは明なれど其後何時頃まで居りしや詳ならず此書の體裁は希臘人と羅馬人とを一人づゝ對照して一卷(bibion)となし之に比較論評を加へたり例へばピルスとケーユスマリユス、リサンダアとスーラの如し氏は文豐富ならずして動もすれば冗長に失し又其評論は温當を缺き是非を轉倒するおとなきにあらざれど兎に角氏は古代の人にして古代の英雄豪傑を後世に紹介せる者なれば現代の傳記作者輩の著述とは同一視すべきにあらず氏は歴史家といはむよりも寧ろ道德學者に屬し事實を談るに長ぜずして專ら人の性情を寫すに巧なりきされば此書は希臘羅馬著名の政治家軍人辯舌家の奇譚逸話を以て充滿し興味津々盡くるの期なく讀者をして親しく其聲咳に接するの感あらしむるは優に此書特獨の長所ありとす又十八世紀に於ける古典研究の勃興はプルターク傳記のために養成せられたりといひナポレオン始め此書を讀みて立志の階梯となし者少からざるを忘るべからず故に希臘羅馬人の性情を知らむと欲する者は一部のプルタークを讀むべく現代の人々の著述百部を讀むにまさるといへり

プルタークの四十六傳記は內散逸せる者十四卷にしてしかも最も大切なる人々の傳を失ひたるは最も遺憾とする所なり例へば希臘のイパミノンダス羅馬のスシピオを逸しジユリユス始め初代帝王の多くを脫し又トラジヤン帝を缺けり此帝はプルタークの最も熟知する所にして羅馬歴代の帝王の內最も有爲の人とし其治世は羅馬史中最も光燦ある者なるにプルタークの之を缺けるは眞に惜むべしとす蓋しトラジヤン帝の時代は前後に其比を見ざる泰平を謳歌し特筆大書すべき事變なかりしに因り此時代の記錄甚だ乏しき折なるにプルタークも亦た之を缺けるは最も後世歴史家の痛歎する所なりとす

プルタークの英譯種々あれども最も著名なるはラングホルン(Langhorn)の飜譯にして種々のエヂションあり最も廉價なるはルートレッジのポピユラアライブラリィに收めたる者にて一冊とす又ボーン文庫なるはクローリ氏の譯にて四冊あり毫も古譯書に憑據せずして全く新に筆を執りし者と稱す詩人ドライデンの譯と稱する者あれども其實然らずといへり

前述の如く羅馬史の過半は希臘人の手に出たれども羅馬の歴史家にして以上諸大家と拮抗するに足るのみならず殆んど進むで直にスキヂデスに逼る者少くも一人ありタシタス是なり余輩は氏の生年月を詳にせずと雖も皇帝ベスパシヤン、チツス、及びドミタンに寵用せられ累進して七八年當時著名の將軍ジユリユスアグリコラの女と婚し九七年ネルバ帝の時コンサルに進み一一七年死せり氏も亦た哲學者にしてスキヂデスに比し其判斷力及其時代の潛勢力を觀破するに於て稍や劣るおきを得ずと雖も其文才及人の性格を寫し出すれ力は却りてスキヂデスに優れり實に僅々數言を以て人の性格を寫し出すの妙は氏獨特の長技にして單に此點のみを以て論ずれば彼に比すべき

は古今獨りカーライルあるのみといふ一ゝも彼の文章は威嚴あるのみあらず餘音嫋々たるに於てはカーライルも之に及ばず吾人は轉ドて其比をシエークスピア若くはモリエール等の專問詩人に於て求めざるべからずといへり

氏の著述は分て四とす其著述の順序を以ていはゞ(一)アグリコラ傳にして傳記類の最良の摸範と稱せらる(二)Historial にして元と六八年ガルバ帝卽位より九六年ドミタン帝の死に至るまでの記錄あるが殆んど其全部を逸し吾人はたゞ始め五卷を有するに過ぎず(三)Annales是は氏の傑作にして一四年オーガスタス帝の崩御より六八年ネロ帝の崩御に至る凡て十六卷内カリギユア帝時代の全部とクラウヂユス帝の五年及ネロ帝の終二年を缺けり蓋し此書は一一六年を以て脫稿せる者あらむといふ(四)ゲルマニア(De moribus et populis germanial)にしてゴール西班牙ブリテイン等の民情地理等を記せる者あり而して近來の研究に因り其地理に關する記事は誤謬を以て充滿すれども古代日耳曼人種の制度宗教風習等の記事は頗る信憑すべきものあるを發見せられたりタシツス全集の英譯は數種あれど普通に行はるゝはオックスフヲート版の者三冊とボーン文庫なる二冊もとありマコーレイ氏のタシツス評に曰く

Of the Latin historians, Tacitus was certainly the greatest.....In the delineation of character, Tacitus is unrivalled among historians, and has very few superiors among dramatists and novelists.

以上諸書と共に勿論一部に纏りたる羅馬史を座右に備へざるべからず最も便なるはチヤーレス、ダリベール史の羅馬史あり此書は紀元前七五三年羅馬の建國より紀元四七六年西羅馬の滅亡に至るまで約一千二百年間に涉れる時代を僅々六百頁に縮めたるものとす次に是書よりは稍や鴻卷あれど最良の參考書はセオドール、モンゼンが羅馬史四冊とす氏は一八一七年シユレスウヰヒ洲ガールヂングに生れ一八四三年キール大學を卒業し後伯林大學の補助を得て數年間佛國以太利に遊びて羅甸古文書を研究し歸國の後シユレスウヰヒホルスタイン新聞の主筆となり又ライプチヒ大學に於て法律學の講座を擔當せーがシユレスウヰヒホルスタイン事件起るに及び盛に政論に從事せしのば終に非免せられ其後チユリヒ、ブレスラウ大學に歷任し又伯林に轉じ最後に一八七五年以來ライプチヒ大學法學教授となれり氏は羅馬史の他古代記錄貨幣制度等に關して大切なる著述をなせりと雖も氏の名をして嘖々たらしめーは主として此羅馬史なりき　(羅馬史の部終)

西と東

漪堂小史

四千載の歷史四億萬の衆庶、吾人は此老大帝國の古を懷ふて今に及べば一種憫憐の情を生ぜずんば非らず、支那は革命多き國なりき、周室衰て秦、秦亡びて漢、漢逝きて晉、唐となり宋となり又遷つて元明淸に至りぬ、而るに其政体は何等の革新をか爲したる＝專制政治は其特質なり＝思想上に幾何程の開展をか爲したる＝儒教の現世主義は其特質なり＝泰西の文明が代を追ふて發展し燭光より燈光、燈光より電氣燈と其光燿を增しつゝある間に支那は依然として舊式の蠟燭を點ド、米魯の新興國が元服して成人となりしに支那は猶尾弱なる童子として存ぜり、是に於て吾人

は第一に其何故ある乎の疑問に逢着せざる可らず、然れども是れ吾人の論せんと欲する所に非らずして吾人は寧ろ支那と歐洲との交通を叙し如何に彼文明が此の文明に資せし所あるゝを觀んと欲する也、是卽前の疑問の一面を解釋する所以に非らざる無らんや

支那歐洲の交通は古來豈に一再に止まらんや、然れども其間或は絶へ或は通じ永く繼續したることあらず、今假に之を分ちて二期とす一は西紀百年頃に起りて元朝の初に及び、一は現清朝の事情を叙す、概して言へば第一期は重に宗教上れ關係あり、第二期は政治的關係あり、第一期は差程の結果を生せざりし、第二期は吾人が現に目睹しつゝある如く其勢力駸々として底止する所を知らず

第一期

支那の歐洲と交通を開始せしは、後漢に始まる、後漢の時班家子あり班固は漢書を大成して文名を擧げ、班超は夷狄の征討に從ふて武功を立てたり、和帝の永元六年(AD九四)超西域を征し甘英あるものを太秦に使せしめぬ、太秦とは卽羅馬にして、是卽東西(狹義)接觸の嚆矢となす、固より此以前に於て希臘羅馬人は、支那に就て知る所あるに非らず、東洋一帶を呼んで Seres (絹布の意ならん)と稱したれども、彼等は只波斯の商人を介して支那產の絹布を求め之を珍として喜ぶに過ぎざりし也、後、桓帝の延喜九年(AD一六六)に至りて羅馬王 Marcus Aulerius 使を遣はして貿易を開かんことを求め、三國の時に於て羅馬王 Alexander Severus 其强敵たる波斯(當時Parthian王國)を破り、商人秦論を吳王孫權に使はしたることあり(吳黃武五年AD二二六)然れども

以上は單に交通ありしと云ふ迄にして、兩者の間に涉々しき交涉も無く、從ふて何等の影響をも大帝國に與ふるゝと無くして止みぬ

晉隋の間久しく聞く所あらず、AD六世紀東羅馬の「ヂヤスチニアン」大帝の時耶蘇教中に「ネストリアン」なる一新派を生ず漸次波斯印度等の諸國に傳はり、唐太宗貞觀中「五六世紀」支那に入りぬ、是則所謂福音が帝國に響きたる初とす、此時「ネストリアン」の僧阿羅本(ラホン)「シリヤ」より長安に至る、太宗房玄齡をして之を賓せしめ宮中に留めて經典を譯せしめ又多くの僧を度せり、是卽支那に謂ふ所の景教なり、高宗の時諸洲に景寺を立て玄宗又之を奬勵し教益廣まり、德宗の建中二年(AD一六八一)西京景寺の僧景淨太秦景教の碑を立て碑今に至て存ずといふ、然れども此時波斯のゾロアスターの如き祆教も侵入したるを以て、武宗に至り景僧祆僧二千餘人を還俗せしめ諸國れ寺院を破壞したり、是に於て此教漸く衰へ宋代れ史上には杳として其景を見るゝと能はざるに至れり、

元代に於ては歐洲との交通稍頻繁となれりき卽蒙古の成吉思汗鉄木眞不出世の英雄を以て黑龍河畔に起り、宋室を南方に窘逐し土耳古斯坦印度を略し、進んで波斯を降し、亞細亞大陸の全部を其慓悍ある騎兵の馬蹄に蹂躪し去り、子太宗　更に進んで歐洲の東部に迫り、露西亞を服し匈牙利を衝き獨逸のヘンリーとWahlstattの野に戰ふて大に之を敗り、彼露國を永く金黨(Golden Horde)の名の下に支配しけり、是東西兩勢力が衝突したる初にして支那民族が歐洲人に加へたる空前絶後の一大快擧たりき、是に於て法王インノセント四世其來侵せんことを恐れ使者をして教書を奉

ぜしめ、其耶蘇教國に侵入し城市を破壞し男女を殘虐せるは上帝の天意に遡ふ大罪あることを告げ且勸むるに耶蘇教を奉ぜんことを以せり、又佛王ルイ九世も蒙古人と同盟して土耳古を挾擊せんと欲しCarpiniなる者を遣はしたることあり、されど何れも要領を得ずして止みぬ、猶他に旅行家(Rubruguis, or. ruysbrook)の如きあり、然れども最も有名にして最も裨益を與へたるは、ミラビリア、ムンディを著はして後世コロンブスが亞米利加發見の動機を與へたるmarco poro其人ありとす、

マルコポロ父をニコロ(nicolo)叔父をmaffioといふ二人共に伊太利ヴェニスの商人にして東歐のクリミヤ地方に通商を營みて業とせり、千二百六十年ニコロ兄弟共にBocharaに赴きけるが、其地方は蒙古人間に爭鬪起りて歸路を絶たれ、遂に元都北京に來りぬ世祖之を優遇し歐洲の事情及基督教の景況を聞きて大に喜び、之と交通を開かんと欲し二人を以て使者とあし、法王に百人の基督教學者を送遣せんことを請はしめたり、二人或は河水の氾濫或は氷雪の融解に逢ひ三年の星霜を費して「アルメニア」のギアッサに達し、千二百六十九年「アクル」に着せる頃には法王クレメント四世既に死し又「ニコロ」の妻も木に就き唯十七歳の少年「マルコ」を見出しぬ、

「ニコロ」故郷に止まると數年、一千二百七十一年新王グレゴリ十世の答書を得弟及子「マルコ」を伴ふて「コンスタンチノープル」、「バグダット」を經英詩人「カレリッヂ」が歌ひけん「オルムス」市に到り和闐唐兀の地を過ぎ千二百七十五年元都に達せり、忽必烈大に「マルコ」を寵し或は楊州の知事に任ず或は杭州に留まらしめたるとありき、會々波斯れArgon王蒙古と親交を厚うせんと欲し、使を遣はして元の皇女と婚せん事を求めり、時に「マルコ」父子は兼て歸國の懷に堪へざりし時ありけれバ乞ふて皇女の護衛に當り、千二百九十二年元都を發し、二年れ後「アルゴン」の許に達して皇女を致し千二百九十五年無事歸鄉しけり、而して彼の旅行記は其後ヴエニスとゼノアとの戰にてマルコ敵に擒せられ獄中に在りけるとき同獄の人Rusticiano of Pisaが彼の談話を筆記せしもれありといふ

吾人は今記して殆んど一千年間に於ける東西交通に及べり、思ふに此間に於ける交通は猶此等に止まざる可しと雖も、概して之を觀れば吾人は先づ第一に何故に此等の交通が一時の現象たるに止まりて長く繼續せざりしかを疑はざる可ふず、吾人は之を解釋して謂へふく

第一、通路れ險惡　希臘が掌大れ小半島を以て面もスパルタ、アゼン、セーベスの數洲に分裂し互に覇を爭ひしは、逶迤たる山岳縱横に趨せて之を區分せし爲に非らずや、歐洲が幾多の邦國に分れ英雄「ナポレオン」といへども此がマップを改むる能はざりしはアルプスの山脈が四方に分岐する所以に非らずや、喜馬拉崑崙の峻嶺峯然として西天を拔き戈壁れ沙原が茫漠として胡雲に連あれるは是卽支那をして長く一個の大桃源たふしめし者にてやがて又東西交通を沮障せ｜所以なり、案ずるに支那と西方との交通は常に黃河楊子江の水源の狹路を辿りし者の如し、故に此間に出づる者は三月の糧食を持し數駄れ旅衣を整ひ、以て雲に入るの危棧を踏み、千仞の絶崖を越へざる可らず、之をマルコポロの紀行に見るも其困難思可ふさあり、而して例令身を虎穴に脫して域外に出づることを得るも困難は更に甚しき者あり卽

筆二、他人種は妨害是なり　支那人が戎狄として輕悔せし種族は匈奴と云ひ契丹と云ひ月氏と云ひ夏氏と云ひ回鶻といふ吐蕃といひ何れも皆部落の大なるのみ、其走ること飛鳥は如く水草を追ふて移居し、弓戈を執りて射獵することを業とし、又殺戮を行ひ掠奪を營み、旅行者をして安全に此間を通過することを得せしめず（後開明に赴きたる者あり）、實に彼等は文明を杜絶せる蠻種にして支那人が戎狄と呼べるも亦宜なりと云ふ可し、故に之を史上に徵するに支那人が此等の種族を壓服せし時は同時に東西の接觸を來したるを見る、即甘英の太秦に使せるは班超が西域を平げし時に非らずや、景教の流入は唐太宗が天下を戡定して突厥を征せし時に非ふずや、マルコポロの來朝は元の忽必烈が亞細亞大陸を併呑せし時に非らずや、」以上は單に支那の域外に就て論せしのみ、更に進みて中央亞細亞波斯を經シリヤ小亞細亞に出でんには更に多くの歳月と幾層の艱苦に堪へざる可ふず、東西交通の疎なりし豈其故なしとせんや

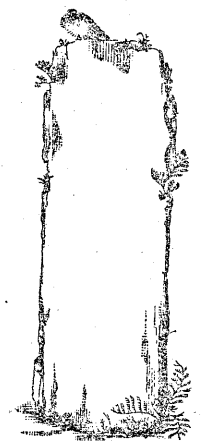
次に起る可き問題は何故に歐洲の思想宗教が支那人の頭腦に浸潤せざりしやは問題是なり吾人は之を重に左の事實に歸せんと欲す

第一、西文明の流入は支那文明形成の後に於てせり」、支那の文明は遠く紀元前一千年以上に於て固体に凝結せり、故に其後西文明の流入ありと云へども之が組織の内に加はらず、恰も玻璃盤上に水滴を流したるが如く何等の痕跡を留めざりき

第二、更に重大なる原因を支那人の宗教心無きことにいす、支那人は古來より宗教を有せず固より彼等は天を信ず之を畏敬したりと雖も、耶蘇教に所謂神の如き具體体の者とは大に異なれり、且其思想も狹隘なる現世主義にして高遠なる理想を有せず、未來なる觀念を有せず、所謂怪力亂神は語る可ふずとなせり、故に佛教も漸く支那的に化せふれ、耶蘇教も一時の好奇心に驅ふれて之を信ず否寧ろ之を弄したるが如し、若し彼等にして羅馬人が火炷の中に自若たりしが如き信念あふしめば豈に一二回の虐殺一二回の寺院破壞に依て消滅する者あふんや、是れ羅馬法王が屢布教を試みて失敗せし所以にして即又東西の交通を疎絶せしめたる所以なり、

猶支那人の排外主義保守主義は之が主要の原因なる可し、思ふに吾人は此等の原因は爲に支那は文明が其開發の機を失ひ引いて世界人文の發展に大なる澁滯を致したるを惜まずんば非ふず

今年より春しり初むる櫻花
ちるといふなほならはさらなん　貫之



雜錄

十番謗合

歌合はふりたり、句合もをかしからふず、いでや我より古をなすといはむも、鰐の齒ぎしりをこなれど、よし見む人は、團栗の背くらべとも、嗤はゞ嗤へかし。

紫影

一番

左勝

人は提灯で明りとる

右

人の褌で相撲とる

をかしけれど、人の褌餘りにむさくるしければ、此相撲は暫く提灯は足元あらるるを勝と定め侍る。

二番

左持

鼠とる猫は爪のくす

右

能あゝ犬の高吠

深き川は靜に流れ、淺き瀨にこそ仇波はたてなど、皆其心は同じけれど、これは猶犬といひ猫といへるに、趣添ひぬめり。深く藏して虛しきは、いと殊勝あれど、鼠捕る罪の深きには、あの猫いつの世にのは佛果を得む、されど妄語の罪は、犬にも遁れ難く、よき持にや侍らむ。

三番

左勝

花より團子

右

色氣より食氣

ユーチリタリアニズムのことわりは、左右とも變り侍らねど、右のいひざま餘りにあらはにて、色氣なければ、彼岸團子の甘きに花を持せて勝とす。

四番

左

猿の尻わらひ

右勝

目屎鼻屎を嗤ふ

目屎鼻屎を人化したる、我國にはいと〳〵めづらしき例ありのし。莊子が寓言中にかくとも、いかでか遜色あらむ。左右の優劣、猿の毛の三すぢばかりのちがひにあらず。

五番

左勝

狐の子はつふ白

右

蛙の子は蛙

左いと古き諺にて、盛衰記にも見えたるを。今はをさ〳〵知る人おくて、蛙子のみ時得顔なるもうたてしや。右の何の巧もおく言ひ下したるにむかへて、左はつふ白とそれたる處に、手柄はあるべし。

六番

左持

猫に小判

右

犬の尻に才槌

猫も杓子も金の世の中に、この諺いつまでか行はるべき、おはれ心細き末の世にこそ。作意は右の方稍立ち優りたれど、猶簡潔は左にやあらむ。小判と才槌、舞む人はいづれに多かるべき、人々の好き〳〵にまかすもの也。

七番

左勝

面々の楊貴妃

右

すきには痘痕も靨

靨の鈴おりは聊多きに過ぎて、及びざる咎や立ち添ひ侍らむ。左は情人眼中出西施といへると、異境同工といふべし。楊貴妃と無鹽とのおとりまさりは、物定めの博士を待つべくもあらず。

八番

左持

死ねがおと目くドろ

右

目の中に指突込む

おそろしの世の中、目れ用心せでは、往來もおるまゞく思はれけるに、死ねがおと詛はれむには、それも詮おかるべし。おほざりなる勝負づけして、判者の目をくじれなど恨みられむも、恐しければ、腫物にさはる心地にて、さし置き侍りぬ。

九番

左勝

勝ちて兜の緒をしめよ

右

燒鳥にも綜緒をつけよ

右は用心に繩はれといへる如く、たゞ細心の德を述べたると、左は勝ちたる上に油斷おき心構、一入ゆゑしく、かくてこそおの勝負も、おのづから定りぬべけれ。

十番

左持　いさかひ果てゝの棒乳切木

右

葬禮すみての醫者話

小兒のはまりたる後に、井戸の蓋するといへる、人の國の諺も思ひいでられて、左右とりく〳〵に興趣多し、左を勝とせば、醫者殿の繰言うるさかるべく、右を勝とせば、棒乳切木れそば杖やくはむ、兎角は之を以て十番いさうひのはてとし、判せざるを以て判もる物也。

わが家の册子のうち　三　諸

編輯係より、何をかものすべく言ひこされたれど、折かゝ机の上れ暇なさに、人に見せむとては書きつめざりし「わが家の册子」かれど、その中より數節を抄出しておくる。

一、山田勘解由

山田時章、もとは名を勘解由といひて、世々京都某院宮の家臣ありき。御家流の筆法をつたへてそれ道にくはしく、若のりし時は維新の革命にもあづかりて、功勞もありきとう。この人れ話に、嘉永以來は、薩長二藩をはゞめとして、こゝかしこに、漸く勤王の士を生せしかど、翁が壯年の頃は、これ等諸藩のうちに、かく〳〵れ計畫ありとは、なほ夢にも知ろしめさず。よし知ろしめしたりとても、草莽のうちにかにうくと思ひ碎くる、切なる志の片端をだに、雲れ上に聞えあぐべきよすがと、てはあふざりしを、思ひのけぬ事の雲の梯となりて、うけはおれたる事の例にもひかるゝ、霄と壤との間に、一筋の連鎖こそは出來にけれ。それを如何にいふに、元來京都には諸藩の邸宅ありて、留守居以下勤番の諸士、交替にてこゝに詰むる習ひありき。さて大抵いづれの藩邸にも道場ありて、藩士どもの互に武藝ときそひはげむ事、これはた常の事なりけり。然るにうの某院宮の家臣何某といふもの、ある日長州家の道場にゆきて、青年の血氣にまかせて、已がわざを人も無けに說き誇りけるのら、かの藩士ら、うたはふ痛く思ひて、何某に試合をれぞみ、散々にうちすゑけるに、何某は負腹たちて「我こそ怪我にて今日の立合にはまけたれ、宮の御內の人々の、長州れ奴ばらなんどに、やはう負くべき。斯う言ふを誠しうふず思はゞ、御抱への花房先生の道場に來よ。其の時こそは目に物見せてとふすべけれ。」と散々に罵りちらして歸りつ。長州方も、腹にすゑかねけむ、やがて在りあふ人々打ち連れ行きて、花房の門を叩き、先に何某が言ひし旨を述べて試合をのぞむに、折しもたゝの道場に集ひたる、早り雄の面々せきたちて「こは面白き事をきくもの哉。その義なふば望みに任せて、宮方の武士百餘人、長州の奴ばらと、眞刀にて晴業の試合して、剛憶を別つこそよけれ。」と花房に迫りて歇まず。既に大事に及ばむとする程に、早くも事の由を聞き付けゝむ、長州の留守居何某、こゝにうけつけて、取さへむとつとめしめど、此も彼も火の手つよくて、如何にともせむ方なく、果は彼等のいふがまに〳〵、留守居さへ同意したりければ、いよ〳〵大事にあふむとしけり。さる程に山田勘解由、その時は二十七歳なりけるが、火急の知ふせに、取る物もとりあへず、駿足に鞭ちて花房が道場に來り、事の

次第を聞きはて、人々に向ひていふ樣「人々さまざまに事を好まるゝならば、願ひの儘に眞刀にて試合せむも惡しかるべ。さはれ、あれは我々どもの上れ事にて、雙方れ君と君とは露ばかりも知ろしめしたる筋にはあらず。然はあれど、宮家れ武士と長の藩士と、爭をし出して、かたみに死傷ありといはむに、宮の御上にも長州侯の上にも、そがとばしりのかゝる物かかゝふぬものか。よく心して見給へかし。あはれ、とても捨てむ命あらば、同じくは之を一天萬乘の君に捧げ奉りて、はや目の前に迫りたる國家の御大事に、拋むものならば、國の爲君の爲、いみじき勳功なるべきを、さりとてはくち惜しき人々の心うな。」と日頃胸に滿ちたる感慨の覺えずあふれ出でたりけるに、さしも氣色だちつる席の靜まりのへりて見えたる中にも、かの留守居はいみじく感じて、「おほけなき事にては候へども、そは宮の思召さるゝ御旨に候の。若しさも候はゞ、あはれ某等が喜びこの上や候べき。」といふを「否、これは某が存ずる旨をいさゝうの述べたるのみ也」と答へて、猶々にかくと語らふうちに、互みに張り合ひたり〜人々の肘もいつしうの餘波なくたゆみて、一件事もなかく落着しつ。あれよりは前にひきかへて、宮の御内人と長の藩士との中親しくなりけり、それうちに、かの留守居何某は、任期滿ちて國にうへりぬ。さてそれが代りとして來ぬる者こそ、山田氏が心あひの勤王の率先者、宍戸某にはありけれ。これもはじめは相知らぬ中ありしを、前の行きかゝりより、より〳〵行かひせし程に、宍戸は前の留守居にもまして、憂國れ情いと深き者ありければ、終には無二の友垣を結びつ。山田氏の心しらひにて忍びやうに宍戸を宮の御前にめされ、薩長諸藩の有樣を聞しめされ、おほ樣々のたばかり事に、京都所司代の目をうすめて、宮よりやむごとなき邊りに奏し給ふあとあり、こゝにはじめて上下合体の路ひらけて、終には維新の大業を成すには及びしありとう。この間、宮れ御内人の中にも、竹田某以下有力のものに幕府方多くて、宍戸の内謁といひ宮れ密奏といひ、あれにつけ、かれにつけて、山田氏の心勞は實に一方あらざりきとぞ。

二、蘇民將來子孫

蘇民將來子孫とうきて門口に貼り置けば、疫病よけの守りとある、といふ事は古き言傳へにて、近松の「日本振袖始」は專らこの傳說を敷衍して趣向をたてたり。あの話の出所を年頃いぶかしく思ひたりしに、あれ頃ふと釋日本紀のうちより見出せり。同書に備後國風土記をひきて曰く、

疫偶國社（エノクマノクニノヤシロ）昔北海ニ坐志武塔ノ神。南海ノ神之女子乎與波比爾出坐。日暮多利。彼所爾。蘇民將來巨旦將來二人在支。兄蘇民將來甚貧窮。弟巨旦將來富饒。屋倉一百在支。爰ニ武塔神借ニ宿處ヲ。惜而不レ借。兄蘇民將來借奉留。即以ニ粟柄ヲ爲レ座。以ニ粟飯等ヲ饗奉留。饗奉既畢。出坐後爾。經レ年率ニ八柱子ヲ還來天詔久。我將來之爲報答。曰汝子孫其家爾在哉止問給。蘇民將來答申久。己女子與ニ斯婦侍止申須。即詔久以ニ茅輪ヲ令レ着ニ於腰上ニ。隨レ詔令レ着。即夜爾蘇民與ニ女子二人ヲ乎置天。皆悉許呂志保呂志天伎。即時爾詔久。吾者速須佐能雄能神也。後世ニ疫氣在者。汝蘇民將來之子孫止云天以ニ茅輪ヲ着ニ腰上ニ。隨レ詔令レ着。即家在人者將レ免止詔支。

三、那古君

筑前國風土記うちあげのはまの所にいはく、狹手彥連、舟にのりて、海にといまりて、わ

たることを得がたし。爰に石勝推量していはく、御舟のもかざる事は、海神の心あり。其神はなはだ、狹手彦連がねて、もくとおろれ妾那古君をしたふ。これをとゞめばわたるべし。于ノ時彦連、妾とあひあげく。皇命をかうぶふんことをおろれて、うつくしびをたちて、こものうへにのせて、浪にはおちうこのぶと云々。（袖中抄）

あの話と實事とすれば、那古君はこの弟橘媛と同じ運命を荷ひし人あり。彼はその名甚高さに、おれは殆どたれにも知られず。ありうちの事あがら、氣の毒ある心地ぞする。

四、袋背負ひ

骨牌、雙六おどにて負けたるものを袋背負ひといふ。これ、古の卑しき者の、主のしりにたちて、袋を背負ひて行きし習よりおこれりと見も。古事記には大已貴尊の諸兄におひ使はれて袋持ちにせられし事見え、日本紀には雄略帝、根使主を罪おひ給ひて、その子孫を茅渟縣主に賜ひて負囊者とせしめ給ひし事見えたり。和名抄には袋を行旅具のうちにをさめたり。

迷へる西行

俗露濱

世俗的榮光に浴すべき資格と能力とを惜氣もなく振り捨てゝ、思を花鳥風月の間に馳せ、百花楊柳の洛陽を去て、雨露を一簑に凌ぎ痩軀を一杖に支へ、嵯峨野の奥れ朝な夕な自然の微妙を觀じ、更に奮然志を決して白浪月を碎く二見ヶ浦を音づれ、烟波縹渺の清見が關を越へ、更に去て風清き白河の關れ秋を探り、奥の葛れ松原に吟腸を養ひ、轉じて老樹晩煙を罩むる鳴立澤に心無き身の心を傷ましめたる僧西行の生涯の如何に淡々たるふしきよ、彼は實に世を捨て人を捨て又彼自身をも捨てんと願へりき、彼曾て所謂洒々落々の風懷を吐て曰く

世の中れうさをも知らですむ月れ影は我ヶ身の心地こそすれ

何ぞ其自然を樂めるが如き、野心あく悲哀なく憂苦あく將た又歡喜もなかるべき此呑氣僧に、思ひきや

吾ばかり物思ふ人や又もあるもろこしまでも尋ねてしがな

の悲聲あふんとは、蓋し彼は終生何等この羈絆に苦しめられつゝありしには非る乎

然り彼は實に一大煩悶に惱めりしあり、彼固より超然として出離の念はありしと雖、亦冷情枯腸の動物たる能はざりし、否彼は或意味に於て世路に迷ひたりぬ

世に稱す、西行は頗る厭世の心に富み脫俗の志厚く、眞に是出家中の出家ありと、嗚呼厭世とは何ぞ、之を知らず、唯其屢樂天の語に對して用ひらるゝを見る、バイロンとウオルズウオースと、屈原と樂天、其詩作に依て之を窺へば一は厭世、一は樂天の兩極を現せりと雖、是必竟彼等性情と境遇との相異より起るもの、則ち其自然的傾向のみ、必ずしも可厭若くは可樂の元素の相對持して存在せるに非るあり、蕭條として人目も草も凄しき時、枯枝に烏れとまりたる、是冬季に於ける自然のみ、捨て果てゝ無き者と思へる身の、雨の日に寒さを覺ゆる、是人情に於ける自然のみ、而も特に之を悲觀するは、卽ち各自の感情に依り、各自の感情は又各自の境遇に依りて異る、長明が見て以て人生れはこのなさを觀せ、行く水の流は、今や數百歳の後、却て其商船漁船を通ず

るの便を賞せられ、ルーテルが友の打殺せられたるに無常を悟りし雷電は、今や利用せられて通信の器とし重せらるゝに非ずや、昨非今是、憂しと見も何時しかに戀しくある、是人類天眞の情、彼の廬山の一角看て以て峰となし巒となし相爭ふあらゞ人其愚を笑ふと同じく、若し斯世を以て絶對に惡ありとし若くは善ありとし之が爲に悲樂をる者は、是徒に境遇に執着するの狹量漢のみ、余れ此点に於て「ショッペルハウエル」の世界皆惡說を奉ずる能はざるあり、且夫れ所謂厭世念の起るや必ず平々單々の無事時に於てせず、之を大にすれば、國民れ厭世念は國家組織の過度時代に起り、之を小にしては、個人の厭世念は其境遇の被轉する時に生ず、何とあれば過度の時代又は境遇の變轉をる時に在ては、屢不自然的の事偶生して人を迷はしむればなり、是に於てか意志と感情との衝突起り、人は爲めに一大煩悶に逢ふあり、

西行の境遇は確に一の變轉を受けたり、彼の感情は屢彼の意志と衝突したり、故に彼は屢心中の煩悶に逢ひしなり、彼が無常觀は、縱しや或人の言の如く先天的の者なりしとせんも、其脫俗出離の念を固めしは其友憲康との關係に依らずんばあらず、彼は實に憲康に就て初めて人生論を聞きぬ、其論に曰く吾家歷代朝恩の優渥に感泣すと雖、人生は元是一炊の夢、何ぞ明日あるを保せん、願くは出家して靑山白水に自適せんあると、而して此沈痛れ語をなせる憲康は其翌日先づ俄に黃泉に急ぎぬ、さても有爲轉變の世なる哉、愁然として人生論を口にせしめて、今はは や其論を證するの犧牲となり終んぬ、是れ西行に取りては正に其境遇の一變轉、出家の心を强固ならしめたる者となす、

彼れ意志は實に强固なりき、我は一意萬有と一致し無彼の境に到達せんとせり、而も彼は余りに多涙あり、勇然として北面の武林を離れ、妻子珍寶を顧みざる彼は、怪む可き哉、到る處の山川に其血涙を濺ぎぬ、彼や固より區々の系累を意とする者に非ず、其初め將に家を出でんとするや四才の嬰女彼が双袖を捕へて涙潸々之を放たず、彼卽ち猛然之を蹶落して去りしといふ、己に此勇を見る、彼が意志の强固なる知るべきなり、如何せん强烈層一層に上れる彼が感情は屢彼を驅て胸裡猛々として裂くが如き衝突の渦浪に陷れたり、

嗚呼彼は實に俗物ありしなり、彼は好んで妻子を捨て勉めて家族を顧みざらんとせしも、到底之を忘了し去ること能はざりしなり、夫れ靜居は人をして回想に陷れ易き者、況や京を距ると雖猶家族舊故の消息を耳にし易き嵯峨野の地に於てするをや、是を以て彼は此地に朝夕の觀想を凝すあと僅に暫時、常に雜念の起らんとするを慨し、焦心苦慮遂に之を避くるの一策を案出しぬ、旅行是あり、蓋し旅行は人をして自然の妙趣を知らしめ、萬有と一致せしむるに於て最も力あるのみならず、變化の極りなき人をして他意を生ずるに暇あらざらしむ、禿麗たる峰、淙々たる流、花を過ぎて柳に入り、柳を出でゝ梅に赴く、美なる者、壯なる者、潔なる者、忽にして蒼田、忽にして寒村、時に車行し舟行し又徒步す、送迎に勞らしむる者、其間豈塵念を誘ふの余暇あらんや、是古來憂を抱く者は故らに時を旅行に費して之を忘れんとする所以、豈徒に其風光を見て而して樂むのみあらんや、唯其風光を賞するの人に在ては旅行は是其目的あり、憂を忘れんが爲にするの人に在ては旅行は是其方便のみ、前者は重きを旅行其物に置くの積極的旅行家といふべく、

後者は寧ろ之を輕んずるの消極的旅行家といふべし、而して西行は實に其後者に屬せりき、彼も旅行を好める者に非ず、己に之を好まず而も勉めて之を行ふは必竟特に變化多き者を撰みしのみ、變化多き者を特に撰むは其胸中忘れんと欲する元素則ち俗念の多きを證明する者、則ち彼は俗物たることを自覺し以て強て俗を離れんとせしものに非ずや

人は旅行としては西行を見て單に其風流と脚健とに驚くれみ、余れは之に依て大に彼の心事を憐んで止まざるあり、蓋し彼は徒に名勝を探ふんが爲に、四方を靡遊せしに非ず、詩趣を養はんが爲に山川を放浪せしに非ず、又世の所謂美感に觸れんが爲にも非ず、彼の旅行や眞に方便に過ぎず、然れば彼自身以外に於ては旅行に依て何物をも求めざりき、換言せしめよ、彼は其感情を忘るゝを以て滿足せしあり、其偶々發して三十一文字を為りし者固より紙れ重んずる所に非ず、見は彼が曾て神來の興趣ある二見が浦に草庵を結びし時、行住坐臥「一生幾ならず來世近きにあり」の語を口にして絶たず、夢寐猶之を語りしとは、彼の弟子蓮阿の記する所、是によりて之を見れば、彼は故らに未來の樂土を口にして以て現世の憂を忘れんとせしに非ずや、何となれば、眞に世を離れ俗と絶ち、心平に氣靜なるの人は、未來の樂を解了し去れるの人なれば、強て之を疎て覺めても言ふの必要なく又決して言はざればなり、且つ彼が花鳥風月に親んでひたすら世念を遠けしと雖、其悠々として永き行脚の間、其屢涙を流せの機會如何に多かりしかを知らば、彼の如何に煩悶せしかを知るに足らん、

其二見が浦を去らんとして、歌弟子の潸然別を惜むに對して「君もとへ吾れも忍ばん咲くたくは月を互みに思ひ出でつゝ」と答へ、彼の如何に冷淡又平然たるよ、離別は人生の大恨事、而も彼は三年の久しく無撫せる弟子の涙を見て平然、飄乎として東に向ひ、彼は、其後日駿河國部に至り曾て京洛の地に相識りし人の死を聞き其遺せる笠を見て、「笠はあり其身は如何になりぬらんあはれ果敢き天の下哉」と嘆きし彼と同人にあらざるが如く然るあり、嗚呼其笠存して其主や亡し、人世の至悲至哀、然りと雖、己に世の無常を悟了し來れる出家より見れば、無常是れ常、唯自然的傾向に過ぎざるに非ずや、而も西行今之を見て悲痛嗟嘆、紅涙滂沱、一旦超脱せる自然界より降て人間界に陷ふんとせり、迷へる哉彼、のくて彼は再び神機を飜し自然界に遊ばんとせり、遂に足柄山の麓に出でぬ、白雲深く鎖し、殺たる秋風に感じて、又も「山里は秋れ末にぞ思ひ知るあはしかりけり木枯の月」と悲歌しぬ、一旦悟りたる身の木枯の風に思ひ知る者は彼四才れ兒女の行末には非ずや、西行に聞かまほし、夫より彼の鴫立澤の歌はいはずもがな、彼が旅行に於ける悲歌的の者を求めは

いかゞすべき世にあふがこそ世をも捨てゝあなうの世やと更らに厭はん

朽ちもせぬ其名ばかりを留め置きては枯野のすゝきかたみにて見る

逢ふまでの命もうなと思ひしは口惜りけり我心かな

其他數多あり、

四方に放吟すること十餘年、遂に京に歸りぬ、十年の星霜何ぞ多事なる、彼は家屋替り知己死し變りに變りたる都を見て愁然たり、頃しも秋風颯々の天、懷をもふして曰く

これや是れ昔すみける宿なゝん蓬が露に月れかゝれる
嗚呼彼猶迷へる哉、

安心を求めんとして旅行せゝ彼は苦痛を得て歸りしなり、蓋ゝ彼は血涙を抑へ能はざる者、風の音、鳥の聲に、彼れ所謂「先づ悲しう覺え」たる者、何を彼の淡々として枯木の如き眞の僧生涯を送り得んや、文覺上人が彼を罵て、浮世と三十一字に送る賣僧、奇怪千萬、佛門の賊なりと言ひし者眞に然り、彼も亦自ら甘ドて佛門の賊たゝん、何とあれば彼は元僧を欲して僧となりしに非ず俗を厭ふて僧となりし者、其目的は敎學に非ずして脫俗に在れば、嗚呼彼は實に永く一大煩悶にありし者、手天に達せんとして足未ざ地を離れざりし者乎、而して彼の眞に豁如として些の後顧なく、悲哀なく、煩悶なく、眞に俗を脫して僧と成り、虛飾を離れて自然と一致せしは其最晩年計らずも其妻の尼とあれるに逢ひ「是はまことの道におもむき給ひぬれば、露ばかりの恨みも侍らず、却て智識となりぬく云々」を聞き、次ては其曾て蹶落せし兒女の剃髮せし時にありとす遲い哉其悟り、而も今や實に連日懊鬱の五月雨晴れて天に赫たる烈日を望むが如く、十年にして迷ひたる者一日にして悟り終んぬ、彼の悟りや、是に於てか、遲しと雖固し矣、

嗚呼俗乎迷乎、禪家は之を嘲笑すと雖、而も血あり涙あるは人の情に尊しとする所、冷々淡々枯木の如く然る者は、嚴乎石の如しと雖世に於て何の益らあらん、西行は晩年其煩悶を失ふて悟りぬ、而も俗に迷へる余れは寧ろ迷へりし時の俗西行を慕ふや切あり

古物語に見はたる雁の玉章

このふもじをもくゞ蟹匍ふ文字をまドへて才がるは男の子れみのはをみあまでも然る氣色ありてほと〳〵人からさへはしたなげなるゝたはら痛き際は云はずもあれ自今以後と云事法華經信解品に自今以後如所生子云々相續と云事譬喩品に衆苦次第相續不絕その外提婆品に大智德勇健同品に晝夜受苦無有休息また隨意所樂可以遊戲云々信解品に寶物出內取與同品に爲諸童子之所打擲云々なゞ見えたるがことゝもはふいま樣の消そこは世はかりどもと亂れて取るゝ燒太刀の束のまも男子はいくさの事にゐゝづふひて文の林は時ならぬに枯れ凋み沙彌桑門らみつ莖の葉すゑの露とみなゐみの流の末なれゞ神代の昔より人のこゝろすゐほにして何ごともうふやすの國のみ手ふりそれにゐゐひて清少納言が遙のゐる世にあるひとのおぼ束無くいゐゐふんと思ふに只今さしむゐのひたらん樣におほゐけるふみの詞つかひはたいゝなりけふしいま玆に何にやくれ古もの語りの中庭眞垣のゐげ斑に消殘る春れもきかふゐりのたまづさあるは濃きあるは薄墨のあーてゝきそれふし〳〵の句をきゝ究めん人のよすがとてゐくはゐきつめたりな

春雨を戶桶にあつめて聽夜のたずさひに

落窪物語	十五章	千木のやにて	松下花樵人
住吉物語	三章	さころも	四章
		竹取物語	四章

榮花物語　三章　蜻蛉物語　二章
大和物語　一章　枕さう紙　一章
うつほものがたり　卅一章
くゐんしものがたり　九十章

おちくぼ物語の中

一の卷　小將より落くぼ君の許に

いゐにそやよへれ縫さし物は腹また立ちいでずや甚と聽まほしくこそさて笛忘れ來にけりとりて給へ只今内裏の御遊にまゐるなり

同ド卷　あこきより姨のもとに

頓なる事にてもとめ侍りぬ隔心しき人の方達にさうしに物し給ふべきに几帖一つさては殿居物に人のこふもひんおきはにいたし侍らしと思ひ侍りてなむさるべきや侍る給せてんやおほくはあやしき事おれど頓にてなむ

同じ卷　同ド人よりおなじ人に

いと嬉しう聽えさせたりし物を給せたりしなむ喜び聽さするまたあやしとは覺ざるべけれどこよひもちひおむいとあやしき樣にてよう侍るとりくすべき菓物おど侍りぬべくは少給せよまふうとなむしばしと思侍りしを四十五日の方ゝふるになむ侍りける然と此者共は暫し侍るべきをいゝたらひはそうの清氣なゝむをしばし給らむとりあつめて甚傍いたけれど賴み聽えさするまゝに

二の卷　典藥助より落くぼの君に

誠もく〳〵いとはしくよひとよおやませ給ひける事をなむ翁の物のあしき心地喃し侍る我君々々よさりたに嬉き目見せ給へ御邊だに近く侍ゝはゞ命延て心地も若く成侍るべしあの君く〳〵　老木ゞとひとは見るともいかでなほ花さき出できみに見おれむ

同ド卷　おちくぼの君の女房あこきの返こと

甚と苦痛しうせさせ給ひて御文自ゝはえ聞え給はず　枯果てゝ今はゝぎりの老木にはいつのうれしき花は咲くべき

同ド卷　あこきより姨ゝりに

急ぐ事侍りておむ昨日今日聽さりつる今明日の程に清けおゝむ童おとな求め出給へそこにも清き童あらばひとり二人借給へある樣はたいめに聽えむあゝゝ樣に坐せよ

同ド卷　姨が返りごと

覺束無きに此より聽たりしのばはやうすさましき業して逃給にきとて使をもほと〳〵撲れぬべうりけるを辛ドてなむ逃て來りしのば如何おらんと思給へ嘆きつるに嬉しく平ゝかに物し給へる事人は今案内して聽えむ此處に侍はゝゝ〳〵しき物無し此の守の從兄弟にて此所に坐するこそさやうにものしつべけれ

三の卷　衛門督より中納言殿に

昨日越前守して聽し御消足は申されけむや御暇あらば今日必ず立寄らせ給へ聽さすべき事あり

同ド卷　大納言殿の大溝れ時に中納言殿より中の君に

いと功德き事思し立ちけるを斯なんともの給はざりけるはよろおぶくどくに入れさせ給はしとにやとつらくなん

同ド卷　衛門督より中納言殿に

昨日は暮行惜しくも侍し哉急がせ給ひしゐは年頃の物語も聽させずなりにし今よりたにとさゝ立寄せ給そは心憂くあむ卷これはおどゐ忘れさせ給ひにし猶や渡らせ給ねさゝすは猶びんおささまに思したるとかぎおく思給へなげくべくあむ

同じ卷　中納言殿のおんゐへり辭

やがて昨日は侍らはんと思しかど方れふたゐりて侍しかゞなむ今よりは甚と嬉く明暮も侍ひぬへしと思給へしも命延びてなん拠て給りし卷は給はるまドき由は聽ゐえ侍しを猶のうぜさせ給ふ御ゐむたうのふるきおめりと畏り聽え給ふる御帶もゐゝる翁の身には暗の夜に侍る可ければ返奉ふせんと思ひ給ふれど御志の程すぐしてなむ思侍ふひつ

同ド卷　衛門の督の殿より四の君の許に

とし頃は甚覺束無く思給へつゝ斯おんと聽えまほしおがふつゝまドき事多くて忘やしく給覽「忘にし常盤の山れ岩つゝド云はねど家に戀は增ふし」と思におそうへにも御かたくにも今は對めにと思給ふれば嬉しく喃と聽え給へ

同ド卷　四の君の御かへしふみ

年頃は杉の標も無樣にて尋聽にさすべき方無くなむ思給へつるに甚もくく嬉くてあむ人はよもとは心憂くも推察ふせ給ける哉　打棄て別し人を其處とゞに知ふでまとひし戀は增れり

同ド卷　大納言の八溝の時に左のおとゝより

今日ゞに訪ひに物せんと思ひれゞ脚のけ起りて裝束する事の苦しければおむこれはしるしばゐりさゝけさせ給へとてなむ

同じ卷　左のおとゝの姫君より師とのかりに

今回のみと聽侍れバ何心地せんと喃　惜めゞも強ひて行たに有物を我心さへおどか後れぬさゞろもの中

二の卷　大貳よりれほとのゝ許に

某が女れ俄に無なりて侍れば其事共により備前に留りて侍ふ物の初に斯忌々しき事を嘆思給へる

三の卷

なかくなりし心まとひの後やゞて出立待つる見えぬ山路も猶何時しゐと語會侍し人に云置くべき事共侍ければ心弱く滯り侍りてけさはくやしき事のそそひ侍りに鳧　命さへつきせず物をれもふゐなわゐれし程にたえも果てあゞで

四の卷　ささゝの宮より女君の許に

日頃は行衛無う覺束無き事を思ひ侍りつるに一日近さおどにと宰相物せしゐば心安おりて侍れゞ川添柳は猶如何ぞや侍りける　同くは木高き枝にこつたはて下枝の梅にさゐる鶯

同じ巻　狭こそに中將の君より

今はかひ無事とは去物のにてにしるまゝを様に待る人をみたまくおつかひてなむらつゝさ
みしさをも見待ら人事の心憂さこそ　（つゝく）

長持に春かゝれゆゝ衣ゝ

西鶴

無友心のは食し

LAUTMALEREI IN DER SPRACHE (Schluss)

E. Junker.

Wer hört nicht die Kanonenschüsse, wenn Rückert singt:

Kann denn kein Lied
Krachen mit Macht,
So traut wie die Schlacht
Hat gekracht um Leipzigs Gebiet?
Drei Tag und drei Nacht
Ohn Unterlass

Und nicht zum Spass
Hat die Schlacht gekracht.

Oder kann wohl die Kunst des besten Malers schrecklich schöner eine Feuersbrunst malen als Schiller im "Lied von der Glocke", diesem Edelsteine der Dichtkunst aller Völker und Zeiten:

Kochend, wie aus Opens Rachen,
Glühn die Lüfte, Balken krachen,
Pfosten stürzen, Fenster klirren,
Kinder jammern, Mütter irren,
Tiere wimmern
Unter Trümmern.

Man hört wirklich den Juberzug des heimkehrenden Heeres in "Lenore".

Und jedes Heer mit Sing und Sang
Mit Paukenschlag mit Kling und Klang,
Geschmückt mit grünnen Reisern
Zog heim zu seinen Häusern.

Wie schäumt der wilde Meeresstrudel in Schillers "Taucher":

Und es wallet und siedet und brauset und zischt,

Bis zum Himmel spritzet der dampfende Gischt!

Wie anders aber redet das selbe nasse Element zu uns in der "Bürgschaft":

Und, horch! da sprudelt es silberhell,
Ganz nahe, wie rieselndes Rauschen,
Und stille hält er, zu lauschen,
Und, sieh, aus dem Felsen, geschwätzig, schnell,
Springt murmelnd hervor ein lebendiger Quell.

Mit Recht hat man für solche lautmalende Wörter auch den Ausdruck "Tonbilder" gewählt weil die uns umgebende Natur sich mit ihren Tönen und ihrem Glanze in diesen Wörtern abspiegelt.

Die Beispiele aus unseren besten Dichterwerken liessen sich schier ins Unendliche vermehren, diese wenigen Proben dürften aber schon genügen, um den geneigten Leser diese Schönheiten beachten zu lehren. Erst wenn zum schönen Inhalt die schöne Eorm sich gesellt, entsteht das bleibende Kunstwerk. Dass auch das Metrum der besten Gedichte vom Inhalte abhängig ist, will ich hier nur andeuten, da dieser Punkt nicht streng in die Aufgabe, die ich mir gesetzt, hinein gehört. Einige meiner Leser werden sich an die bei den Gedichten "Wie ruhest du so stille" und Scheffels "Ausfahrt" ("Berggipfel erglühen, Waldwipfel erblühen") gemachten Ausführungen erinnern.

Wir haben bis jetzt das Wort als Ganzes, alsT onbild, betrachtet. Wenn wir bei disem treffend-

en Vergleiche bleiben, so ergibt sich eine weitere Untersuchung von selbst. In jedem farbigen Bilde wird die Grundstimmung des Ganzen durch eine worherschende Earbe oder Earbenüance angedeutet. Eine Nacht-oder Herbstlandschaft zeigt andere vorherschende Farben als ein Sonnenaufgang oder ein Sommerbild. Auch die Wörter, die Tonbilder, haben eine Grundfarbe, die dem Ganzen die Grundstimmung verleiht, das sind die Vokale.

Wir sprechen von Klangfarbe, um diese Eigentümlichkeit der Vokale anzudeuten. Doch darf man hier nicht zu sehr Künsteln und systimatiesieren wollen, sonst verfliegt "der Spiritus". Auch liegt die Klangfarbe nicht sowohl im Vokale an und für sich, sondern mehr in der. ganzen Verbindung und der Art des Sprechens. "Die Klangfarbe lässt erkennen, ob jemand fröhlich oder traurig, ernst oder scherzend, mutig oder ängstlich, hochmütig oder demütig ist". "Sprich, dass ich dich sehe!" hat ein Weiser geragt.

Im Allgemeinen nun kann man dem Charakter der verschiedenen Vokale etwa wie folgt bezeichnen: Die tiefen Laute u und o bezeichnen die dunkle Klangfarbe, a, e, i dagegen die helle Klangfarbe. A ist der Ausdruck des staunenden Behagens, I der Ausdruck der Verwunderung, U der des Unheimlichen und der Furcht.

Sehr interessente Versuche über Tonhöhe und Klangfarbe der vokale haden Tyndall und Helmholtz angestellt. Der letztere hat auch die Eigentöne der verschiedenen Vokale festgestellt, die ungefä-

hr in Oktaven aufeinandes, folgen, so dass, U und O tiefere Töne, A, Ä, E, I, Ö, Ü viel höher liegende Töne haben. Daraus erklärt es sich auch, warum manche Gedichte durch ihren wunderbaren Wohlklang auf uns wirken. Es ist eben Musik darin, wie in einem reinen Tonstück. Ich wiederhole hier, was Palleske über das Goethésche Gedicht sagt:

Über allen Gipfeln ist Ruh
In allen Wipfeln spürest du
Kaum einen Hauch.
Die Vöglein schlafen im Walde,
Warte nur, balde
Ruhest du auch.

Der höchste Eigenton des kurzen i im Reime "Gipfeln" liegt etwas tiefer, als der des langen i in "Wiese". Aber auch sein Unterton (i, ö, und ü bestehen aus je einem sehr hohen und einem tiefen Tone) strebt nach u hin. So senkt sich in der zweiten Hälfte die Vokalrichtung wirklich nach dem Eigenton von u. Die wiederholt sich in der nächsten Zeile. Nun mischt sich der Eigenton von a, welcher in "allen" zweimal neben i angeschlagen war, mit u in "kaum" und "Hauch". Andere Diphthongen in "Vöglein", "schweigen" scheinen abzulenken, indem sie e zum i mischen. Aber a klingt in "Walde", "balde" in eine wundervolle Mitte zwischen i und u hinüber, bis es endlich in sanfter Verschmelzung mit u in "Ruhest du auch" wie ein Hauch verschwebt.

Wie Glockengeläute klingen von selbst die Vokale in den Zeilen aus Schillers Glocke:

Von dem Dome
Schwer und bang
Tönt die Glocke
Grabgesang.

Auch die Konsonanten haben ihre Eigentöne und Klangfarben, namentlich die sogenannten Halbvokale l und r. Letzteren Laut nennt Palleske "die Lerche, die schmetternde Nachtigall, den heroischen Trommelwirbel der Sprache". Wegen ihrer kürzeren Dauer werden aber die Konsonanten meist in ihrer Verbindung zur Versinnlichung und Belebung des Wortes beitragen, was ich im ersten Teile bereits ausgeführt habe.

Ähnliche Untersuchungen, wie ich sie hier auf die deutsche Sprache beschränkt habe, würden gewiss auch bei anderen Sprachen mehr oder weniger reiche Ausbeute geben. Immerhin will es mich bedünken, als ob die deutsche Sprache eine von denen sei, be welchen sich die Übereinstimmung von Wortklang und Begriff am inbesonders ausgedehntem Masse zeige, was gewiss auch wieder nicht ohne Einfluss auf die Entwicklung der deutschen Dichtkunst geblieben ist.

文苑

よしあし草

花廼舎吹雪

物くろうなふねど心くれふたがりてかゝれず筆使ひはてねど腕のはおゞぬ悲しさゝるにても耳をきゝ目をみる種々のおと何くれと多かめるそのうたはしをだにかきあつめゞやとねんゞて文机にむりひぬ何を書かましとふ紙のなければ枕にこそはしはべふめと答へん煩ひもなしかきいでつることは深く考へたることのみにもあらず只心のゆくまゝ筆にまのせたるなめればれこあるふし然ふざるくだりもいと多のふんたがへりと見ん人はよしもなき行手の草とつみすて玉へゃ

む月一日家にあり今日はこと更心のどやかに友ほしけれど待つにのひなしさるにても徒にけふれ一日消たんもなか〳〵に口惜しけれゞ椿廼舎がりす梅重ねの薄葉に小松をつゝみてうちに

まつにうあらずとーはきにけり

としるして花廼舎まゐるとはいはで人して門よりいれさせけるにやがて月雪のかたあるしきしに此方よりの哥のとしを花とあふためて

まつにかあらす花はきにけり

としたゝめてこれも人して返しぬさては早う心してけりとれもふさへ時にあひてれもしろうりしろ、

もかしきもの。遠きも近きも琴のねいとゆかしまーて夜更行くまゝに月いと小さきに峯のあふしに類てもれくる調の想夫戀などはいかに久しく逢ざりー友梅柳あを植たる門は主人の心もれもひやふるゝ雁の聲孝ある人の子古き文開さて今の世くふべたる人して花あをおくりたるかへり言三つふたつ笑みそめたる花の梢はやがて雲とまがふふん日れおよび折ふるゝさへゆかし焚もの〻薫文よむ聲松風の音ねもごろあるめのと睦月廿一日ともふ日夕つ方より大神宮に舞のしふべありゆふけ終へて家をいでたるは口は深く海に沈みたれど月影はまだ峰に訪れぬ頃なりき時もなの〳〵にうつりぬかくれては何のせんかわらんと急ぎにいそげど折しも風荒く雨横さまにふりてくるーさいはん方あしやう〳〵道の半ばかりもきたふんとねぼーき頃風のもたふす笛のねうすかなるはいかに鼓も聞えぬさてはゝやう始りけるのわあむざん馬もあらねゞ鞭打たんそべもあく心のみ急ぐめり今は調もいとちかう手にとるやうにてゆかしさいはん方なけれどふりさけ見かぬる風のすさまじさやう〳〵鳥居のあたりまでいたりつけばうみさへ轟きそめぬ心ふたがり目くらみつ御社に登ればこはいかに舞は終りぬむねん極りなー何ありしぞとたゞせゞ蟻通と答ふ理也雨もふりのみもなりけることよといへゞさるにても馬にものし給はざりー事の幸ひさよありとほーともれもはでや詣でたまひしと人々笑ふもいとわりあしや、

花は　梅は紅梅白梅早きは心とあり櫻は八重いとよし山櫻もわろかふず外國に又なきものときけばあつかしさもこよあくなん梢れみ見るべきよし古人のいへりけるは心なきことあめり幹の大々

しきにつぎ〳〵しからぬ花の咲きてこと武士にゝたるふしもあれ曲水にながるゝ桃の花はあふむの盃さへとりあげまほしき心地すあやめの水面をあまりはなれずで咲きたる折戸にひらきれくれぬ朝顔の花は霜れ程よりあすさゝんつぼみを打數るさへたのし萩桔梗おべて秋の花は姿やさしく大やゝならずあはれなり、

心ぐるしきもの。いそぎに急ぎて講義おどうつせるに鉛筆の先のはとうと折れたる雪さへふり交りたる道に履物の緒のきれたるふらゞこれもひ定めて家を出でたるに路中にて空かきくもりつゝやがてそぼ降りいだせる雨は心のみ先に急がれてくるしさいはん方おし夏いとたけたる頃蔭なき道をゆくは目も打くらみぬべし五月雨の頃家にたれこめたる歯の弱きにかたき物食ふ眼強かふぬに眼鏡失ひたるは盲人の杖を失ひたらん心地せふる物尋ねふれてしらぬ心地あて人は前おどおらんには消えうせぬべう覺もる冬の夜いと更行まゝにすびつの火灰がちにおりたる室のせばきに人の多く入りたるよみかねたるふし多き文誤植ある本異おるしきなどあるにたのれひとりれくれて急ぐほどやう〳〵ま近くいたりつきたるにはや始の合圖きゝたる瓶にさゝたる椿は花の夜ふけてれつる音ねられぬ夜時計の針のねとの耳にいりたる、

書は　花鳥山水いとよし時につぎ〳〵しきおどいはん方おし人物は筆者いかに巧ならんもわろしことにもろよしの聖人君子とやらんれたしもおき像おど書きたるこれともてはやそ人の心の淺さ哀れなり裝束おどの時に違へるはいふまでもあらじおし寫意の書は寫實より趣多しなべて南畫よし四條は筆意疎にしてわゝ狩野派は圖の取り樣形のごとく光琳派はうるはしけれども氣疎く浮世は艶ざちていやし新古折衷派の筆はなつかしかふぬにあふねどまだ足らはぬ處多く和洋折衷派は説くところはわろかふねどふで極めてわろしいはゞ木に竹をつぎたらんがごとし今すこし折衷の意を汲取らでは末頼しのふずなん歴史畫土佐にはなべて調齊はぬもれ多くことに上代の家の作りやうにあやまり多きは斯道の人々の心ずべきおとなふかし　（つゞく）

野馬　潮花

蒼溟（ワダツミ）の沒遠く
はてなき波とまがふまで
めも遙のなる青草の
極みも知らぬ曠野（ヒロノハラ）原
朝夕の鳥影は
雲より出でゝ雲に消え
翼とゞむるよしもなし

長き眠りをさめいで
望みあふるゝ若草の
つゝむにあまる花の色
見よ人草の跡をたに
繪卷の筆に染めふれぬ
れのづからなる野のすがた

煙に遠き野の彩と
自然の深くたくみにし
古き林をたづぬれば
千年苦むも幹老いて
斧の香知らぬ枝々を
所せきまでさしまゝへ
森のにほひの高うして

はふはぬ草に露しげく
春とも知らぬ木下闇
闇なす奥は見えねども
深き林の限りなく
斷えては續く若綠

霞を含む紫や
淡紅の若き葉の
おかにもかゝく匂ふ花
たつ陽炎につゝまれて
をち方黑き森かげは
野末の雲に消もるかな

安き夢よりさめいでゝ
うつゝになにをもとむらん
心そゝふる野の馬は
霞を破る嘶きに

朝の雲を搖がして
狂ひそめけり春風に

あゝ人知らぬ草しげき
深き林に生れいで
春野の花は香を慕ひ
匂ふ霞に醉ひし身の
夏影清き森に湧く
塵にけがれぬ水を飲み

秋澄む星に嘶きて
無限のそゝの風をきゝ
冬野に枯れし草に飽き
夢まどかなる隱れ家の
自然は胸に生ひたちて
絆を知らぬ野馬のあ

あゝ鞭影に驚きて
荒野の露にやつれはて
廐に痩する身をのこち
朽ちよ軛と泣きわぶる
深き歎きを目にしては
誰れか野馬を思はざる

絶えぬ泉道に湧き
つきぬ新草萌ゆれども
強き絆に音をなきて
人の情をうたがひし
長き恨を耳にして
たれか野馬を慕はざる

駿馬一たび嘶いて
朝の空に友呼べば
潜める星も震ふべく

湧きたち循る血の汐に
踴れる胸は波をあげ
はげしき息は虹を吐く

千里を照す眼には
はてなき望み輝きて
かの青雲のあとを追ひ
骨逞しき四つの脚
足搔きも速く音高く
蹄に春の草を蹶り

吹けば流るゝ鬣や
うち振りうちふる長き尾の
春の光に照されて
結びもあへぬみだれ髪
見よや夕日をうち碎く
黃金の波とまがふなり

曠野にあまる青波の
うれ萌えいづる草に飽き
流れつきせぬ春川の
このの草影の水を飲み
驅け旋りつゝ跳りつゝ
遠ざかりつゝ近づきつ

朝夢淡き星とめて
霞を出でし野の馬に
傾きそむる夕日かげ
歸る月毛を追ふ鹿毛や
栗毛に續く連錢の
彩なす雲にうつろひて

花の林を慕ひつゝ
やがてかはれる中空の
雲紅に染めぬれば
馬の足がきのひましげく
馨る若草ふみしだき
夕日を負うて入るや霞に

兵士の夢

トーマスキャンベル原著
藤浪生抄譯

『聞けや休戰を告げ渡る、
　喇叭の音は響きたり
夕べの雲は地を蔽ひて、
　夜を守る星の影凄し、
軍の名殘そのまゝに、
　倒れ伏したる數千の兵、
疲れ〜者はうちねむり、
　手負の勇士の息は絶えつゝ、』

骸々あさるおほかみの、
防ぐたきゞの傍に、
藁のしとねを片敷きて、
　草を枕にまどろめば、
夜もいとをそくかるなべに、
　やがてぞ辿る華胥の境、
夜のあけぬ間に二三度迄、
　樂しき夢を繰り返しけり、

われもふに我は恐しき、
　戰鬪列を離れつゝ、
淋しき鄙の細みちを、
　こゝやかしこと逍ひき、
頃しも秋は半にて、
　日影もいとゞうらゝかに、
我を迎ふる故郷の、
　御空に高く輝きにけり、
こゝろもいとゞ若かりし、
　我少年の春はころ、
行きかひ馴れし野邊は内に、
　いつしかつきて打聞けば、
牧場に高き野羊のこゑ、
　稻かる賤が面白く、
しふぶる歌の一ふしは、
　哀れ戀しき故郷の聲、

我は抔取り上げて、
　我故になく人々や、
戀しき家をみすてじと、
　かへす〜も誓ひけり、
絶間あらせず幼子は、
　幾度我を接吻りけん、
盡きぬ思のやる瀨なく、
　妻は涙の淵に沈めり、

とまれや長くふるさとに、　時に東もわけそめて、
汝こそいたく疲れたれ、　嘆はいよ〳〵増さりつゝ、
手負の兵は打ちきゝて、　戀〳〵き妻子の其聲も、
よろこばしげに止りてき、　きえて果敢き邯鄲の夢、

春興雜吟

三　諸

花さのぬ　峯もかすみて　大かたの　春にはもれぬ　は山しげ山
巨勢山の　まだ見ぬ春も　思ひやる　椿さく野れ　あめれゆふぐれ
心ゆく　春の野川の　川船れ　水棹はとらど　水にまかせん
色わせし　花れ木かげを　とめくれば　都をとめが　袖の香ぞする
いのぶのり　思ひあがりて　大方の　春をよそなる　雲雀なるらん

春季雜咏

エスもの

わが宿は借住む寺の朝な〳〵花あらなくに鶯れ來る
水に沿ふ籬もれ來る琴の音に李月夜の二階ゆうしも
隱れ住む翁訪ふべく酒買ふて驢を引入るゝ菜れ花の路
渡し舟呼べども〳〵人は出ずて夕日の苫屋雲雀落つる見ゆ

青柳に繫げる牛れ鳴くなへに酒賣る門の旗暮れんとす

思はぬ聲

千木舍花湖

春れ聲　聲競ふよもとの庭のゆふ櫻はなをのすめてまりそれにけり　花
秋れ聲　血の跡はこけともならて腥き風の末野にうつらあくあり　同
夏れ聲　おと高くゆふ立すきて芭蕉葉の五尺のみとりかせかをる也　琴路
冬れ聲　霜さやくよさむに月の影やせてもみのたほ木に猿なく也　同

詠花

花廼舍正義

尋花　まちわひし花の使をゆめにみて馬に鞍をもれきて尋ねつ
月夜花　吹渡る風にてゝろそかれける月にたなひく花のしら雲
嶺上花　人ことに難波菅笠かたむけてあふくも高き花のたほ比枝
花林待月　はる風のはふはゝ散ふん花の雲かきわけ出る月影もかな

歌文會第二、第三例會詠草

遠山殘雪　行く舟の眞帆のかけとも見ゆるのあ淡路の山れ雪のむふ消　秀知
門柳　春されは風もみとりに靡くりあ門曳入るゝ小車のうへ　蟹丸

同　問ふ人も言の葉添へよ我門に年も古枝の青やぎのいと　賢隆
晩鶯聲幽　行春のしるべにもせむ一聲はほのか鳴く野邊のうくひす　良太
春風解氷　春風に色も變りて飛鳥川昨日の氷けふやとくふん　定郎
同　春風の便りにつれて氷ゐし門田のみつも世にいてにけり　雅雄
同　氷ゐし池の面をけさ見れは風にゆふれてうき草のもく　敏郎
同　我宿の梅れ香さそふ春風に筧のみつも音たちにけり　守彛
早春鶯　珍ふしくなく鶯の聲すゐうなほ雪白き春れはしめに　慶太
春雨　物思ふ身にしあふねど春雨のふりしきる日は眺め暮しつ　茂知
門柳　春來ぬとつけに立よる山風に靡きて答ふ門の青やき　莊二
雨後花　雨はれし花は梢のうれしさを先つ日記にこそ記したりけれ　正義
門柳　今日も又馬や車の音とゐり門の柳の糸や曳きけむ　富兄
月照梅花　梅の花きふめく星とみゆるにそ月は出ても香はしるへゐる　同

春季雜唫

よた〳〵と尻垂坂を春の人　紫影
順禮が足袋洗ふ川の柳かゐ

永き日や駱駝の首のふなら〳〵
行く春や白粉壺に水乾く
五戸の村々學究が梅白し

× × × × ×

軒下や蕓の上に梅薫る　光夢
鳶の巣に鳶のあらざる日永かな
菜の花や大津の甍京へ行く
春の日に鷄の卵をすかし見る　文濟
早打の駕つぐ驛の柳うな
桃咲て羊を洗ふ小川うゐ
重箱に狐のつけり朧月　矢水
塾生の梅を活けたる德利哉　白咸
貧居士の田螺貪る寂酒ゐな　潮花
出代の脚絆の紐のもつれ哉　無哉
接木して別莊に雨を聞く夜哉　愛花
鶴去て其巣に烏子を生みぬ
檻に臥す虎の眼にぶき日永哉

水四句　　笹舟

土筆　咸陽宮は燒けにけり
土筆　つくねんとして暮れにけり
水汲の水汲んで休む柳ゥ哉
水汲んで山吹を折る濡手かな

尊德性。依文學陽明

二川橋本先生墓碑銘

村上函峯

先生本姓西村氏。諱清。字如雪。二川其號。肥前諫早人。初稱主一。後改賴藏。世仕舊佐賀藩巨室諫早氏。父號明川。以文學著。母田川氏。先生其第二子也。明川嘗游江戸昌平黌。爲舍長。有同僚忌其才者。一夜縊殺之舍中。時先生甫四歲。與母氏在鄉。聞其訃。慟哭。翌日早起。出佩刀磨之。母氏怪問之。曰欲復仇也。後日夜謀報復。聞仇人見刑乃止。先生及漸長。養於外叔父田川庄太夫。家業賈。先生自執牙籌。會計甚當。後出嗣橋本氏。家極貧。日負耒耜。盡力耕耨。一日慨然曰。吾家非農也。豈可以貧困遺士之業乎。乃以田圃付親戚。獨取十一石祿。肆力斯文。旁學武技。居數年。擢爲其主侍講。從赴佐賀。主命學於草場佩川門。進爲塾長。居六年。學成歸鄉。爲好古館教諭。兼關口流師範。前後增秩至三十二石六斗。明治初。諫早主納地於佐賀藩。乃改好古館。爲鄉學校。擧先生爲教導。既而以病辭職。下惟授徒。會舊主子。有游學歐洲之志。請之舊主。不許。先生聞之。蹶然單行。赴佐賀。謁舊主。百方開說。舊主曰。千吉少年。唯爾之賴。吾名爾爲賴藏。乃許之。先生娶西岡氏。無子。養門生久富元洋爲嗣。以兄光江第三女妻之。明治十六年六月二十一日病歿。享年六十有四。葬于德養禪軒之域。先生爲人達而和。不修邊幅。諄々誘掖後進。其學宗洛閩。又善詩。武技好拳法。遂究其秘蘊。嗚呼。先生幼而孤苦零丁。及長從事農商。艱楚備至。一旦立志。研究文武。卓然爲家。闔鄉師表之。可謂大丈夫矣。頃門人相議。欲建碑以傳不朽。來乞文珍休。乃次第其狀。叙之。係以銘曰。

文武濟美。　厥德在人。　貞珉雖泐。名則弗淪。

東京紀念碑

爲侯爵某氏囑。然脫稿後。有故而不與。

明石華陵

古歌曰。武藏野無所月可入兮。出自草又可入于草兮。東京古稱江戸。在武藏之廣原中。今則爲天下之大都府。往時在原業平。渡濃水。會覩水鳥浮。問之舟人。舟人曰。都鳥也。業平喟然曰。吾都人也。有故辭都。今徘徊於此荒原僻野之間。而因一羽之鳥名。追懷故都。戀々不能已也。後花園帝時。太田道眞。構宅於品川。康正二年。道眞子道灌。相城地於江戸。遂築居焉。鎌倉高僧萬里。書古詩一律。贈道灌曰。窓含西嶺千秋雪。門繫東吳萬里船。且祝曰。從是以往。此地必可爲繁榮之鄉矣。道灌已歿。其主上杉定正。有江戸城。定正卒。子朝良。孫朝興。各襲其後。大永四年。北條氏綱。滅朝興取城。從小田原陷。江戸城終爲德川家康之有。於是家康大修城郭。鏟高塡

皐。鑿渠疏淤。置第宅。起街市。三閱月而告成。於是乎海內將士。望風歸服。遂以開覇業二百餘年之基矣。世降政失。內訌生焉。外患乘焉。然而覇府遂自滅。王室則中興。而六百餘年下移之大權。一歸於朝廷之上矣。當是時。天下人心。猶向朝陽。莫不引領伸首景仰焉。參與大久保利通。乃察天下之勢情。献遷都議。上嘉納之。明治元年九月。遂遷都於江戶。爲東京府。以江戶城爲　皇居。而　王政之所出日日新。　帝德輝然溢乎四海矣。若夫城郭之雄。街市之美。人烟車馬之稠。道路運輸之便。則倍蓰於昔日。矧又泰西文物。既傳我邦。實於都下始布鐵道。奔火輪車。設線柱通電信。制電光爲燈火。其他百種事物。日就月將。殆爲文明之鄉。嗚呼其盛矣。夫東京之爲地。西擁富士岳。巍々戴千古之雪。南控海水。渺漫連大平洋。東北則沃野千里。蓊茫接陸奥。寔形勝之區。而制御天下者之所宜居焉。然而今也既爲天下之大都府。國礎從是可愈益牢固安定。皇威從是可愈益耀于萬世矣。抑業平之渡澤水也。此地方屬茫漠僻野。而舟人之無心。既稱微々之水鳥以都。以今考之。舟人之言。其將爲有徵於今日歟。且夫萬里之祝言。雖無徵於道灌之時。而自道灌而下。勢致漸開。則其亦不可爲無徵於今日也。嗚呼滄桑之變。古昔之江戶。爲今日之東京府。古昔之荒原僻野。爲今日之瓦屋櫛比。人肩相摩之鄉。俚歌云。出自屋。又入于屋。月之影兮。蓋溫故知新。是可以爲今後之紀念矣。銘曰。

富岳堞障。南海溝湟。沃野宏衍。環擁　帝鄉。此地古昔。屬于荒茫。漸次開來。至于繁昌。昔民驩虞。今民皥々。吁我　聖王。復于古道。

中村敬宇評。美哉此都。美哉此文。宜以爲完璧。

盧谷青山評。首尾引歌爲證。作法完密。

題支那三省地圖

菅君峰

圖與畫不同也。然圖豈爲非畫之屬乎。余今試假丹青之法論之。可乎。圖縱尺餘。橫不滿三尺。展而觀之。山非有峰巒溪壑俯仰起伏之可喜也。水非有川澤河海濤瀾洶湧之可駭也。城市村邑非有門樓廬舍之觀也、島嶼洲渚非有光華景物之韻也。雖有山皆死山也。雖有水皆死水也。雖有城市村邑島嶼洲渚皆死城死市死邑死島死嶼死洲死渚也。筆無變化之妙。墨無濃淡之別。不爲布置錯落之奇。不見點綴經營之態。然則是言得丹青之法。可哉。我嘗聞之。古來丹青之入妙域者。往々有使人動思感情而不已者矣。然而獨怪今余及觀此圖。不覺有胸塞情迫。痛憤感激。眦裂髮竪者。然則丹青之使人感動者。雖不得其法。雖不入其妙域。有以能使然乎。雖然是豈非支那三省之地圖邪。然則所以其使我痛憤感激。眦裂髮竪者。亦不宜乎。嗚呼所以其使我然者。豈亦不宜乎。

節酒說

荒岳

世之不嗜飲者曰。酒爲狂藥。禍人莫大焉。既飲既醉。愿慤之人如狂。聰敏之人如癡。儀秦失其辯。賁育失其勇。小人費財。以破其產。君子放心。以敗其德。夏后之所惡。周誥之所禁。聖哲既垂謨訓。酒池糟堤。喪師隕身。桀紂遺其鑒戒。酒者可不廢乎。其嗜之者曰。堯舜千鍾。孔子百觚。子路嗑々。尙飲十榼。酒豈可廢乎。若果爲狂藥。祭祀燕享。用酒者何耶。夫待賓交友。非酒不歡。

觀花賞月。非酒不樂。天之美祿。固不可廢也。以予觀之。兩者各有所僻。皆不得其正也。好而知其惡。惡而知其好。而後可與言矣。夫酒之爲物也。能結人之歡。而亦起人之爭。能樂人之心。而亦招人之怒。能散人之憂。而亦致人之患。或飲得其利。或飲受其害。要在其人如何耳。予之於酒也。嗜之既久。或時絕飲。則必感不快。一飲乍體和心樂矣。與友對酌則益覺歡樂。其好之至矣。然而又不欲人之多飲也。蓋是非之公。存乎中心。而好惡之情。不能掩者歟。且飲者之惰。易進而難止。若恣其所嗜。必也往而忘還。不可不戒也。然則酒者。固不可耽而又不可廢也。其要但在節之耳。

咏史百絕序 著作　鳩園

詩者詩也非詞也雄渾之詩者出於偉大之志纖弱之詩者出於軟弱之志余雖未知詩之儘奥花晨月夕陰古詩則古道照顏色而覺心骨共爽快豈不快哉今也作爲詩之徒弄纖巧衒華麗以自喜不尠矣吾友石田黑子軒磊落不羈嗜作詩今玆八月偶訪余語次及詩而初知子既有百絕之咏矣余聞咏史者作詩中之難者也而子好爲此難者是其豪膽之所使然而固非無其謂也蓋子慷慨一片之士好繙古史觸感則發志於詩而可賞則賞可貶則貶恰如董孤之筆毫無所假借故如其所作之百絕偉大而雄渾豈可與世之弄纖巧衒華麗之徒同日而語乎哉書以爲叙

草色 并序　金井秋蘋

番禺楊叔枰先生。嶺南第一名士也。嗜詩甚於色。所居臺榭園池。花卉艸木。題詠殆遍矣。近作草色若干首。同人隨和之者數十家。行欲裒成一冊子。名曰艸色聯吟。公于世。介社友潘蘭史。遙馳書徵予詩。辭意極慇懃。終不得以疎懶拒之。卽走筆賦四首。豈羨東家之富。聊傚西子之顰云爾。

燒痕日暖漸參差遮莫東風着力吹清淺寒塘吟謝客依稀春塚認虞姬六朝舊恨空螢化一種幽香有螢知試向韶光問消息讓他梅信早南枝

誰家吹笛帶離聲千里江南憶遠征偶趁游絲尋綠野可堪殘夢在蕪城月明馳道露華重烟抹廢堤春水生最是晴明寒食路香車來吊柳耆卿

欲賦青袍斷客腸平蕪飛絮又昏黃牧殘邊馬啣蒼靄染透山螺畫綠香夜雨連宵供點綴離宮一色送興亡登樓憶起昌黎句獨捲湘簾向夕陽

纏綿懶着馬蹄塵有客天涯又感春送別長愁南浦上踏青休過曲江濱遙看深綠密疑織細點落紅柔似茵底事年々滿金谷飄零不學墜樓人

花月吟　醉墨居士　黑子軒

由來花月兩相宜。夜靜花梢月上時。花映月光姿艷麗。月掛花樹影參差。風前月淡花搖席。烟外花明月滿帷。取舍不知花與月。眠花醉月撚吟髭。

漁父吟 三首

斜々青簑笠。瘦々綠蓑姿。垂釣楊花岸。伴鷗蘆荻湄。堪羨漁翁生計好。一生閑托半綸糸。

愛茲漁叟樂。無毀也無譽。孤棹隨鷗靜。一竿與世疎。不釣高名兼富貴。藕花香裡釣香魚。

江灘麗於畫。爽氣透疎篷。蒲葉竿邊綠。蓼花簑上紅。好是漁翁擧網處。鮮魚潑々墜籠中。

金澤八景

犀川落雁　疎柳籠煙暮色清。洲中何物引秋聲。橋頭月上波逾白。遙見蘆邊落雁鳴。

河北湖歸帆　岸柳秋殘暮靄微。吟眸尤濶釣魚磯。破來鷗夢片帆影。載得蘆花千点歸。

小立野晴嵐　小立野頭聒草蟲。夕陽光景惱詩翁。人工不若天工妙。一沫晴嵐雨後紅。

靈澤夜雨　天昏老樹吼風飈。靈澤祠邊最寂寥。半夜行人魂易斷。寒蛩唧々雨蕭々。

金城秋月　尻垂坂外夕陽收。風物蕭條動客愁。千古依然天上月。松間光綠古城秋。

大乘寺晚鐘　老樹秋殘擁寺門。白雲黃葉別乾坤。晚鐘搖曳疎林外。諸行無常月一痕。

臥龍山暮雪　銀花樹上夕陽春。寒月籠煙淡又濃。矚目美人顏耻潔。玲瓏積雪臥龍峯。

兼六園夕照　兼六園邊落日紅。閑人指顧苦吟中。東方忽見奇觀現。五彩架空千丈虹。

盆松　龍山道人

雖是尺餘高。嚴冬氣何豪。榮何受封爵。短兔苦蓬蒿。夜月小寫影。寒風微捲濤。古盆濃黛色。千歲伴仙曹。

新雪

曉嶺送新雪。朔方知仲冬。力驅先集霰。威霽後凋松。牖戶纔留濕。池塘不見蹤。倏然江日出。掩映白山峯。

詠雲

蕩々欲窮仍不窮。徘徊舒卷任西東。蔽星蔽月影還盡。若霧若烟痕竟空。有忘縈峰來作雨。無心出岫在隨風。浮雲一片渠何物。終歲飄々與我同。

初春散步

日煖午風斜酒旗。也乘殘醉出茅茨。波光閃處魚跳水。花影搖邊鳥度枝。紅綠漸滋前之路。煙霞既惹五言詩。狂生不管傍人笑。待月吟哦梅柳陂。

仲春遊山寺

氛塵不到澗流東。略徇橋危小徑通。絕境于今延雅客。名山自古屬禪宮。樹棲仙鶴曉烟白。苔襯落花春雪紅。十里歸途幾回顧。鐘聲遠送夕陽風。

孟母斷機圖三絕　龍山梅塢

爲兒纖手織春衣。一怒雄威今古怖。萬語千言又何用。單刀卽是指南機。

藝苑由來惜寸陰。萱堂秋色奈蕭森。不因慈愛癈嚴訓。猶是三遷當日心。

阿母思兒々思母。一刀兩斷亂絲開。七篇文字粲如錦。都自殘機經緯來。

徒然と春のながめの手業に結びて流すのきの糸水　鐘月尼

批評

文苑擔任の編輯子へ（、、、、を附せるは原作者の用語を借用したる者に候）

飛ッ栗　屋　主　人

「日ならずして、金科玉條の紙上に躍如たるを見ん」との、大々的前觸に先づびつくりしたる主人、鶴首して日々其發行を待ちに待ち居り候所、二十日の後の今日、漸く配布せられ候は、先以て余り難有仕儀にては無之候、遲にして而して巧なり、かゞ言ふ事もあればと、早速拜見仕候、其体裁の余りに粗惡なると其紙數の余りに僅少なるとに、常は北辰贔負の主人も流石に二度びつくり、然れど形式は如何にもあれ、其實料こそと、猶も味方贔負の慾目に一々讀みもて行き候所、いやはや、何たる編輯子の横着にや、杜撰なる者、粗雜なる者、醜惡なる者のみ入り代り〳〵候て、雜誌生れてこの方れ大失敗、是には編輯子と仲善の主人も三度びつくり、さはれ今しも百花繚亂たる青陽の春、唯さへ美を盡せる文苑には、なぜて一本の櫻ながらでやはと、又も氣を取り直して足を文苑に運び候所、もとより荒れに荒れたる草の園、唯茫漠と廣きばかりなるには、もはや主人も匙堪えで、四度びつくりの外之なく、終に愁然として雜誌投げ捨てたる主人の心根、ひたすら御情察被下度候、

主人元來無學、人樣の物を批評するなどは以ての外の事に御座候、況して露だも風流韻事を解せざる無骨漢の、さら〳〵文園かゞに立寄るべくもあらぬは、夙に自覺致し居り候得共、こたびの文苑の色も香もなきは、不計も主人の本性に似通ひて、中々に同情を表すべき節々少のふめ者かふ、わざと拙き筆を取て御注意申上候儀、決して人の批評にては無之、唯己が懺悔の一端に御座候

第一に、紫水君の遊魂錄、流石に國文の素養ある君の事とて、最とも流暢に書き流されざる水莖の跡、もかしく覺ゆ候、孤雁蕭々として影遠き雲間の月の片破に、轉ぐ亡友を忍ぶは、有りふれたる事實なれど、常に飽かず哀に感ぜらるゝ者、今を八年の深き交り、あはれ一朝の夢と消ゆて、終に一葉の寫眞をかたみとするの悲慘に逢ひし紫水の君の心情さこそと察せられ候、況して斯る哀には屢遭遇したる主人、最早文章の巧拙を採るの暇はあらなくて、唯涙にくれ候中に、最も哀れに感ぜられたるは、新年の葉書の一節に御座候、病の瘦軀を起して山川萬里を隔つる友に賀狀認めんとはやれど、手に力なき身の、流石に、龍躍り虎驅るの筆法も衰へ果てゝ終に苦〳〵く打伏したる、誰か哀を見ざらん、然れど其は單に事實其物の己に哀なるに有之、穴勝に紫水の君の文勝れるによるとは申し難く候、文は概ね彼の桂月漁郎の「病院」を摸せふれたるやに見受け候得共、遙に品下りたるは是非もなき次第に御座候、總て文として、少しく冗長に流れたるの嫌あり、到底人を動すに足る者とは稱し難く、彼の葉書の一段の如き、最も哀を感ずべき所も、筆力他に比して却て劣れるは、確に遊魂錄の大欠点に御座候、其は未だ此種の經驗なき人は、此文を見て左まで哀を感ぜざるにても著るしき事に御座候、其は免もあれ、從來美文としては、彼の小學校課題樣の者のみなりし。文苑欄に、此種の作を見るに至りぬるは頗る慶す可き事に有之、益々此欄に其妙腕を揮はれんことを、編輯子より紫水君に御傳へ被下度候、但し其末に附せふれたる歌は、極め

て不成功の者にて、水莖の水にぐみて知るの緣語は極拙き者に御座候、

第二は、我は顏に澄める高根の月を見んとて道に迷へる人々、抑も、何人の何事を綴れたるにやと見れば、此はいのに、例の吹雪の君が、常に物し玉ふ斧の柄の朽ちたる古めかしき趣向にはあふで、君が俳句は世に容れられざる不平談、いかさま驚愕の外無御座候、君は蕪村の句の解し得ざるお腹立にや、四方八方處嫌はず荒れ叫ぶ冬の吹雪のそれおらで、頻りに罵り玉ふぞ凄じき、成程落ては同ド谷川の水と碎くる雪霰、新派舊派とて十七字を並ぶる点にては、何の異るふしもあらざれど、其雪霰を黑しと見給ふひが眼を奈何せん、分のぼる麓の路は數多のれど、一度邪道に陷りおべ、あらぬ所に彷徨ひて、月の高根に辿着かざるに、先づ餓死する者と知り玉はずや、城壁を堅めて敵視する奴原の心のせまさはさることながら、明日をも計られざる弱卒の徒に破城を墨守して覺悟せざるは、更に愚の極みとは眞逆に知り玉はぬに非ド、知て降ふざる痩我慢の君が好は桃青好みと意張り玉ふ其口から出たる御名句「うつすともなくてうつるや水の月」、「小家二軒庄屋はやぶのこのあたり」「取り出でゝ小簑に人としのぶかな」とは、是にては桃青好みも何もあつた者に非ず、斯る季無發句を自慢する人の沒理はいはずもがな、更に之を採錄し玉ふ編輯子、余り寛大にては之おく候はずや、凡て俳句に季を要するは三才れ兒も知る所、强て此三句に季を求めなば水の月は秋に屬それど、治に居て亂を忘れざるてふ英雄おらめ吹雪の君の、春に居て秋を思ふおどは、余り感服不仕候、余りの馬鹿々しきに、高根の月を後に麓に出でんと致候所、忽ち聞ゆる陣鐘陣太鼓、ハテスワ何事の起れると見れば、此度は又、生醉の禮者や市井無爲の徒

や、我俳壇の兩派や横文字の書生が吶喊射擊れ大接戰、互に詩神に盡くす至誠とやら大騷と見る〳〵又もや俳句の不平となり、果ては勝や大久保や西鄕が飛出たる、何が何やらさつぱり相分り不申、斯る怪しき畏ろしき業をおすは抑も誰ぞと、驚き居り候所、我器は蕪村ど名乘り出でたるは花湖と申す君、吹雪の君の加勢するかふは、之ぞ例の花樵の君の變げおふめと思ひ居り候折柄、歲旦に男子あげたる俳諧師」と怒鳴り出され候。いか樣、蕪村の「歲旦をしたり貌なる俳諧師」れ中七文字を取替て、あとは其儘の剽竊俳句を得意に蕪村の器と誇ふるゝは中々の變げ者、人間おふば確に禁錮の刑を免れずと存ド候、花湖れ君やゝ靜まり玉へゞ、やがて吹雪の君の說明ありて、先の花湖君の大聲は左傳の講義と申す者の由初めて承り及び候、吹雪君は次で、淸國征服間もおく南京米のやつ介に預る今日、寧ろ首陽山に餓死するの勝れるを經濟的に演せられ、話頭一轉、又しても例の駄句有之候ひしも、固より取るに足る者無之候、先に生醉の禮者往來して新春とおれる日の、何時しか又後戻せるにや、次には除夜の鐘陰々と鳴り出で候、主人は殆ど烟に卷ふるゝ樣の心地致し、新年來りて又直に除夜となる電馳の光陰を嘆ド居り候所、花湖の君は、頻りに俳句の研究の成ふざりしを嘆つ者の如く、初よりなし得べき心算はありしなど、懺悔致され候、吹雪の君何條默し玉ふべき、忽ち得意の本音を吹立て、擧世混濁の語を我ひとり顏に講釋せふれ、果ては唐人の寐言然たる悟入談、譯の分ふぬ言を述べふれしは未だ覺り足ふぬ所ある樣に思はれ候、永々の御說教、果ては又もや、新を希ひ奇をてらふ靑書生と猛り玉ふ二人の君の、誠や何事も優にめでたしで濟ます歌よみの中れ歌よみと聞えたる優にやさしき色白男、斯くあふずもがお

の口き　玉ふは、いかで故なからでやはと見れば、扨は〳〵二人が紙窓の下とやふに汲み玉ふ所の屠蘇くさくて酒に若かざる憤りと虚子の句を引て説明し玉ふ御記臆の程は感服仕候、さるにても余りの憤りに、蘆間の蟹の沸々と泡ばかりあるぞ淺間しき、ひとり清め高根の月と我と澄されたる積りかは知ふねど、初は俳諧論より戰爭談となり、更に經濟論に變ず、懺悔話と化し、さては、心理説、人生論より終に一轉して戀愛論と、七轉八倒の御苦痛、何の御病氣にや、さつぱり相分り不申候、其れさへあるに、時々調子はづれれ句吟など聞かせられて、耳聾するばかりに御座候、斯る者をも矢張文と申候にや、若し文ならば、古今に亙り東西を極め、變化あり、抑揚あり頓挫あり、擒縱あり、是ぞこれ天下の妙文にて有之候はん乎、

次は、かぶるに重き月桂冠、主人等は一字探るにも頭痛を覺ゆるなる獨乙詩を、是は又さら〳〵と書て捨てふれたる、少くとも百度位は辭書繰ふれしならんと、ひたすら感服仕候、其昔普國の民の、永く蒙れる國辱を雪がんと妻子を捨て、軍に赴くてふ勇ましき詩、もとより面白かるべき筈に御座候へ共、何分譯文の拙きが爲、あはれ名もはしき黑衣軍の面々も生氣なく相成候、凡て斯る悲壯の詩は悲壯の語を用ひざれば、相合はぬものに御座候、あはれ脊には矢をば負はゞと誓ひてし、雄心の武士の終に、ちみ罔兩の如く死人の如く相見え候には、不思ふゝ笑み候、再讀三讀致し候へ共、是も、彼の高根の月に宿れる月桂冠れとゝて、更に相分り不申、八百霧滿りをりたる中に彷徨するが如くに思ひ居り候折柄、普國の自由れみ影ゞ赫燿と日本れ天の岩戸を出でたりとの事にて、是ぞ彼の何くれの天文學者が豫言せる地球壞滅の機に非ずやと、恐れ惑ひ候、總ゞて飜譯は尤も至難の者に有之候を、うくはしたなく滅茶々々にやふれ候ては原作者の不幸思ひやられ候、譯字は當れるや否や、今は原詩を讀むの暇無之候へ共、譯者が好で用ひ給へる、縱糸の立てなどいふかけ言葉の、西詩に數多ありとしも思はれず、例の蟹の這ふ横文字を蛇蝎視し玉へる大和歌の君なれば餘り當てにはなふず候、斯る愚にもつうざる文をうくも細に穿鑿致し候は、無駄の骨折の樣なれど、主人は花樵の君が多年北辰の文壇に戴のんとし玉ふ月桂冠の破折を痛く惜み候故になん、

次は、湖舟子が双肩脱で棹し玉ひきと聞く五十鈴の流に御座候、つきぬ流の滔々と、書きなし玉へる眞摯の詩は、もとより彼の高根れ月、月桂冠あどいふ駄洒落に比すべくも非ず、然れど其は流暢なる子が筆れ運の上のおとにて、其想に至りては、朦朧れ朦朧ある者、末句の神代れ昔ながらにては、徒に長くせんとて、朝日、夕日、風れ音、星の色などを無理に配合せられたるのみに御座候、子れ癖として、清らけく、潔く、ゆたけき、美はしきあとの形容詞を、主觀的に用ひらるゝは詩に於ける大の欠点に有之、爲に印象の不明瞭を來し、讀書をして五里霧中に彷徨せしむることゝ相成り候、重々しく環点を附せふれたる所、概ね趣向陳腐ある所に御座候、例ばゆたけき光さきだてゝ海を出る朝日を、大神の我日本を護り玉ばるしるしと見、寂しき光殘しつゝ山に隱るゝ夕日に、猛夫の胸もさけぬべきあど、余りに幼稚なる趣向に御座候はずや、唯其間を平和、愛、樂、嘆、煩、苦などの多少新しき文字もて縫ひ行のれたる、子の得意れ所あふめど、其が中々に理屈に陷る所以に御座候、殊に、結ばぬ夢を破る時の理屈極まる句に二重環とは實に驚入候、末

段の、みたまのふゆの春など、是も子が得意の所と承り候へども、單にふゆと春と辭を弄したる駄洒落に過ぎず、要するに子は專ら文辭れ上にのみ意を用ひられたるものに有之、詩想の修養今一層を要する事と存ず候、

今は歌欄に移り候、おべて歌人の眠れる今日、況して北辰誌上の歌壇の事に候へば、不相變例の雅雄、正義二子等の古めかしき歌ばかりかと思ひきや、此度は、久しく俳壇の明星と仰がれたる紫影先生の歌を見候はんとは、流石は變化に富める俳句に熟し玉へる先生の作、趣向も調も目新しくて、先づ嬉しく覺え候、中にも、

うなゐらが盥の舟に棹してさやまの池に菱を採りくふ

櫻散る櫻の中を妻れ手にひかれてありくわはれ琵琶法師

の二首おど如何に面白く候はずや、但だ第一首の江と紅葉と夕日影との配合は稍々陳套に失したる樣思はれ候、然れど、是とても、彼氣取歌人の夢想だも及ばざる所、かゝる歌の一度我誌上に現はれ候は實に晴天の霹靂、腐り果てたる歌界を刷新せる端緒とおれがしと、主人は實に雀躍れ至りに御座候、請ふらくは、紫影先生我歌壇の爲めに、其吟懷を吐露して、永くやめられざらんことを、切に不堪希望候、主人は未だ三諸先生を知り不申候所、唯今初めて其玉吟に接し候、春興五首、讀下致し候所、其調の高きには流石に感銘仕候、唯其趣向の調に伴はずして卑き樣見受け候は主人の僻見か、若草のもゆる野澤のうす綠と一氣呵成に詠み放ちたる所、中々に氣高く聞え候を、其下の句に至りて、春の淺さゞ色に見えけると小刀細工の理屈的纖巧に陷りたるは惜しむに余りある儀に候、凡て靑柳を糸と言ひて、旅の衣、めはましと緣語を用ひられたる、何とおう厭味を感じ申候、次に累々として立並べるは、例の富兒翁の陳腐なる者を始めとし、見るべき者一首も無之候、田家煙は動もすれば平凡に陷り易き難題なれど、其十余首の歌が、皆、君が代又は御代の春などの句を用ひたるには余りに驚入候、總じて此一派の歌人達は、言葉の上の駄洒落を好み玉ふと見ゐ、細煙たつふの庵とか、吳竹にたのしき節とか、又門松を見て、一夜に成れる千代の松原、おど物し玉ふに反して、愛花生の寒稽古三首は、意も新しく調もしまり、縱しやの歌は、實朝の「もの〻ふの矢並つくらふ小手の上に霰たばしる那須の篠原」の始と終とを少し替へたる者おれば、論外として、其「肩先を斬りおまれつとおどろきてさむれば寒し窓もる〻風」おど一寸面白く讀まし候、次に整列せるは歌文會とやらの披露、是また、一首も見るべき者無之、揃ひも揃ふて、春の色、春にあふみの鏡山、春の色にはぢて、春のめぐみ、遠山眉れ色淺く、雪れ衣をぬきすて〻霞の裳裾引、春の心おど樣々の愚にもつかぬ言葉を好み玉ふもれかな、さるを之に殿〜玉ふ例の富兒翁の、常には似で、「佐保姫の豐かに立てる袖の内に包める玉や白根おるらん」と物し玉ふ、神仙体に想像を逞ふせられたる中々面白く御座候、主人は歌道に就ては、門外漢にも非ず門内漢にも非ず、言はゞ闕に跨りて家の具合を見居り候者なれども、余りの淺間しさに一言申上候、其は歌は情に依りて成り、決して智を用ふべきに非ることに御座候、諸子の歌余りに智者ぶらるゝ物かゝ、中々に理屈に陷り、謎の如くに相成り候、歌は穴勝鬼神を感ぜしめ、天地

を動かさんとて作る者にては錙之、唯己が詩的美と觀じたる物を其儘直に吐露する者に有之、彼此と智を交ゆべきに非すは勿論に候、曾て扣所に「蛙さへひとふしを歌ふと古人も曰へりけん歌の道、まして言たまの幸はふ國の民草誰かは歌よまざらん」と古今集序其儘の廣告の下に生れたる歌文會諸子が、かゝる事知り玉はぬ筈は無之候へ共、其は余りに古今集一点張りにて、言たまの幸つゝぬう漢洋の詩の趣味を厭ひ玉はざるに依ることゝ奉察候、

次は俳句、紫影先生れさへ、何日におく下りたる樣見ゆる心がらにや、例の花樵人以下疎柳君に至る凡て十三句「狩人の矢に齒朶多き輪飾す」、「若水やつるべに落る星のかげ」の外は、俳句にや川柳にや駄洒落にや、一向譯の分らぬ者ばかりに御座候、而も此二句とても余り感心出來申さゞる陳套句、之には流石の主人も惡口の致一方おく閉口仕候、是全く例の心を種とし、無理に理屈を述べんとし玉ふに依るおらん、古人れ所謂心は則意匠、姿は則詩形れ事ならんと、一心に理屈を言ふ者と誤解せられ候にや、元來心を種おゞ申し候は己に過を來す基、俳句は寧ろ物を種とし心中に浮べ出づる、自然景の縮畫に御座候、然れども俳句は余り主人の知らざる所に御座候へば、是にて御免蒙り候、文苑の余りに寂しきに、最早杖を曳くれ勇氣も失せ候まゝ漢詩壇はね訪はず候、

思ふにこたびの文苑欄ほど馬鹿々々しきもれなきは、己に編輯子の御了解の事と存じ候、爾來は何卒御精撰の上、かの毎號の忠勤に己むなく捨て難きおゞの私情は、かゝる公事には大禁物に御座候、以上、月日、

燈下漫評（〇〇〇―は前號の引用文字）

食栗屋山人

謹白と至極眞面目くさつて罷り出でたる者は食栗屋山人と名告る聊か知己もおき名詮自稱のげすばりたるわからずやに候と愛憎氣もおく哂々として柄にもなき盲評を叩くゑも由來といッぱ常日頃から編輯子贔負の飛ッ栗屋主人が珍らしくも一ト檜入れたからと見せつけふれて有擊に性來の物好根性むゝ〳〵と起り申すも烏滸おれど主人の「もういや」と捨てられし所を補綴はんとの僭上から呆れ果てたる似而禿筆をひねくりし山人元より注意偖は批評などゝは盲者評鼎の誹りも先刻御承知の覺悟的仕合せにて御馳走の後の冷飯とやらたまには風變りでよしと飛だ胡麻摺のまぜ返しと出かけたは之も只管に山人が一片の衷心おる毛頭脚下照省などの用意もおくとつかはと主人の後より口の端を爪りながらに一瞥の評判を無頓着にも書き亂したる後や先せめては笑草の種丈もうゐな奴とも思召されなば山人の本懷此上なし。と申て恫喝れ責を逃れたきおゞの覺ゐは夢さら御座なく山人は寧ろ惡まれ子とおるも甘んずる厄介物にて候。いざさらば御手輕專一氣車旅行的の禿筆にたまりし溜飲を吐き出さばや。

却說体裁上の粗惡おり一事は主人も己に咳やかれし如く斯く申す山人とても聊の喫驚せしものゝ主人の御丁寧おる四度喫驚雜誌生れて此方の大失敗と迄には及び申さず而も編輯子の横着にやといはれしには山人中々に贔負目八分にて如何にも唯己が懺悔の一端と句れ相照して只何とおく異樣の感に打たれしも可笑しおゝずや終に愁然として雜誌投げ捨てたる主人の心根御仰迄もなくさ

こそと推して爰に拾ひ上げたる一節は先づ

大島教授の……ショペンハウエルは天才論

久し振にて先生の作に接す而も大に失望せり先生何ぞ奇才を表はすを惜まるゝや局促せゝるゝは甚しき憶へば先生がターレントとゼニアスを懇ろに判別して巧にカントを煽ぎ立てつ天才の何ものたるかを示されし后殆ど一周年をも越へたる今日而も思はせ振に「次回を待ち更にショペンハウエルの言に依て天才を説かん」とて筆を擱かれし以來まちあぐみなゞゝも愛想猶ほ内に渴望しやまざりし山人之はと取る手も心嬉しく開けてくやしき玉手箱守備も圖らざりき龍宮の音信は消えて可惜蜀望の夢ならんとは恐ゝく先生自身に亦あき足ゝぬ思あかちんやは文は乃ち簡にして明瞭なれ少しく先生の筆とも覺へぬ怨は己に本文は唯そが爲めの楷梯たちんことを期すのみれ謙辭は流石に御心れ程も中々に床しくショ氏の根本的哲學思想は一種の厭世主義なりと斷案せゝれしあたり迄は意義并然到底山人が容吻し及ばざる所只可然的に高敎に浴せしかど後段連りに原語を引證せられて畢竟天才は實用世界の器に非ずと終に輕々と論結せられしには（「完」とあるは或は誤植？）又山人は面牆の蒙を啓くに由なく更に憐叱を垂るゝも欲しらずまさかに先生とても之にて足れりとはおぼし給はん學理深遂なる先生あるを喜ぶゝふは他日再び高論に接して改めて高敎を仰ぐんころ望みなれ之れ山人は評判の高きものを爭ふて求むるものなればなり

史傳

宮本敎授（潮來）……佛國大戲曲家古氏の傳

聞くに此編は同先生が我校を辭して東都に迎へられんとする折編輯子に殘されし一節なりとか。前號より面白く讀まれし古氏の傳此編に至つては一貫彼の佛朝ラ、バウレットは禍は端なくも大革命の源因をなせりと傳へゝれし時の王ヘンリー四世が無殘ラバヤックの毒手に斃れルイ八世の代さしも威勢赫々佛れ面目を一新せしめし大宰相リシユリユーをして彼れ服從の氣なしと迄嘆聲を發せしめたる古氏の胸中轉だ鬱勃たる彼が奇才は遂に發してメニデーとなり更に激してシードとなり轉ずてホラースの曲となりシンナとなつて一世を風動して怨なく晩年ルキ王の恵みも浴するに及ぶ能はずして物化せし一千六百八十四年乃ち嘗膽七十九星霜れ間積みに積まれし彼が名聲は綴づて余す所なきを見る雄筆の流暢なるは固より山人の喜ぶ所なれど往年其「ラフエイット」をものせゝれたる快筆に比して聊か間然する所なきに非ず寧ろ數歩を讓る書き流しと睨みしは僻目にや

文濟子の……橋本左内

諄々たる長文層一層進説して本編は外艦渡來附たり幕府の失政より越候のよく列候に超然たるを引證し布て左内の博識卓見をいやが上に連證快斷して敢て迫ゝず末段の一結惜哉彼は毫も其經論を實行せるの機を得ずして空しく議論の人として終りしやといふに至つて心惡き迄に山人の喜ぶは特に此欄に光彩を添えゝれし浦井敎授の垂敎に飽のぬ思の名殘にては非ざるのと窃ゝに文濟子を慕ひ參ゝするは强ち好む所に致その誹を望むにもあゝずかし。

雜錄欄

由來卷中旺盛の聞にあるものゝも此欄の一得(?)

冒頭にシェクスピーヤの一詞を引て單刀那翁の述懷を叙して世路の轉變に直入し明あるべくして明なふざる問題は曰く吾人は何が爲に生れたる乎と轉じて貧富は之れ物質的豐裕の程度なりと斷ずるあたり意氣嶙峋終に社會改築の基礎は情ある哉情なる哉と結ばれぬ文の稍や澁硬なる所あきにはあらねど綿々たる氣魂何所までも無邪氣なる書生肌稜々一々山人の肯綮に中る。夜寒の虫に過去の逆境を追懷すれバジョンソンの傲岸も慕はしく子が抱懷の程もさこそ。エメルソンは曰ふ「孤獨は以て自家の心に從ふて生活するを得せしむべし然も最も難きは紛糾錯雜れ裡にありて坦々として孤獨の不羈を守ること之あり之を爲し得るものは以て大人と稱するに足る」と木寒子あるもれ須らく健在あれや。と聊か偏囑せーものは『木寒子』の『貧の小言』あり

霞生子の……我國の歌舞

題を見て先づ驚かれぬ如何に子が健氣にも易々此難題を擔ぎ出されしよと而も筆頭專ふ同書の欠を補ひバ粗放單純にして云々に照り合されて其牽索犀利能く子が識見の一斑を覗ふに足るべし便宜上沿革を四期に分たれて少しく力を盡して說らんとするものは第四期（德川時代より明治維新に至る間）にありと云はる本編に載する所は固より朧氣なる神代の卷寧ろ子が文章れ趣味如何を彼是申すは愚專ふ其蒐められたる親疎に依て謝すべき(?)をこそ妥當ありと思へば山人は只管僕指して次號を待ち更に聊の山人の心得をも述べんと期そのみ。

ハ氏の……"Schools at Oxford".

ユン氏の……"Lautmalerei in der Sprache".

外人の文を載せし事今回を以て實に嚆矢といふべく自今本誌も如何に光彩を放つかと思へば一に山人は本誌の爲めに賀ぶと共に亦活版所內一人の英字を解するもれあしと聞けば編輯子の校正嘸かし煩勞のこと察せられ徒らに誤植を咎めて其眞價の如何を無視する輩の爲に山人は別けても編輯子に代つて取らざる所ありといふ山人亦二文特に獨文に至つて殆ど五里霧中の間に眼はれれづと文苑欄にうつりしも笑止ゝらずや。

雅文、新体詩、俳壇、等は主人が己に精透道健の筆にて殘す所あく搔き廻はされしと見たれば一圖に乘替を急ぎつ賄て漢文、詩壇に飛入りたる山人は此所は名だゝる峨々たる山岳の脈々として恰も豆腐料理の後にいり冷ましのゑんどう豆を馳走されたる如く流石に山人も澁面作りながらも性得の下士根性は制へ難く其儘窃と味ひ申せば偖も意外の味のよさ主人が前壇の批判に團扇を上げたるゝふは之は無論前壇とは月鼈の差と賞めそやさん中にも嶄然頭角を拔出でしと見しは明石講師（華陵）の福善禍淫論（漢文）。金井講師（秋蘋）の新年作（詩）にぞある。

村上教授の……藺相如論

之固より山人が評隲を贅する迄もなく悲慨の情詞句の間に躍々たるもの例に由て先生が老熟の筆致末段孟軻の浩然之氣云々を以て結ばれし所一層其深淵を覗ふに足る

明石講師の……福善禍淫論

山人は先生の文に接する日尙ほ淺しと雖も蛟龍豈雲昇を期せざゝん圓熟洗錬の妙手は己に識者の定

評あり山人は切に重ねて示教に接せんことを望むのみ。

荒岳子の……擬大塔王獄中上書

一讀再誦宿心轉ゞ慘憺たる悲憤の狀に飛躍し禁せざるもれあり雄健透心の筆連々たる兀山の中一荒岳ありの名に背ゥざるゥ其句讀を落して徒ふに險澁的視覺を與ふるは子の爲に惜むべき限にこそ

金井講師の……新年作

蓋し先生が近作中の白眉なりと見しは否か律意深くして味遠く吳下誰知舊阿蒙。依然傲岸向人雄。の起結兩句殊に雄渾妙律は躍々逸飈雅醇の致あるもれ加ふるに竹亭伯の同律亦一段の彩佳を添ゆるあり先生の得意思ふべきのみ願はくは自今更に風雲を捲て高く靡然として斯界の鳳雛と提げよ。

君峯。竹溪。梅塢の諸子之皆斯界の龍種たるもの中にも山人は君峯を推し昔日の香陽子たふしめんと期すると共に香陽其人の逸調を慕はゞとすれど慕はるゝも奇し鈎外子の二首は之れ金井講師の斧正に成るもの元より惡のふゥ筈もあゝ春太郎子に至ては稍や稚氣の宿ふるゝと見るは聊か恨事なりと覺ゆ。竹溪。梅塢の二子は由來伯仲の……興に乘ゞて禿筆を走らすに他意あき折ゝも一斯道に趣味疎ゃ山人何ぞ人を瀆すことの甚しきゞと主人に叱かられて本意あくも渚日暮れぬ中にと村醪一碗更に勇を鼓して

雜報欄にと走ふせぬ。

「貞宮殿下の薨去」の誄は山人謹で三誦悲風慘として哀悼の情禁すべくなく只管暗涙に咽ぶのみ遂に文れ功拙を敢々するの勇なし。嗚呼新年は山人何となく歳晩の感にうたれ嗚呼の感嘆詞宜なりと合点し迎新年の簡素あるに至つて少しく溜飲を下げたるも殿下御薨去の哀悼に誘はれし故なるにや。神機一轉はれのづゥふ眼喜ばしく洞中天は喜悲交々胸を衝き青年歌文會成るを謎的に感服し清玩與料は編輯子の片手間とやう〳〵推心錄に辷り込めば『孤憤生』の『敢て赤誠を披く』あり眼を迚ふす儘に之ゞ神機一轉の片身かと極めて沈愼繰返すこと三四回流石に子が得意の聲調一轍渾成の文險澁少ゥらずとせず全文を四段に分つて末段苦學するの二三子あのふんやといふ所一人の親切なる會計係を得る能はざるゥと結ばれしほとり子ゞ周到ある正察は特に山人をして肯づゥしめぬ。寸鐵の一口上辭裏往々露君が撰擇の苦心煩勞も察せられて忠僕たるとの覺悟嬉しとも謝するに辭なし誰ゥ又金玉の什を惜むものあらんや。

編輯子れ稍疎忽ありし(?)の点は今更に咎むるにも及ばし山人は只逸はやく次號を手にして更に諸君の玉條を眛はんと期す先輩を瀆せし恐ろ〳の罪科は主人の首を刎んと望む定丸郎與一兵衛の出刃に斃る的咄嘆の間違もあらゞ山人の幸に望む所と小聲の咳きもつい聞き付けふれて主人の御目玉を喰ひし山人恐れ入つて默すれバ更に井に聲あり曰く「苟も他人の思想を是非するはこれぞ他人の自由を是非するもれなるを忘るべかふず又評者たるものは其力よく被評者の上にあるの少くとも同等あるべきを忘る可ふず」と山人重ね〳〵閉口して恐懼おく所なく爰に食あたりと僞つて田鼠の如ゞ戸の口三寸出でざること遂に三日明れば今や學期試業の難題は將に山人れ頭上を

壓し來らんとす呵々。

十出る智恵の九つは夜　紀逸

雜報

春

春陽來ること遲々たる北陸の地もいつしか梅花まがきの外に笑を含むの好時季とはなりぬやがて春風駘蕩櫻花兼六公園に爛熟たる艶陽の好景に移るも近きにあるべし北陸星辰校六百れ健兒よ。汝が奇骨稜々嚴冬に鍊ひ上げし天晴れなる崇高峻嚴の意氣を春の思に醉はしめて俗化せることなかれ朧にかすむ春の夜の月。さき亂たれる櫻花を照すの美觀は魔神が汝をとゝかすの利器なり。由來青年の意氣多く花月によりて損ず。心せよ六百れ健兒。春は汝を狂せしめ迷はしむるものあればなり。

春草

春の自然を樂まんとするもれよ。速に熱鬧糞壤の巷と遁れ。かの目も遙かなる野邊に行けされど花ある野邊は避けよ。そは花ある所俗物これに圍集して浮かれ〳〵その美を沒了して自然の美忽ちに消え去ればかり。只一面に翡翠のしとねをしきつらねたる若草の踏めども〳〵新なる野邊を擇べよ。そは實に若草は佐保姫が工の極をつくして彩色れる美の粹なれと俗人はそれ眞價を知らでその汚れたる足跡の少しもそれに印することなければかり。

嗚呼宇宙の美はしきもの天にありては浮雲水にありては煙波人にありては詩歌地にありては芳草にあらずや。試に歩を運びてそのしとねの眞中に立てよ汝が目は必ず新らしき春の色を見。又そが爲に岸を彩色れるいさゝ川は汝の口に新らしき春の水を呑ましめ又そが中に歌へる雲雀は汝が耳に新なる春の聲を聞らしめ而して新らしき春の思は油然として汝が胸中に湧き出で來

るべし。

汝よ試に仆れてそれ翡翠のしとねに臥せよ。汝は忽ちにして、きびしき浮世のきづなを斷ち襤褸の如き現し身をはなれ搖檻のがんぜなき昔にかへり失望を忘れ憂鬱を去り悲嘆にはなれ若草の間を黄金の羽もて飛びもくヴーナスの大神は戀と愛との流を汝が全身に漲ふしめ汝をして莞爾自然が現せる幽奥(ミステリー)に打笑むを得せしめむ

汝よ試に眼を放つて望め輕風は遠より香を吹いて悠々綠波を躍ふしその間を縫へる小川は斗拆蛇行羊腸潺湲として流れ來り近つくに從ひ岸頭の若綠はその清き面に寫されつ翠色自ふ滴らんとし又それ間に散在せる事々物々皆汝が心奥に深きインプレッションを與へ此境を護れるパン神は全く汝を仙化し終ふむ

汝よ試に筆を把り紙にむかへ芳草の間に点在するもれ聞ひるもの皆一部の詩歌集とあり牧童も農夫も村笛も野歌も乳牛も雲雀も皆多少の風調を帶び歩武ゆたかに芳草れ上を逍遙せるミューズの大神は汝をして直に金玉の句を紙上に躍如たふしめむ見よ湖國の詩人ウォールッウォースは何故に芳草の間に立ちてその美はしき不滅の自然詩をものするを得しゃ「ビーナス、アント、アドニス」の作者は何故に妙齡の美女と美少年をして萌るばかりの青艸のうちに彷徨せしめこれに對してアドニスの牽ける若駒の戀を寫したるや。何故にコールドスミスをして「荒村」なる彼が傑作に若草の間に戯れて樂しき昔の面りけを寫さしめしや

あゝ眞の春の美を知ふむをするもれよ速に來れ翡翠のしとねはやはふうく汝を待ち潺湲たる小川は翠痕を掬する汝を招きヴーナスの大神は汝をいだかむとしパン大神は笛音高く汝をよびミューズの大神はエオリアンの琴に合せて幽聖玄妙の詩を奏し汝の筆を揮ふを助けんとせり來れ來つてこの踏めども〳〵新なる春草をふみいて春の思に碎れ汝が靈をして宇宙の眞善美と融合せしめよ

偶感

慷慨悲憤苦なるが如くにして苦痛にあふざるなり血涙熱罵怒るが如くにして怒らざるなり憂惱と云ひ鬱悶と云ふ皆然り單に其半面を觀は卽ち苦痛の極なるべし然れども其裏面を見よ微笑の天使は常に我頭を撫でゝ其天國を指示しつゝあるにあふずや然ふずんは我輩豈一日もよく生活せんや。多く泣き多く悲み多く憂ひ多く苦むものは多く笑ひ多く喜び多く樂み多く興ずるものなり人生の樂しきは其變化多きにあり然り實に然り我はこれを以て彼れ泣ふず憂ひず悲まず苦まず焉然枯骨の如きものの憫むや深し（無涯庵主）

詩歌壇

それ詩歌は實に人間が心胸の美妙なる琴弦にふれて發する神來の曲にして以て人間れ理想を高くすべく鬼神を泣ふのしむべく。山河をのへすべく泣くものを笑ましむべく。怒るものを喜ばしむべし誠に史を繙け遠きは希臘羅馬より近きは今代に至るまで如何に詩歌なるものの一國の思想を代表して高く九天に響くのは一目瞭然として明あふん。近時本誌の詩歌壇振はざるや實に慨嘆に堪へざるものあり。嗚呼秋竹子去つて子の後を繼き俳壇に雄飛するものあきゃ、笹舟愛花文濟の諸氏何ぞ奮はざるや。香陽子去つて子が後を襲ひ騰出。漢詩壇に横行濶歩するものなきゃ。君降、梅塢の諸氏何ぞ大に奮はざるやてと に黑子軒子の如きは陳腐いたづふに古人の糟糠をなめて得々然たり何ぞ急に此境を脱出して斬新の題目を吟せざる。而して和歌壇の如きも正

義雅雄の二氏只古人の陳套を縫合するのみにして少しも舊面目を改めず愛花氏時に新調の句を詠ずるあるもまゞ圓熟の域に達せざるあり。次に新体詩壇は頗る幼稚にして未だ頭角を題するものなし嗚呼如此れ詩歌壇他高校の詩歌壇に比して遜色おきの。それ科學者にても醫學者にても詩歌の趣味を知らざるものは人間としてれ要素を缺きたるものなり況んや文學を脩むるものに於てをや。何ぞ詩歌の美を知らんとするの諸氏速に此詩歌壇に來つて汝が心的最奥の弦琴をふるはし餘情嫋々神韻遼遠眞に高渾幽妙なる響を出さしめミューズの大神の與ふる月桂冠を汝が雙手に捧げざるや(白貢生)

青年歌文會に寄す

或人は曰ふ和歌れ形式を數學上より算ずるに五十餘桁に過きず到底詩才を伸はず可きの形式に非ずと餘り殺風景の言なれども斯れ如き言を發せしむるに至りしは歌道の振はさるを證す可しと存候

所謂歌人が六韜三略と爲す者は古今集始二十一代集等に御座候而して此等幾萬れ歌に就て金玉の佳什おきにあらねども多くは幼稚にして單純なる者に候はずや。櫻は散るが惜しい。梅は香がもかゝい、なぎゝ云ふことを何百篇繰返したりとて其當時の人はいざ知らず到底吾々には何等の感を與へ申さず候。譬はゞ彼等歌人は同じ水を茶碗とか鉄瓶とかコップとか手杓とか又は硝子瓶釣瓶なぎゝ移し代へたる迄に候。吾々は固より器物の變化をも望み候へども寧ろ內容が或は葡萄酒或は日本酒又は珈琲茶牛乳と變化したふんには面白かふんと存候。

青年歌文會の成るや吾々は大に望を囑し居候何となれば諸君は徒らに短冊を書き汚し又はぞるころれを置き代ふるを以て能事とおす輩に無之ことを信じ候へはなり、諸君は詩の美神を迎へんとせふるゝなるを知りけれバあり、されど今將た如何少しく失望に御座候吾々は必しも新を競ひ奇を衒ふを好み申候はねども進歩といふことは何事に限らず事物の生命と存候只願くは諸君が開拓せふれんとして未だ成さる歌道革新の先鋒とあり彼等殺風景の論者をして口を噤せしめふれんとを祈候

○吾人は和歌には歌文會あり俳句には北聲會ありて會員諸君の詩神に忠なるを喜び候されど短詩にせよ長詩にせよ等しく詩たる以上は決して城壁を設けず新体詩をも試みふれては如何と存候(野人)

推心錄(三)

○謹白、閣下が夙に烱眼を以て、諸般の刷新を期圖せふれ候は、己に內外の均しく敬慕する所に御座候、思ふに是千歳の一機、逸す可からざるれ秋に御座候得ば、茲に生等が平素遺憾に堪えざる一事を申上候て、ひたすら閣下の御憐察を願上候、其は余事にては無之、圖書の整理に關する生等れ獨望に御座候。生は曾てスコットれ小說を讀度き事有之、之を圖書館に求め候ひしに、其「シーリーズ」一冊も無之、余りれ驚きに、一寸其放を相尋ね候處、一教授の皆持ち歸へふれ居り候との事にて、遂に得讀み候はざりき、其頃は、群書類聚なども、二三卷のみ殘れる有樣にて、誠に不都合を感ずたる人少からざりし樣覺え居り候、今頃は如何にや、相知り不申候得ども、時々當時生のと同一の不平を漏ふす人有之候樣見受け申候、元來生等は教場に在りて、先生諸賢れ「レクテュア」を筆記せる者に候得ば、何も不都合無之樣相見え候へども、決して左樣にては御座おく候、何か科外の研究を要する時などは勿論、學科に就ても、擔當先生より、其參

考書を示さるゝことと通常に御座候へば、縱ひ之を讀むの學力無之候とも、一度位は目に觸れ度き心地致し候は、何人も同一れ事と存ず候、其時一々之を購求するなどは以てれ外の事にて、先づ依賴する者は圖書館に御座候、早速圖書館に馳せつけ候時、圖書目錄には歷々と明記しある書物の手にある能はざるおそ程遺憾なるは無之候、夫も其學科擔當先生の許に有之候はんには、何れ「レクテュア」として聞くことを得る者とわきふめ候ても不苦候へども、若し其擔當先生にては之なき、云はゞ局外の先生おそゞ許にある事を知り候はんには遺憾一層の事に御座候、右は頃日テリー氏新著の「コンモン、ロー」を見んとして、同じ運命に逢つる一友の實驗談に御座候、日々敎鞭を執られ候先生諸賢の該博を要せふれ候は勿論の事に御座候へども、其敎授せふれ候學科以外の書冊を持ち歸へふれ候が爲め、學生の不都合を生ずる樣の事有之候ては、生等の信じ居り候所の圖書館は專ら學生の爲めに設けられたる者おりとの旨意に違はざるかと疑はれ候、斯く申候とても、敢て諸先生の圖書持切りを廢止致さんとにては無之、唯其間何等の制限を置かれ候はん事を望むのみに御座候、尤も其制限と申候へば、語癖有之候故、異樣の感念、則ち先生諸賢の自由を拘制する如く相聞え候へども、決して左樣にては無之、唯學生保護の精神則ち學生の勉强を便にそるの旨意に基く者に有之、先生及學生兩者の便宜を比較して相對的に相定むべき者に御座候、今試に其制限の一端を申上候はんには、

學校規定の各學科に關する圖書館書籍は、其學科擔任れ職員れ外、一切其自宅借覽を許さず。

學校規定れ各學科に關する圖書館圖書は、其學科擔任に非る職員は、學生の借覽せざる時に限り、其自宅借覽を許す。

の二項中何れか一を大綱として細に及ぼし申そ可く候、若し夫の學科に關せざる書籍に關しては、職員に對して特に學生を優遇するの理由無之、寧ろ德義上、職員諸賢の便に從ふを穩當と存ず候、唯學生の之を見んと欲し候時は、各自其之を所持せふれ候先生に請ふて隨時借覽可致候、然れども、一學科に關する書籍の場合にては、其學科に親密の關係ある學生と其學科に關係おき(縱し多少はありとするも)職員と、兩々相計量して、其何れを重んず可きやは、識者を待たずして明おる所に御座候、今や校運發揚の機運を見て衷情默し難く候まゝ、辭を撰むに暇無之、失禮れ言を爲し候次第、切に其愚を矜み、其罪を錄せずして、御採納あふんこと偏に奉願上候、恐懼再拜、

三月　編輯室にて　露濱郎

雪中行軍

遼東千里れ大野を吹き荒らし寒濤澎湃白泡空に飛んで雪を降らすの日本海を越へ來れる寒飈はすさまじき勢にて怒吼咆哮しさおうら脩羅大王の荒るゝが如く飛雪は紛々としてこれが爲に散亂天地に滿ち十里の山河又皚々として萬目茫々白布を纏ふが如しこれ蓋し北陸嚴冬の景色にあふずや。おれ嚴冬に當つて我校雪中終日行軍の擧あり、大學豫科二年生醫學部三年二年生よりおれる二百有餘の健兒は武裝嚴然隊伍肅々として早晨肌を劈くの寒を犯し金城々下を出で道を粟崎街道に取り粟崎を過ぎ北海の濱に出づ而してこれより大野に至るの間敎官の指揮に從ひ假設敵を設け戰鬪行軍の隊伍を組織しやうて戰鬪を初む、此時まで霏々繼續し來れる降雪は俄然其勢を增し加ふるに豆大の霰粒雨注し來り寒威

凛烈指を墜すの思あり而して積雪時に脛を沒し歩頗行る難きも衆皆勇を鼓し氣を張り疾走以て敵を追ふ想起す日清の役數百の貔貅が遼東の野堅氷髭にあり纊繒温なるあくして指を墜すも英氣颯爽屈せず挫せずゥの逃遁する豚兵を追躡せしもかくやありけん。己にして戰鬪を終れば恰もこれ正手皆桑畑の間に立ちて手飯を喫せ其間飛雪は絶へず其上に降り注ぎ手凍へ肉縮み恰んと堪ふべからざりしも北溟の野に育ちし健兒のいかでかこれに屈すべき。覇氣は天に冲して斗牛を呑み豪氣は堂々乾坤を覆ひ八荒を呑むが如し。衆壯快の狀を眉宇に溢ふし相顧みて莞爾たりき。これより大野を過ぎ金石街道に出で又再金城々下に入るこれ蓋し勇壯快絶の極にしてかの一、二、三高校の健兒等が夢想だも及ばざる所なり越へて數日其當時を想ふに猶心血奔躍熱沸豪氣凛々として鳴り紫電馳突飈を拂ふの思あり(葉生誌)

落花一片

英邁の資を有し遠大の望を懷く青年にして一朝不慮の難に罹り空しく北邙一片の煙と化を人生の恨事何者ゥ能く之に過さんや久城賜君は千葉の人昨夏我校三部に入學せふる未だ久しからずして健康を損し歸りて病を故山に養ふ一日令弟と相携へて銃獵に出で銃を樹枝に懸けて憩ふ誤つて銃地に落ち轟然發火し股に傷さ遂に長逝せりと生者必滅は是れ理のみ吾人氏と交を結ふと長のふずと雖も情に於て焉んぞ忍ふを得んや春風已に落花の嘆を殘し秋月亦雲雨の恨あり旻天何ぞ夫れ無情なるや

氣魄稜々

薫風徐ろに嫋々として南枝先つ齎す春信、漸く曉靄蒼々として柳眼は將に眠りて暗のふんと急く、絳桃霞を裁するあれば碧李亦雪と綴る、野邊の若草雨毎に萌もる綠に交る董も美しく、陽炎のうら〳〵と野をも山をも霞こめては景象渾て新妍、明けもく天に花の香迷ふ番ひ胡蝶の後や先、揚る雲雀に誘はれつ登る氣にある廣坂の綠いよ〳〵深うして、池畔の田樂よく客を招き、城頭の兼六花明にして乙女の袂に薫るもついぞ今、夕陽將に西に沈んで一刻千金月朦朧の夜は來る。見よや燭を執つて雨夜の海棠を見る如く、漫々たる長夜の眠を破つて船頭に銀山を捲くれ氣魄稜々

○誠會　所謂英雄首を回ふしてれ神仙、吾人は今敢て喋語の用もべきなく、陸離光怪幾んど端倪すべくもあらぬあり、琥氏東湖が正氣れ詠は以て此會の旗旄には非ざるか、知ふず帝則に遵ひ思はず稽へずして王道を行ゥしむるの魂膽、執鞭の師は誰ぞ、夙に下道を齟で豪岸磊々其名もしるき三竹教授其人なり、可至誠至信滔々たる天下亦豈に管鮑の徒王院れ輩を得るに難かふん、天外聲あり花よく香ばしからば蝶自ふ來らん、露誠に清くんば月盍ぞ宿ふざふんやと。

○軍神談　戰雲疊々熒煌爍として征衣將に何れの處、鐵脚正に何れをゥ蹂躙ふんとす、春花嬌嬈山紫水明の地、地祇爲に喜び迎へ江山笑と含んで校師を戀ふが如し。

○龍神躍る　老鶯正に去ふんとして鵑吾將に滑かなふんとするは未ざし、磯の松霞みて帆影搖ぐこと遲く、水天一碧漁歌靜かに起る處白鷗亂れ飛ぶ、見ずや敷、瑞、葦の三艇水沫と蹴て一上一下清趣徐に壯絶ありや、遙かに想ふ洞庭五湖の秋、湖神躍つて諸士を待つ如し。

○寒庭落寞　球神特り快々として樂まず、何が故に諸士は之を慰めざる、時なふぬ花は一

陣の風に敢なく消え果てつ、歳寒うして後に凋むを知る老松は獨り校庭を我物顔に、亭々として傳藏ぬしの昔忍ばれぬ、何が爲に諸士は之に競はざる……苦言用なし果然告野球部員の五字扣席に墨痕琳瑯、球神涙を齟んで諸士を慕ふが如し。

○法理演習　清晝日長うして春雨軒滴蛙鼓を奏するの窓下、油然たる思想は凝て胸に充つ、心靈蠢として微なりと雖も之を舒けば六合に横はり、六合は茫として廣しと雖も之を卷けば一心に藏まる、吁區々たる此身此心れあるあり、見よ山川は逶迤として千峯秀を競ひ、雲霞は爛として卷舒出沒す、天地の美や今此に在り、乾坤の優や此に聚る、何ぞ尋常の間に寓して天地に充塞し難しとせんや、遮莫生者必滅は之浮世れ常、爛熳たる櫻花尚且つ夜半の嵐の吹く儘に、團々たる草露尚且つ朝瞰に消ゆ、吁警醒の壯圖や今何處靑雲の快望や今何處？、爰に超然雀躁の間に立ち、鷄鳴一聲幾多の陋習を刷新し、特に有志の靑年を敎導し、處世の要訣を講究し、兼て精神的養成を以て自ら任ず、堂々百端寓目千緒、情に動き意に通ず、一片の優懷を要めて、憂然として晴空の上に長鳴せーむるもの、憂苦をーて安易あるハンモックの裡に安眠せしむるもの、心靈をして覺醒せしむるものは、誇吹一番吾人は敢て法理演習の眞旨かりといはんのな、之が裁配は矢板敎授專ら其責に任ず、氏が眞率ある誘掖は加ふるに入江敎授が輔翼のあるあり、語不驚人死不止と杜少陵が力味も物かは、誰か又敢て味噌の味噌臭しとの俚諺を吐らしめんや、吾人は元より其最も欠望そる所のものを要むるに於て已むべかふざるもの、恰も餅やの主人は却て酒を嗜む者あるが如く、蓋し好む所に致すの誹あるを望めばあり、渴するの時正宗の一瓶を味はふが如く、飄乎として身は塵寰の外に、功名富貴我に於て浮雲の如き感あふしむればあり。編輯子亦幸に其末席を汚すの榮に浴せり、進で快く紹介の勞を取るに忠たふん、諸士盡ゞ其天授の妙想と獨特の靈腕を奮て投せざる、哂々得々嗤て收むるものは、一生徒羨執金吾、來れ滿校熱誠の士。

○演說會（概況）　幽窓更に幽あり、沛乎たる感奮は遂に發して爰に蘇張の辯を欺くもの、寒夜朔風吹て骨身凍り、雨滂沱として人を襲へるにも似たふんかし。

△鉄道國有論……稻垣文次郎君

開口一言の注意として鉄道は宜く國家の所有たるべしと云ふに止まり所謂黨派的提灯持はせずと御斷りも面白く徐ろに草稿を取出され

て國家が生存目的に適當する文明を進むるの機は一に敎育一に通信一に交通の中特に交通に重きを置くの所以なりとて交通の不便は恰も鳥に翼あく獸に足あきが如しと社會の程度の高低より交通れ不振を慨して我國の國是を國防、貿易の保護、鉄道國有に歸し以て鉄道を人体の血管に比して諄々私設の終局目的は博利のみと其欠点を列擧し軍事上よりも政治上よりも國有たるに如かずと論し終に之を世界各國に徵して其官私の多少を比研せられて結ばれぬ。句々切々面も連りに草稿に依られー爲の玄旨多くは隱れて只記するに倦怠を惹きしが如き怨は頗る君の爲に惜むべーと雖も次回に報酬的快辯を約ーて露子は僅らに首肯しぬ。

△次で登壇せられしは矢板敎授早速に稻垣氏の說には鉄道轍尾贊成はし難しと哂落ふれて突

然のおとおれば格別用意もなく今日は一つ方向を轉ドてと御仰の如くレクチュワー的に述べふれし演題は記憶法の一法。

先づ記憶の意義より把持再現のエレメントは(一)、接近(二)、類似(三)、反對(四)、因果の干系より成る乃ち要するに接近律因緣律類似律に依るが故に能く之を利用すれば本意卽ち成るべしと話頭を轉ドてデンマーク人クォーテなるもの巧に獨字れ子音を數字に代へ一法を案せり今之を指示せんとて記されしものは乃ち

1=d,t, 2=n,v. z=m,w. 4=r,g. 5=s.
6=b,p. 7=f,pf. 8=h,j 9g. 0=l,z.

以上を事實とコンヲクトして用ゆ歷史と地理に一例を擧れば

1). ホーマーの年代を知ふんとするに其人詩ありと記憶せば足る乃ち

lebt Homer Gesänge
9 5 2

2). Columbusの米發見のデートを知ふんとすれば der Genuaner.
1 4 9 2

3). 羅馬のコンスタンティンが獨裁の帝となりし時のデートは Mo na rch.
3 2 4

宜しく之を利用して浦井教授を驚ろすも可ならんと先生得々語を次で

之を地理に徵するに

4). 佛國の面積九六一七平方哩といふを記憶するに Gebiet Franke.
9 6 1 7

5). 紐育府の人口一二三〇〇〇〇〇とすれば之を記憶するに Die New Yorker.
1 2 3 (000)

6). アムステルダムの人口二八〇〇〇〇とすれば in Holland
2 8

又之を遊具に利用したるものはトランプを十五數並べて九ッ目は必ず消ゆる樣におと方法は Peisende mithen in Medienlande.

に依て知らるゝおり之は英佛兩國人同乘して地中海を過ぐる時難風に遇ひ何れのビクティムたふんと互に奸手段を取りしも最后に佛人十五名は殘て英人は悉く海に投ぜりとより案出されしものおりとか。

終に望み自己の經驗に依て注意せんと七養件として(一)、思ひ出す力(二)、書付ると(三)、時と場所(四)、覺ゑんとするとを寫すこと(五)、覺ゑんとするとを多く人に話すと(六)、不愉快(七)、亂雜……云々

を以て壇を降られぬ記ーて頒つものは露子の忠か。

△櫻花は日東の花の……石田福松君

怒鳴的口調に先づ度膽を拔かれ可惜名句も記すに由おけれど故鄕奈良の御自慢より櫻花と共に遊び共に死ーて骨を埋む日本男兒と叫べれしあたり東湖の瓢乎々々に擬せふれし櫻の賦を口吟さまれし氣燄さ（此詩は前號の詩壇に載せたれば再錄せず）我國の天地は一のパラダイスおりとて外花の比較研究より古來英雄の詩歌を引證して日東の花の比類なきを說おれ終に方今學生の品性を痛論して結ばれぬ冒頭に於て君己に名告ふれし如く確と初陣の功名仕損せふれー怨は却て爲に賀ひこそすれ敢て惜まず絕句偖は間投詞に聽衆れ耳を擽ぐる嫌を遁くるは瞬く間能く君の熱心にして撓むとおのらんには恐らくはシセロが典麗も亦何ぞ得るに難からん若し盡言を咎むるなくんば幸甚

△校風論……清水賢一郎

習ふより慣れる一種の感化力と冒頭を置て孟母の斷織より校風のよく學生に及ぼす感化力の大なるを說き之を外に徵してはとヲックス

フォード及ケンブリッヂ大學の最大目的は學術のみならず感化にありと之を我に求めては吉田松蔭の言行如何に能く門下を風靡せしのと述べ現今の教育者が校風に目を注ぐと稀に教ゆるのみ素志頻なるを嘆じ降て小學以來れ教育法より大學生の無氣力ありと傳へらるゝを慨して我校に對する宿望は威風涵養にありと終にアダムスミスが富國論は漸く今間接に行はれつゝあるを見れば本辯士れ望若し他日其慾を充すれ期もあらんかと借上面白く切上げられし御愛嬌事理明瞭又叱聲に難少し賢氏是に於ての意氣昂然田中氏と入れ代る。

△未定演題の下に田中秀知君は起てり盲蛇におぢずとの謙辭も心にくゝ清水氏已に我言ふ所を先んぜられ云ふに苦むと御愛憎もよく強て題せゞ品性陶冶の基礎なりとて現今の青年が惰怠を難じて國家の元氣たる社會の要素たる青年にして此れ如くんば倫理の薫陶亦何の効あし宜しく品性の陶冶涵養は其家庭、長者、朋友の助に歸するを得るも而も一に素志の斷行と意義貫徹とに依らずんゞ能はず前辯士が云はれし校風、元氣、武士氣質、亦偏へに其品性の如何に由るのみ品性ある人にして妄りに道德を口にするは恰も砂上の文字と一般ありと徐ろに愼で重く而も巧に其家を作るに當り其礎成らば造作を要するが如く次で起るべき問題は處世なれゞ此品性の陶冶成て后初めて倫理の如何なるものをを云ひ得るれみと咳一咳悠然として降壇せらる聲調雄快ならずと雖も文理井然滿堂聞とーて謹聽せられしも宜あり。

△カケ德利……安田力君

二竪と推してとの御斷りも可笑しく牛肉を美食とする吾人も日々常食とすれゞ飽りでやは之と同ドく高論名說亦然らんに今カケ德利あと取り出して諸君と共に杯一きこしめさんとするは僕が厚意のみ諸君宜しく演題なふぬ出放題なるを咎められあと滑稽交りに說出されし君の得意露子聊の不平ながふに聞けば偖も意外下宿屋樓上のカケ德利に新酒の一酌は增稅案通過一点の涙と化し更に轉ドて一片同情の涙となり社會の進化するに從て涙少きの傾あるが如しと之を遍く自身に徵して寒夜更闌くるれ時獨り遠く聞ゆる蓋菱やれ聲にあるは又寒風吹て骨身凍り火閣尙冷を訴ふるの時犬の遠吠迭りにカントウ飴やの聲にも「カントウとあて字にかけは寒き冬聲聞く夜そ尙も寂しき」の腰折を吐くの意あつて而も尙彼等の爲に一片の同情を表するの涙なきと嘆ずを布て野に菜色あるを知て增稅案を通過せしめし當局者も果して同情あるのと疑ひ更に延て教育者のコンダクトより接して學生間の同情乏しきを痛嘆し古英雄歷山、那翁の徒に一奸雄視せんのみと以てワシントンが南北戰爭に於ける事蹟よりバイロンが希國の爲に命を致したる熱血偖は南洲れ功德を賞揚して古來英雄の眞價あるものゝ事業にして未だ一片同情の涙あきはあらずと快よく結ばれぬ。之れ所謂「瓢簞のふ駒が出る」といふもの出でゝ益々奇なり奇にして愈快なり快にして而も慨あり之をも當日の白眉なりと屈押さんこの言ふ勿れ前坐を凌ぐ腕は多と眞打の値ち君確かにあり。

△非鐵道國有論……高瀨修良君

要するに君は鐵道買收の不可を論ドて絕對的に稻垣君の國有論を反駁して民有鐵道に危險ありといふ者は鐵道條令を味はぬ者ありと迄難じ國体の異なる点より之を外に比すべきに非ずとて之を經濟界に論じて切りに官設に不

始末多きを列說せゝれぬ壯士的痛辯は元より有難からざるも爲に稻垣君が顏色昂ゝざるもの多々高瀨君なるもれ聊か得意に成て可ならんか非か

△吾々……松山堅太郎君

君は學生の只管塵界に喰喘して名利に汲々するを難ずて昔獨の一先生書生に禮を重くせゝ理に曰く彼等は雲昇を期そる蒼龍かりと果して后夫のルーテルを其書生中に出せりといふを引き目今世間の冷々として吾人に同情の薄きを嘆じ舉世滔々彼等が眼中一に利あるのみと痛め吾人將來實力の養成より一に盡國を期すべしとて結ばれぬ抑揚なき重々しき口調も能く難なくして切り拔けられしは一に彈劾的否豪腹的態度の一得ありしに由るなり。

時正に晡かり詰かけし辯士も尙ほ扣ゆるに是亦安田氏の所謂美食を重ぬるに飽くと委員の遠慮にや堂々更に他日の會見を期さんともたゝて爰に散會は告げられぬ。嗔中聲あり叱して曰く何故に當日の白眉たる高見之通君の卓說を錄せざる加之尙は刑部外次郎君の高論さえもあるものを汝何を以て其責を負はんとするやと露子恐懼答ふる所を知ゝざると多時僅々に唸て曰く聞のざるに非ず亦記せざるにもあらず而も之に及び難き所以のものは可惜名說を妄評に汚さん恐と切りに飢の誘ふるあつて錄するの勇なきを如何せん請はくば再び詰る勿れと怪聲復云はずして去る（露子）

春水將生君速去。此江東下我西行。

黃景仁

第四高等學校青年節酒會廣告

今般本會々頭左之通推薦仕候間此段會員諸君へ謹告候也

青年節酒會幹事

會頭　高安敎授　副會頭　今井敎授　幹事　古川義天

幹事　西野忠次郎　同　田中秀知

第四高等學校青年節酒會會員名簿

通常會員

法科三年

宮村隆治　江尻廉郎　岡八佐伯敬一郎　長野幹　今西良雄
大道良太　鷹取鶴次郎　小川藏次郎　三好程次郎　八木重三郎　福田醇
池田繁　加藤英重　鷹見茂倉茂範行　渡邊忠壽　高梨恂一
刑部外治郎　橋詰益彌　下里敬　阿部善次　秋澤貞猪

文科三年

古川義天　字佐美全賢　喜多川實　阿部壯二　小川廉三郎　植木隆太郎
佐々木菊若　田鶴藤次吉　佐々木嘉哉

法科二年甲

柿原龍彥　杉本鉉吉　池田亮造　二上兵治　秋吉豐治　石田稱松
松山堅太郎　清水賢一郎　佐々木久二　森田作十郎　秋田彌之助　安田力
木村德之助　高瀨修良　市川友次郎　大津胖　幸島眞治郎　榎戶利吉
佐々保壽　米澤稔　稻垣文治郎

法科三年乙

勝野誠吉　松村大吉　光町三郎次　田中秀知　德田虎雄　中村了
遠藤八千代　伊藤直雄　谷欽次郎　牛木新吉郎　長屋權太郎　宮崎清則
福間千市　金山季逸　美濃部秋樹　押原參吉　生木政之進　騎田龜太郎
三浦音一

文科二年

森部孝郎　芝田徹心　西村清之助　生川守彝

法科一年

鈴木萬平　松倉一見　佐竹時之助　竹花武壽　日下三造　宮崎稻作
新井清三郎　日野則成　原田加賀之助　横地弘一　沖金吾　玉木薫藏
松井萬藏　小杉謹八　牛塚虎太郎　小倉彦六　小山由量　棚本三郎
淡力造　田中貞彦　平岡顯吉　千代庄三郎　久保田貞淑

文科一年

松扉得悟　森卷吉　守屋秀顯　久我正二郎　松本千吉　田部環
渡邊良法　松崎豊一郎　飲田壽男　華房義溫　白谷捨松　德澤健藏
長谷川駒榮　山口浩義　石塚維嚴

工科三年

三島爲雄　加藤範次郎　生野團六　高橋享二　深尾陸郎　小林正旭
西田辰三郎　白木質　山本亥太郎　荒本三郎　上山正英　淺川彰三
吉村盛男　橋本貫　二木重吉　小松然三郎　小島仙太郎　長島清松

理科三年

本庄光敬　白石久夫

二部二年甲組

久保田整　秋山信次　中村雅次郎　布施正彦　菅田亟夫　本儀正
神谷秀吉　佐竹敬吉　水谷重忠　田中鷹太郎　中野深　橋本與三郎
篠原甚一　大塚廣通　小國清吾　後藤正堯

二部二年乙組

滿岡亨太郎　山野晉助　細川賢一　東鄉直　田中義一　酒井康次郎
青戸義一　公壯惟篤　鳥海太郎　森川錄吉

二部一年甲組

杉山榮　金田良榮　增田年雄　野村尚　山本秀太郎　中鄉爲之助
吉川三郎

二部一年乙組

小原治三郎　關野謙三　加藤省三郎　佐藤英吉　四野宮豊治　麻田種藏
喜多孝治　今村滋樹　角田榮三　伊澤一亮　藍澤誠一　稻垣米門
小野定志　織田強見　鈴木四男人

三部三年

志賀新　深津博　石川日出鶴丸　西野忠次郎　岡本重保　本莊謙三郎
澤崎寛測　杉本元亞　秦又四郎　鈴木清藏　松井甚四郎　荒木榮三郎
大里政吉　安部他雄　野村幸太郎　菊池林作　永田茂穗

三部二年

江間圭一　中村淳治　植村卯三郎　中桐虎炳　南一太　曹平瀨亨三
尾崎齊　今井福三郎　池上四郎　圓山靈鎧　白倉眞木　大道庄藏
長谷川勝造　有賀降次郎　島峰徹　高野直吉　平倉保市　田宮春肇

三部一年

森文男　塙茂樹　服部貞二　藏田貞造　吉田彦一　藤田敏彦
冨治善藏　吉光寺錫　中村八太郎　伊藤秀　舟木重次郎　島津精之助
淺美保定　諏訪素行　加藤昇二　西山實淳

醫學部醫學科第四年

榊原久　河内監次郎　田上清貞　吉田幡藏

醫學科二年

富田稔磨　鵜澤豐吉

醫學科一年

宮越常次郎　石黑均造　土田久三郎　井上隼雄　岩澤濟　彌藤義雄
鈴木永昌　清水秀夫　尾倉一英

本校職員の部

高安右人(會頭)　今井省三(副會頭)
浦井鍠一郎　谷井鋼三郎　小川勝陳　山崎幹　櫻井小平太　中野嘉作
市村塘　大島義脩　矢板寛　入江用彩　佐々木達　野田貞　河合義文
金子次郎　村上庄太　高山正雄　杉森此馬　藤井乙男　長屋順耳　村上珍休
三竹欽五郎　機田正謙　内田旻　佐野安磨　田中鉄吉　堤從清
彌原重實　堀維孝　福見常太郎　日下庄太郎　宮川爲三　武笠三
明石孫太郎　岡西剛吉　加藤慶三　飯森益太郎　森島彥夫　大瀨謹一
佐藤法賢　森川正名　吉村政行　宮地彥八郎　永山一昌　松田菊藏
橋正可　森俊　山瀨時吉

校外篤志者の部

堀義太郎　久田督　川上彥次　安原時太郎　權藤震二　宮本平九郎
土師雙他郎

本校卒業生の部

河原始二　永岡堯　茨木清次郎　鶴見左喜雄　三好久朋　脇田虎一
神澤唯吉　松島重隆　藤田茂　多島與三次　中村光吉　荒木篤三郎
笠井雄吉　山口重作　森源之助　田中嶋太郎　栗本貫一　上杉愼吾
深澤新一郎　秋田信太郎　永野八郎　入谷清長　林直　早川外吉
成田喜久治　紅林豐治　三宅國太郎　田邊輝雄　加藤太郎　朝倉陽之助
糸井仙之助　堀井治一郎　林達爾　田鶴須又三郎　大森保之助　二宮直二郎
竹内佐太郎　吉川三雄司　蜷川行道　國府直記　山形平作　大脇菊治郎
福井喜彥　月岡眞備　山本彥太郎　高橋幸　伊藤亥佐鶴世　吉田哲雄
曾我部俊雄　長谷川福平　八木光貫　田村安太郎　山川眞純　滋野惠音
池田清二　北村澤吉　五條隆圓　平澤象二郎　古澤鍵次郎　阿部政二郎
寺崎新策　高木清吉　荒井穆　渡部明十郎　大島辰之助　藤尾惟一
伊東三郎　河合兵吾　長澤泰知　柳田友磨　山下齊治　寺井良太郎
櫺田十太郎　澤田堅太郎　老田太文　宮嶋逸丸　寒川安太郎　永松文一
大石雄輔　加藤苞　柴田秀生　半田正身　藤教篤　稻並幸吉
岸喜鑑　高橋堅　山本信夫　上村勝爾　山嶋三郎　石原孝吉
大森篤治　小川得藏　白杵才化　瀨戸孝一郎　慶松勝丈郎　丸山忠治
八田植　丸山義男　堀保次　中尾保太郎　原田永治　國井和雄
丸尾普野　村淳二　谷野格　佐藤龜久治　水木常信　瀧山與
堀覺太郎　齊藤敬一郎　生沼實六　渡辺宰貞　關屋林之助　松原三郎
渡邊久二松　久保武　番場友平　中野玄次

校庭十二勝

神滿々たる雨に傾く春の軒、秋は野分に碎けぬべし、暫し膝を容る、宿錢もに拂はで、冷飯にわぶる身の、いかで淵明の園癖を學ぶべき、さりとて七寸の草鞋に天下を庭とするの勇もあらぬ余れ、せめては朝夕の出入に十町の校庭を樂まんかな、

無漏院　畏まる講堂寒き朝かな
藤架園　採蒐の草分類す藤の影
聽雨洞　五月雨に練兵にぶき舘かな
松子逕　凧や松子木馬を打て落つ
喜寒房　稽古着の肩破れけり寒稽古
古梅軒　梅咲て寄宿に入りぬ狂詩生
擢柳庭　葉柳やローンテニスのボール飛ぶ
樓斜窓　樓棚若葉玻璃窓あけて風を入る
虛心疇　塾生の畑作りけり打ちにけり
待螢櫻　柵したる櫻や王が沓の痕
呼雲丘　城林の番兵高く時雨けり
吊檀壇　寒月や詩を題し去る化榎

盡得春興六時間　日記一節

木寒坊

○花には猶早きも、鳥雀喈々、頻りに茅軒を訪ふて山水の情を動す、偶さかの日曜日、徒に書窓れ暗光に眼を勞す可きやは、乃ち杖を近郊に曳て敝袴の積塵を拂はんとす、行を約する者八寒子、坊や昨遠來の雅客を引て園の某亭に小酌し、清談夜の一時に至る、朝起强て双瞼の密情を裂けば時已に七點鐘、乃ち倉皇枕頭れ鮓を手にして出づ、鮓やもと夜來某子の特に調製し吳れたる者。

門を出づれば手製の鮓に春の風

○目馴れたる街上、試に詩趣を拾ひつ。

桝れ中に小錢を投げつ魄賣
桃の窓女結髮と書てあり
白梅や唐筆を賣る店淺み
灰買の灰を量て日永かな

○忽ち見る、停車場附近

春れ日の桶に寐て居る非人哉

皓潔の天に面し、滿埃の地を尻にし、饑を忘れ寒を忍び、悠々として桶中の宰予と爲る、神色自若の非人漢もと是俗界の人に非ず、一見思は古昔希臘の樽屋哲人に馳せて感興津々として起る、由來俗了せる停車場附近、眞に是萬綠叢中の紅一點。

○停車場は依然たる紛擾、而も諸子已に坊を捨てゝ發し、待たざる可らざるゝと猶一時間餘といふに至ては流石の坊も啞然、不平滿々、如何なる髯公や在ると、試に上等の待合室を窺へば、思ひきやス、ア、小アの三子悠然として居あらんとは、坊怪疑未だ之を問はず、スシ沸々坊を顧みて曰く、傲慢なる哉彼車掌奴と、スシ由來無言を以て鳴る、而して今や此言を爲す、坊私に以爲ふく是唯事なふじと、例の蟹口泡を絶た

ざるの小アシ怒聲之を補て曰く、吾輩少しく期に後れんとして急走背に汗して來る、周章切符を求めんとする再三吏員更に應せず、吾輩大に妄を詰れば傍に一車掌あり、云ふ、是切符賣下の時已に終れる也と、而も列車猶靜止、吾輩大に之を責むと雖、彼固より事理を解せず、紛擾の裡發車したりぬ、其間約七分、豈切符を賣て而して乘車せしむるの暇なからんや、其不親切なる多く他の私立鐵道に見ざる所、不親切と傲慢、二者已に鐵道國有を否認して餘り有り矣と、坊もと同感、徐に二子を慰めて曰く、いかに下等に乘るからッて彼奴等如き沒理の下等漢を相手にしないでもいゝサ、アシ初めて口を開て曰く併し彼奴は羅紗の洋服を着てたかふ或は車掌中の中等かも知れないよ。

足にすがる虫に蛙の憤り

○欠伸塞ぎに卓上の新聞を見る、三面の記事亦優に句となる者あり。

飯蛸の頭に灸す童哉

猫の妻は死せり隣の女嫁す

發車の刻漸く近づいて騷更に騷、紳士れ俳優然たる者、輕裝せる書生、醜婦、佳人、雜然として蠢動せる裡、坊の眼を引きし者一、蒼白の人五六寐卷然たる白衣に赤十字れ肩章を附し、青筋の衛生部軍曹に導かれ行く者、病卒の轉地療養なめり。

病卒の番號を呼ぶ餘寒哉

○瀘車終に發す、老翁の膝に新ふしき凧は其孫への土產乎。

瀘車に乘る草鞋あがらの春日哉

車窓の景、何處も同じ田家れみ。

藁屋根を葺替へて居る日永哉

糸は木に繫で凧の主あふず

○松任に下車すれば、ワ、ハ、イ、小スの四子己に余等を待てるあり、曰く欠伸の合計百。

先發の軍疲れたる日永うか

○相呼號して徒步美川に向ふ、蓋し此行の目的や先づ北陸の小舞子を探り、歸路松任の「あんころ」を食ふに在り、行厨を背にせるハシは小學兒童の如く、腹便々たるアシは布袋の如し、イシもと無風流漢、桃青れ禁に背て無用の獵銃を携ふ、愚然たる八俠、當年佛國革命時れ「モッブ」の如しとり、宜哉松任の年少側目指辱、私に嘲聲を漏らすや、唯怪む素と一椀以て坊等の空腹を治する漂母なきかとを。

○松任の町、一寺あり、聖輿寺と言ふ、例の千代尼の墓を存す、入て見る、冷々たる一片の石塊稀世の錦心繡腸を掩ふて孤寂々、其面刻して曰く、辭世、月を見てわれは此世をかしくのあ、あはれ當年引手數多の才女も、今や此身を置くに所なく、僅に村寺れ一隅を借りる詫住居、半壞の板垣を隔てゝ茅屋れ商家に隣る、如何に千代尼、汝怨める乎否の、碑側の紅梅の一に何ぞ遲き。

春の日の埃拂ふてまねらせつ

墓の陰小鳥の交る所なり

吊句以て去らんとすれバ輕風蕓々、隣家物干の襁褓等汚穢の物徐に落ちて墓頭に懸る騷、客洗耳會て芭蕉塚に詣でゝ句あり、曰く、褌をかぶせ參らせ時雨かな、然れども褌は元是女には大の禁物、襁褓おそ中々に似合しけれど不思呵笑。

○松任を去る少許、一小舍あり、一翁其中に靜坐眠れるが如し、蓋し鐵路を守る者、尻に蕃おく手に火鉢おく、空々寂々、眞に是瞑想練膽の好位地、彼禪房に勝る萬々、坊則ち羨焉大呼して曰く、男子生れて大臣たらずんば則ち此翁れる可しと、翁少しく眼を闢て坊を見る暫し。

番小舍や番人の夢駛に

借問す痩翁、禪家無字の工案を得たりや否や。

○春は名バかりの、天に未だ雲雀鳴ゥず、地に未だ菜の花無し、電線の鳥に礫しつゝ行く、漸く海見ゆるに至りぬ。

海の風あたゝかに田を吹て來る

藁灰を燒くある人の霞む哉

イシと小アシとは何時しか遠く離れたり。

○笠間村に達す、民家悉く苔を戴ける草廬、村端一社あり、笠間神社と云ふ、曾て聞く木蘇冠者の祈願せし所と、乃ち入る。

梅痩せぬ白木れ鳥居二千年

社に通ずる小徑凡そ半町、右、細石を積んで塀に代へ、之に土を置くこと三寸、以て其上に隙あく萬年草を植ふ、左、老杉亭々藪を交へて境となす、境内に至れバ四圍悉く老松又他樹を加へず、綠苔石墻を埋めて閑寂玄隱、先づ懷古の情に絕ず、乃ち刺を通ずて來意を致せバ、白髯白眉の人出でゝ稍厭色あり、スシ則ち曰く、ワザ〳〵金澤から來たのですから……、漸く許されて拜殿に上り神前の粗蓆に坐す、殿の構造一に素朴を旨とし、人をして襟を正さしむ、額あり、少將三好成行氏の書、曰く神如在、神官は年已に耳順の人、温容藹々、青衣を着く、先づ神鼓を擊て、拍手叩頭十數回、不思坊して失笑せしむ、徐に起て奥殿に至り、靜に戸を開く、其間の待遠さに。

寶倉開けんとすれバ雁歸る

白い蝶神の境にうつる哉

やがて、彼は來りぬ、其ちす所の箱二、森嚴として曰く、是則ち神寶なりと、其一を開けバ、則ち温乎たる翁の面、古色蒼然として微息鼻を衝く、面の鼻と額と共に腐蝕して小穴數無なく、左耳已に落ちて無し、彼徐に口を開て曰く、本社は大宮咩神又の名天鈿女命及住吉の神を合

祀せ、其靈驗神妙恐る可き者あり、昔者木曾義仲俱利伽羅峠にあり、兵を越中に進めんとし途に此地を過ぐ、時に手取川大に氾濫渡る可らず、義仲困窮、終に本社に詣でゝ其滅水を祈る、水は則ち減ぜりと雖、軍中川の深淺を知る者あく、未だ渡り難し、我が二柱之を憐んで親ら出で、川を渡りて以て其路を示し玉ふ、義仲の軍則ち互に手に手を取て相扶け以て渡るを得たり、是則ち手取川の名ある所以、其前に當りてや之を比樂川と稱せしなり、義仲大に喜んで則ち其所愛の面を獻ずて以て謝す、今卿等の見る所の者是なりと、現時手取川に沿ふの一村水島村一に又比樂村と云ふ、彼の言未だ俄に妄誕とし去る可らざる也、所謂面は桐を以て之を作り、脆弱、手觸るべからず、他の箱を開けバ則ち一の青銅鈴あり、滿面銹を生ず、曰く是所謂笠間の大鈴ありと、取て見る、其徑二寸に滿たず、而も大鈴の名あるを怪んで之を問ふ、曰く、今日に在りては是富に小鈴たるべし、而も古代の鈴たる其形概ね小、此の如きは實に其稀有の者たりしなりと、今猶村民之を大鈴と稱して尊むと言ふ、名ありて實なし、神寶亦其弊を免るゝ能はざる乎、卽ち人の名屢其實に合はざる者咎む可らざるに似たり、以て僞善者輩の口實とあすに足るの利器乎、罪ある哉笠間の大鈴、箱底更に二ケの石塊を見る、近く之を見れば、高麗犬の跪坐せる者、高さ三寸、凸鼻凹眼、口は唯一直線にして長し、其技もとより粗撲見るべきなしと雖、而も眼は眼、鼻は鼻、口は口、足は足らしきを得て、偶以て無智時代の智を知るに足る、其由來を質す、曰く、元錄元年新に社を築かんが爲、舊殿を壞るや、床下此二犬を得たりと、其何時頃の作なるやは知るべからず、彼猶語を繼て曰く、彼時義仲の面を本社に奉ずるや、其

常に胸に帶ぶる所の銀鏡と共にす、而も此鏡や今村豪舘(?)氏之を有し本社に無し、蓋し古代にありては一定の規制なく記錄なく、神官の更迭するや擅に神寶を提げて去りし、舘(?)氏は當時本社に神を奉ぜし人、思ふに之を私にせし者乎、余社に在る三十年、大に之を慨し、屢々舘氏に請ふて之を奉還せしめんとも、而して舘氏未だ之を諾せず、吁と、問ふて曰く、尊社の彼二神を祀れるや宜し、而も之を八幡宮と稱するは如何、答へて曰く、當時義仲の暴横かる、到る其神社佛閣を燒きしは卿等の知る所、唯彼八幡に至りては源家れ最も重んずる所ありき、故を以て倶利伽羅の埴生八幡は彼が災を免る、埴生八幡本社に交あり、本社の義仲れ禍に罹らんことを憂ひ、私に八幡の神符を送りて曰く、義仲れ至る必ず貴社の何を祀れるやを問はん、八幡を以て之に答へよと、果して其言の如し、而して本社幸に火を免れたり、是に於てゥ本社豈八幡を棄るに忍びんや、遂に合祀し以て今日に至ると、嗚呼笠間神は八幡によりて火を免れ、義仲は笠間神によりて水を免る、則ち八幡は水火共に以て免るゝに足る乎、神猶勢力の差あり、人豈之無きを得んや、無理かふめ哉坊の無勢力、彼神官得々猶語ふんとす、一子曰く、神さんのポリシーですね、神官曰く、さうですかア、乃ち手帖れ洋紙を裂てニッケル二ケを包み、鉛筆以て大書し曰く賽と、之を留めて辭す。

寶物の緣起聞たる日永哉

神の面箱を出でけり朧月

社を出づ、門側小池あり、水涸れ埃留り、陋又醜名狀すべかふず、石標あり、記して曰く、義仲弓ほりの池と、標面又歌あり、惜哉水鏡の二字の外又讀む能はず。

蛇穴を出でゝ義仲亡びたり

○社を去る一町、野に散亂せる藁に坐して晝餉しつ、談笑百出、眼を放てば一望烟を含んで淡し、畑打には未だ早くして、農務閑なるれ時、未ざ、牧童驅犢返の趣はかさも、時に獵肩帶禽歸の日曜獵夫あり、百千れ鳥友を呼んで西又東、不思歌ふて曰く、可嘆無知己、金陽一狂徒、と徒に高適の口眞似する間、大に笑ふ者あり顧れば二三子坊が沈想の虛に乘じて、例の鮓を分取りもるなりけり、

紫門に茶を請ひ得たる古梅哉

梅干のさねをつゝくや春れ鳥

を吐て去る。

○遲日草屋を暖めて穩に、炊烟暗窓を出でゝ輕し、田家れ無爲愛す可きかな、强て早春村家の業と知ふんとせば、則ち

鷄と遊ぶ女や桃れ花

小莚に大根切り干す長閑けかり

○漸く美川に入ふんとす、潮風面を吹き來て、先づ白砂の後に隱れたる蒼海を想見せしむ、漆黑の漁童三四、坊等一行に前後して、目迎日送するは、坊等の敝袴蓬髮に驚きしにや、停立暫し、例の駄句もて此景を代表させつ。

春風の網に澁する匂かな

大松の一つはかれて霞みけり

○美川の町たる、小なれども其街衢清涵、家は概ね素木を以て之を作り、雅朴風致、金城れ徒が柱を塗り格子を青竹にするの卑に似ず。

街道に砂吹く春の漁村哉

春れ日の笊干して居る戸口哉

折れて濱に出んとす、小流あり、女童三四赤黑き脛を露して鍋を洗ふ。

陽炎や橋にしてある船の底

○濱に出づれば清朝々、十數の舟引上げられて砂中に坐せり、別に坊が胸中に往來する舟二艘、

舟普請鉋の音の日永かな

船に寐て風手繰り居る童哉

○水や空ある美川は浦。滿目悉く碧一碧の間、輕風時に閑鷗の夢を破て白浪を散ず、近く蒼々たる松林を隔てゝ、雲霞繚渺の裡、水を切て墨繪の如くあるは安宅ヶ關か、遠く麗々の天を破て、赫燿銀を懸くる者は白山の脈に非ずや、唯恨む灣頭寂々、一滄浪の曲を耳にせざるとを、仙人睟を有待秉黄鶴、海客無心隨白鷗、李白を氣取らんのあ、放てば、水天相連るの處、漁舟點々、試に之を數ふれば二つ三つ四つ、五つ六つ七つ、終に二十を越へて復數ふべからず、眼爲めに眩せんとすること夕天の星に於けるが如し。

三國の船並びけり春ヶ海

傾首久うして漸く此駄句を得つ、蒼々の大海到底吾掌中のものに非ず、寫生の難きに今更ながら短才のおこたれて獨り愁然、首を垂るれば、後方忽ち聞く歡聲湧くが如きを、顧れば漁童十數、白旗一旒潮風に飜翻たるを揚げて大呼す、一童を捕へて之を問へば云ふ、是源平軍を闘はすありと、而も赤旗の影を見ざるは何ぞ、是蓋し、

遠霞敗軍の旗見えずなりぬ

る者乎、引返せ〳〵源氏の將、坊等加勢申さんあり、

好景に恍惚として何時しか諸子に離れたる坊。後方に大笑起れるに驚き顧れば、

袴着て角力を取るや春の濱

學生の角力餘り妙あらず、加ふるに坊もと弱卒、諸子の片腕に當るべくもあらざれば、乃ち之を促して歩を轉ず。

○再び美川の町に入る。途に藤塚神社あり、大山咋大神と大巳貴大神とを合祀する所、昔時日吉神社と稱し維新の際改めて今の名となす、天保の年、美川祝融の大災に罹る數回、此社亦其禍を蒙りて古器重寶悉く灰燼に歸したりと言ふ、而も今存する所の社殿頗る清麗、渡殿樣の者ありて古風を帶ぶ、唯惜む、後門に施す所の鐵柵より或るを社守の心根も見えて淺間敷。

○藤塚神社の傍、一小屋あり、戸破れ軒傾き、豕小舍の大なる者とこの見られず、之を問へば曰く芝居小屋なりと、小屋の傍、學校に所謂器械体操の金棒を設く、妙なる哉、豕小屋然たる芝居小屋と芝居小屋の金棒と、蓋し美川町の名物乎。

○美川を距る十餘町、勝區あり湊村といふ、所謂小舞子なる者、坊等之を探ふんとして、手取川の假橋を渡り將に過ぎんとす、呼ぶ者あり、見れば橋守の橋錢を請ふなり、求むる所拾貳錢と、一行忽ち叫ぶ者ありPanic!、笑ふ者ありO, twelve sen!、泣く者ありnothing!、スシもと漢學專攻の士、夫子然として曰く歸與々々、吾黨小子、今や時已に晩し、吾等又他を探るの暇なきよりと、皆之に和して曰く歸らんと、橋守先生獨り苦笑も、蓋し此行初より携帶の費額を定め之に超ゆるを許さず、而して今や拾貳錢を拂はんの歸路の滝車賃なきを如何せん、之を徒に時の遲きに托して俄に歩を旋さんとす、我黨亦權謀の策士ある哉、橋守制して曰く、已に橋を渡る何ぞ橋錢を拂はざる、其湊村に到ると否とは我の知る所に非るなり、坊等答へて曰く、坊等元橋錢を要そるを知らず、今君に聞て初めて之を知れり、聞て而して引還す何の妨うある、若し强て之を求めんと欲せば、何ぞ彼の對岸に之を掲示して以て豫め之を知らしめざる、要するに吾等は已に目的を得ずして返る者、何ぞ橋錢を拂ふの理あらんやと、何ぞ其窮せる、何ぞ其法律的口調なる、彼更に讓りて半價を求む、我應せ

ずして曰く、君若し吾等の言に從ふ能はずんば、請ふ此橋の所有者を告げよ、吾等將に之を訪ふて直談せんなりと、率强附會、有理又無理、彼遂に笑ふて曰く、好し、卿等行けと、彼もと能く事理を會す、坊は餘りの氣の毒に、不圖近づいて之を見れば、彼の坐右英獨の書を置けり、彼蓋し固より能く蟹文を解する者、先に坊等が得々として用ひし英調の暗號を聞て、以て豫め坊等の懷中を洞見せしもの乎、故あるかな、先に彼の苦笑せる、彼蓋し坊等を飜弄せんとして故ふに橋錢を請ひし者乎　何ぞ其性惡なる、實の山に入り手を空うして歸る坊等も亦つまぶんのみ、歸途橋の中央、愁然として歌ふ者あり、曰く、はし有り不可渡、おわし無きに因る、瘦子豈斷つを惜まんや、十六本の足。

爭の蜂勝負なく別れけり
名所の橋を隔てゝ霞むなな

○特に茅屋を撰んで休む、澁茶土瓶をかゆること十度、漸く時至りて瀛車に投ず。

途に積む俵の數の日永かな

忽ちにして松任に着す、而して囊中無一物。

○此行、十時に出でゝ四時に歸る、放浪六時間、耳目に映ずる所の變化極りなし、而してあんとろは遂に口に入らずなりぬ。

ねてろんで春の記を書く疲れ哉

◎補云、此稿を草して後二日、偶一書を見る、中に松任聖興寺の事を記せ、曰く、開基明源法師(德光彌次郎正明)、文明年中蓮如上人に敎を受け明應三年石川郡德光村に一字を建て、德光寺と稱す、文錄の際第三世正眞之を改めて聖興寺と名く、慶長六年三月同郡宮保村に移し、第五世慶安三年今の地に轉置す、明治二十四年五月火に罹り烏有に歸す、二十五年九月新に工を起し、三十年九月上棟の式を擧ぐ、本山より特に別格由緒地と稱するの旨を許さると。

◎謝云、小舞子も見ず、あんころも食へざりしに勇氣も失せて、唯手帖のまゝを寫したる日記の一節、はやう焚き捨つ可りしを、編輯子に見つけられて心ならずも紙面を汚しつ、文は書き流し、句は吐き捨ての儘、讀むに堪えざるの罪は編輯子に在り、坊をなとがめ給ひそ。

若松兎狩行

拓川

去月中浣我校に檄あり、曰、二月十八日を期して、狡兎を城東の雪野に逐はんと、快哉此の檄名にし負ふ北辰星下の校、健兒集め得て六百餘、常に勁風に骨を曝し窃に腕を扼して歎ずる者、されば今此の快擧に會ふて起つ者幾許ぞ、願くは滿天れ風雪吹くが儘に荒れて吾曹ゞ心膽を肅殺しみよ、想ふに斯の如きの擧は我校創りて以來空前の壯遊ならん、山可秡、雪可覆、若夫れ兎輩に至ては論中のものならず、とはそも吾人が想望したる當日の盜觀なりき、されど結果は意外に出でたりし、募に應ずるの有志僅々五十餘人、吾人は兎狩の餘りに末技なるを以て多の同情を得ざるを憐むと共に諸氏が餘りに之を侮視したることを悲まざるを得ず、

春は既に東君に入るも尙未だ淺くして、輕風は陣々として肌寒きを忍び、二月十八日午前七時頃我寓を出立つ、日まだ出でず僅に城角に當て霞の如き淡光を見る、疎星落月淡くしてあるこの、なきかに天上に懸りいと心細し、さながら夢の如くに校へ辿り着きしも人員充ち居らず、待つと半刻尙二十餘人算へ來り數へ去るも終に此の如し、吁人事と天候とは果して憑む可からざるものなるか、われ天候の變幻常度なくして雲雨

たゞならざる之と毎日に見る然りと雖人事に至ては知らざる而已、呵々

校長北條先生厲聲して曰來れ〳〵吾子何ぞ人れ鮮きを憂へん、今日の事唯吾子が奮勵にある而已、願くは力めよと、健兒等之を聽きて奚ぞ起たざらん聲に應ゞて門外に出づれば、曙光既に東方の半天を領し天空一碧長風習々として其心よさ言はん方なきに、覺えず小駛して市の東端に出づ、見渡せば郊野惜氣もなく擴がりて杏霞柳煙の煙景あけれども十里の眼界雪尚未だ消えやらず皎又潔其冷艶ある比類あし、遙に連れる白嶺れ山脈は淺野の河原に磅礴せる一帶の連山と鬪ひ兀として醫王を天表に捧げしものゝ、雪嶽の狀恰も怪獸の陸梁せるが如く大鵬の圖南せんとするに似たり就中皎氓を被り傲然天に朝せんとするは知らず何の嶺ゞ偉ある哉淺野河畔れ景、溝洒たる河畔の細徑を迪りて鈴見橋てふ橋に到る醫王の山巔に現れ出でし一大紅瞰は郊野に迸射しちらゝ〳〵として遠近の山腹をかすめ時に黄島の綿蠻たるを聞くは、さすがに春あればにや、村又村を過ぎて足先少く仰ぎ行くかと思へゞ山勢相迫りて一條の清流脚下を潛み行くと見る一行の一人語て曰此の流由來清冷を以て名ありされど今や深山雪漸く融て爲に斯の如き急端濁浪をあすと吁雪もと皎白溪亦清瀝然るに雪崩れて流に投ずるや溷濁の泉とある、消々も溶々も識らず何か快き、川身に沿ふて上る、ふと顧れゞ淺野の春江泯々として青く之を挾て臥蠶点綴せる田家雪間にちらほらと青き麥畝、縷々として幾條とあく上る炭小屋れ烟其情其景將に此の畫圖中の人と化せんとす、暫くにして身は兎狩の目的を有するに心付き蒼皇として行列に加はる、若松村れ東端に着す、一行更に征衣をつくろひて目指す陣地に赴くの用意をあす、面に當て兀如として嶇起する山、鶴氓を着くる道士の如し、されど敵は當にこの裾に潛む、吾曹豈に徒に宋裏の愚を學び、慫にあの山を神仙視して遂に蹤躪し止むをあさんや、氣動き肉張り快言ふ可らず、あの時赭帽寒喪小銃を背にして颯々の風あるは、磯田先生なり、短褐楚々として眉間に軒昂の氣現はるゝは橋詰氏なり、從容として慮あるゞ如きは中俣先生にして、應變の策を畫して功を收めんとしつゝあるは之を宮川先生に見る、三竹先生及健兒等に至ては急趨突進、一擧して敵城を屠らんとするの概あり、氣勢旺盛、語ふざるに滿溪ぞよめきて恰も山靈がこの捲土底の猛氣に愕きたるかと疑はる

裝成り、再び行程に上る、金城は、はや後峯に隔てられ、前山後山雪漫々、醫王山頭を壓して鎣へ、四顧人籟なし。玆に於てか凡骨頓に脱し、神仙に近きたるに非ざるかを訝る、吁雪嶺の頂は果して皎潔の神在す所ゥ、俗界の塵事痕を拂つて空しく只皪々として天風と語るのみ、樵徑已に盡きて雪上を歩む、十日餘をも經たるならんかと思はるゝ堆雪も外面のみ固まりて裏は頗る脆く、一歩も脛を沒せずんば止まず、山は愈峻嶸、雪は愈深く、五歩に喘、十歩に汗、試に雪を掬て之を嚙めば纈々として冷いふ可らず、山氣何とあく肌を透し骨に徹するを覺えしゥバ首を回らして顧眄す、奚ゥ知らん身はこれ雪山れ頂にあらんとは、衆皆斯處に集る、雪に踞して憩へば崩れて雪達摩とあらんとす、偶々坐を占むるに巧あるを誇るものありと雖も、其蹶起せんとする燥氣は彼の苦心を無にするの滑稽を演ずるのみ遙に金澤の天を眺れバ、山又山の雪深く、脚底これ數十仞の谷、懸崖玉屏の如くに削下す、雪れ下には巖々たる岩參差たる棘もあ

るなふん、谷を隔てゝ群峯糾紛して何れをそれと見分難し、時に磯田日下兩先生徐ろに作戰の經營を策しつゝありしが廟算已に成りしならん、戒嚴して曰宜しく靜肅を守り秋毫も語る勿れと、之れ蓋し喧騷の徒に狡兎を悞れしむるの故あらん、やがて命は下れり、前面に峙つ危峯の北に當りて翠松の長風に嘯ぐは綱の北端にして南に名殘ばかりなる枯木林あるはこれが南端なりと蓋し綱は南北に亙りて凡二町、驅逐線は此の山、脚底の谷、及前嶺を合して距離約八町許、戒嚴密あふずんば恐らく敵れ逸せんとも知れず、諸氏命を享けて四方に散ず、相期して曰喇叭の響に應じて起たんと、されより先宮川中佐兩先生及二三の人雪最も深き山路をば魚貫して上り、遙に綱を張る可きの線に趣き、盡粹遂に綱を張り成る、健兒各其地に卽き耳を聳てゝ號令遲しと待ち構へたり、恂に勇みに勇む、健兒等れ鬱勃たる勇氣の程こそ思やふるゝ、

忽ち驚く前山一道の春氣漲ると見るやいな、碧清の長空、芳菲たる紅の爛熳たるを見る、凝視すれば二旒の赤旗、滴らんとする翠松れ下にかゝり、長風に思ふ儘わが身を任し翩々として飜る狀恂に心地よげなり、霹靂なる哉、俄然遠雷の雲峭に吼るかと思ふ音の側面より起りぬ、此の時喚聲一時に湧き來り、乾坤掀動しさすがに深谷も鬨の聲に埋れて修羅の巷と化し了り百獸悸伏せざるを得ず、雪を蹴り雪を撲て叫ては又馳せ、走りては又喚び怒罵叱咤、號虎を挫くが如く、長虹を貫くが如く、恰かも三軍併起するの概あり、怒聲あり敵を見出したりと叱し罵聲あり逸せしと吐く、紛紜錯亂、狡兎の影遂に滅す、谷間の健兒氣漸く弛み時に淵水に對して功難成を歎ずるものあり、然れども前峯の綱線は閑として人かきが如く尙未だ以て容易に事去を唱へず、悠々として機を待つものゝ如し、宜なる哉宮川先生右端の綱線より厲聲衆を戒めて告ぐるに綱近き中に潛兎あるを以てす、健兒如何ぞ踟躕せんや日下先生曩に左翼の指揮官として左方の山巔に警備したりしかば、これ報を得て一大喚呼を以て三面の士に總進擊を令す、一時鳴り止みし喇聲再び迸り出で、今や狡兎も殆んど手中の楚囚たらんとす、果然見る〳〵熊笹は左右に別れたり只見白兎衝天騰ふんとそ、三面の壯夫氣奮ひ肉躍り積雪を蹴つて馳せ上る其勢且猛激紛々として白烟起る健兒等飛雲れ履を穿つに非んは奚ぞかくの如きを得ん、龍驤の勢は將に長空に舞上るかと見るうちに、前嶺聲あり、捕獲せりと、嘯嗟れ間、萬歲の響八面に起りしばしあり止まず、中道空く敵を逸して遺恨心に徹せしも幸ひに天地計謀、共に宜を制し敵を擒にせしは、如何に快きかとよ、初陣の手拇分外々々なと狂喜しつゝ雪深き雲梯を攀ぢ綱線の地に集まり來るもの三々五々互に相迎へ視して曰快絶愉絶、願くは天公、吾曹に尙二三回血戰の刻を與へよと、凛々たる勇氣想ふ可し、擒にせられたるの白兎は雪上に横はれり、訝り視れば こはいろに頭蓋既に摧破せられ鮮紅落花の如く白雪に印す腥風起りて坐ろに渠が弱質を憐むれ情兆さんとす、飜て想ふ、否々、古賢言はずや、寢皮食肉男兒事、未信書生袖手閑、豪宕の想ふくんば婦女と侔きのみ、區々たる惻隱の情に紛に嶺すなきなり、壯夫遊、古來最も獵を盛なりとす、傳へ聞く戰國時代、干戈少く遏み鋒鋩僅に收まるの時に當ては草野の間に隱くるゝれ士、常に山野に獵くらし、豪放の氣を養ふと共に武勇を練りしところ、彼の春雨秋月柳尾花に魂を銷せしの月鄕雲客輩が其勁鋒に當るを得ざるは無理ならぬ事にこそ、蓋し斯れ如き

の遊事、快中の快壯中の壯、白馬銀鞍者流の得て味ふ能はざるもの、

綱を設けしの地、背は一大溪谷に莅み、遠く河北の江水を縹渺の間に望み、近き嶺々に疎ある松群の薄綠なるが風韵颯々として湖水に映つれるのと疑るゝ許り、麗かある日は中天に懸りてほの暖きに、雪の上を過ぎ來る輕風は程よくこれに調和して長閑きこと限なし、あの仙境これ中俣宮川熊三郎兩先生の兎狩に熟適せふるゝが故自らこれ位置を得ふれたるもの、されど背面の山色風光は常に顧眄するの暇あくして唯前方の監視に忙はしかりしは、天の衡平あるこの好景を二先生に獨占せしめざりしものならん、時漸く亭午ありーかば　を披きて晝餐す麁肴も何となく珍味の如く口に媚ぶるは氣清き境に坐すると運動の後なればにや、この時三竹先生及淺田氏會し來ふず、餐はすみ當に第二回の作戰に移ふんとするも尚影を見ず、宮川先生微笑して曰三竹氏は雪中に坐禪をなー居らんと、衆其言の餘りに奇矯なるを以て腹を抱て哄笑せしも中心窃に其遲を訝りしが、やがて雪中の禪師に滿面春海の如き笑を湛え、肩に握飯を背負ひ手に竹杖を杖き北方の山陰より現はれ出たり、淺田氏も亦來る、衆其無事を怡びつゝいて詰るに遲を以てす、淺田氏辨ずて曰吾が向ひし方面は道嶮峻にして雪深きと底と知らず過て足を滑ふしたる儘深谷に墜下したりしと、想ふに肥大に軀幹は進退に便ならず輾轉これポンチ畫的奇觀を演出せしは尤の次第なれども三竹先生の遲延は徒に驅逐線外に奔逸し山を叱し雪を撲つて谷又谷を絕りし故とか、果して然ふば先生は迂直の計を識ふざるもの、禪師畢竟兵法に迂しされど隣溪の兎をーて我軍の旺盛あるに畏服せしめたるの功決して沒す可らざる也。

刻既に亭午を過ぎしかば、倉皇第二回に戰鬪にうつる、全軍分れて二となり、一は磯田先生を以て指揮官と仰ぎ、他は日下先生統率の下に在り、磯田先生は本軍を導びて正道より東方の陣地に向ひ、綱を修め兵と部署し別軍卽ち日下先生の大迂回をあして來るを待ちこれと合し總進擊をなさんと期せーも、遙に南方の嶺に趣きし健兒八人日下先生の輕捷ある疾走につゝき雪を蹴つて進みしが亂山の紛絆糾れー糸の如くあるに惑ひ遂に綱線の地を見出す能はず山を越ゆる凡五計谷を涉る四五、力盡き四肢あへ呼吸激くして幾度の雪に臥して行路難を吟ず、部下の士此の如きを見日下先生氣益苛ち本軍との連絡を力むるも漫々として雪嶺の眉間に懸るのみ終に能はず、衆皆精力盡き雪崖に攀登ふんとして能はざると幾回、この間失望の氣を興奮ー蹶起直前の勇を復せしむるは蒼々たる大空と皓々たる雄嶽にして逐鹿獵夫不見山あある眞理も遂に空し漸くにーて日下先生の奔走甲斐ありて本軍を連絡し再び驅逐に取掛りしも驅逐線茫々として際涯なく、橋詰氏の如き更に前嶺を越へて無人の溪に彷徨ー遂に綱線を發見せざりしさまあれば功遂に成らず、恨を呑で相會す、この戰や人の寡き以て千米突許驅逐線を完ふする能はざると本軍支軍間の連絡をあす所謂交通兵あらざるとに由て失敗に終りしなり、吁茲に於てか寡兵の歎起らざるを得ず、失敗はあへあくも一二の歸去來を謳ふ士を生せしも敗餘の鋭氣頓に加はり全軍意氣の豪快ある恰うも新勝の勢の如く第三回は當に彼方の山に演せふれんずる狀ありしが樂不可極割愛々々などの說起ると共に適當ある陣地を見出ーー得ざりしうば歸るに決す

午後三時頃白砂の如き雪の坂路を轉ぶが如くに降り行き山下の寒村に着す、此處に來れば名は

りの道通れり、雪中の馳驅五時餘に亙りし弊余の身此道に遇ふて憙敷餘り、徑の側に憩ふ、第一議は捕兎處分策ありしが、前村に之を煮んとの說用ひられ再び發程す、顧れば淺河の袂に萌ね出でし春は若草、其淺綠なる嗽葉を清流に洗ひ、瘦立せる老梅の懷には未だ春光の音信ざるにやあらん破顏れ容ゐさも尙滿々たる希望を浮べ、枯木立の多き蕭條たる里の望を添ゆるは早春の情なふん春淺嬌無力寒凝北帝留を想はざるを得んや

敵は捕へたり運動はなせり天氣よく路よし、悠々たる野徑何の意に滿たざるなく興し笑ふ容如何に心地よかりしことよ

若松村に歸る、一民屋に請ふて庖厨を借りなそ、校長北條先生前約する條ありて庖厨の費を一行に遺され去る、先生曩時山中に在りし頃衆と共に驅逐の任に當り叱咤酷だ勗む、其白兎を獲るや絶叫快哉を連呼し猶衆を厲まして曰宜〜く獲ると三四迄なる可しと意氣の豪爽想ふ可し、而て今や去らる一行俱に其快戰の樂を樂み〜も俱に其肉を味ふ能はざるを惜みしも詮ゐし、宮川先生亦去る、即ち肉を割き米を炊き酒亦備はる快哉勝後の宴、一火爐を圍で名功を語り靄々たる春氣坐に滿ちて酒の熱すると肉の煮熟せしを忘れたりしが少時して宴始まる、觴飛び、皿迷ひ、談は泉の如く湧き綿々として斷へず和氣汪洋、眞にこれ君子の會、蘭亭の昔金陵の事轉た追想に堪へざるなり、村醪以て甘のらざるも兎肉以て美なふざるも、自ふ捕へ、自ふ煮て豪快の談を試む、飲食するもの悉く口に媚ぶ宜ゐり健啖鄙人を驚かせしは、酒酣にして山瀨氏綱の由來を述べ終に曰今夕はこれ開綱式なりと恂に其言如〜、興は愈進で談愈熟し山中の勞悉く忘れ去り迭りに綱の前途の幸福を祈りあひしが八時頃散じて歸路に就く寒月一痕天上に閃ぎ靜に雪の上を照す、鈴見橋に來りしに瑤玻月を動らして浮光寒く天地一氷壺の感あり清冽骨に徹し神氣爽然、九時頃家に歸る

擊劍部大會記事

○時機至れり　紅紙付の告知扣所の一隅に掲示せられしより、旬日猶ほ千秋の思をゐして、我辰章校半千の健兒が待ちに待ちし擊劍大會は、即ち紀元佳節の翌日堂々擧行せふれたり、嘗ては、

○凍雲空を壓し　寒風颼々たるの朝、瑩然明鏡の如き堅氷を、固めし鐵拳に粉碎し、紅顏洗ふに暇無く、荒鷄晨を唄はざるに先ち、朔風を冒し積雪を蹈み、壓すべうふざるの英氣、制そべうふざるの活勢を三尺の竹刀に罩めて、嚴冬三旬の間、無聲堂裡に搏虎擊龍の大活劇を試みし、北海の快男兒が其鬱勃の覇氣を泄さんと欲する、今日斯會の光景、如何なる風雲をや起さんとする。

○降り續きし雪も今日は珍らしく晴れたり　見渡せば瓊瑰の如き寶達醫王の峰巒は、袂を連ねて靜に天の美神が懷に眠り、蕭條たる孤林鶴氅に敝はれて、梢に息ふ寒鴉獨り低聲に微吟せり、斯日斯時斯瞬、双々勇士の交戰は結めふれたり、刻鐘正に十一點。

○會場　に當てふれたる無聲堂前、交叉されたる二旒の國旗は風に隨て飜り、來賓諸學校生徒縱覽者及『髀肉の嘆に苦しみつゝ有る』四高學生の多くが、此の邊りを縱橫に行達ふも、常時と異りて勇まげしにて嬉し。

○場內　は、委員諸氏れ奔走斡旋の一方なふざりし爲め殊に能く整頓し、北方に數十れベンチを列ねて來賓の席にあて、西に劍道師範家及警察監獄吏員の座を設け、本校職員は南方の一部

と占められ、餘は學生々徒縱覽人等の席と定められ、委員諸氏は頭取的に演武域内に得々として座し、北條校長又域内の一隅にテーブルを扣へて賞品授與の職を司らる、此くの如くに準備せられたる戰壇に、先づ上りし双勇は

○第一回　胴　牛塚虎太郎
　　面面　鈴木　庸生

戰を交へ初めてより勝敗の決する迄凡そ五分時、先づ牛君は身を潛めて胴を得しは見事なりしも、鈴君が堅忍不拔時は經過と共に勢を增すが如きの太刀打に堪へて、二、三回續け樣に面を得られしは殘念、蓋し鈴君は劍を學び初めしより未だ幾許あらざるの士、而も君が熱心精勵寒稽古に一日の欠席無りし効果は、今日此月桂冠を戴くは榮を負へり、好少年！愈々奮勵爾後大に勉る所有れ。

○次は卽ち　小手小手　荒木榮三郎　小手　清水　秀夫

共に着實なる太刀筋、其得る所も亦共に小手なる奇と曰ふべし、唯惜む清水君の擧止に覇氣れ乏しかりし事を。

○第三回　面面小手　小野　定志
　　中村八太郎

此結果を前提としての結論に非ずと雖も、忌憚なく余をして評さしめば、中君畢竟小君の敵にあらず、初め中君の胴を得んとしてならず、周章して二三歩退さし刹那に於ては、打込むべきの隙は他所目よりも危く眺めたりしに、小君の其虛に乘じ小手を得し等、餘りに漠たらざるを得ず、然れども中君或は場馴れざるの故を以て、焦慮苦心に過ぎ、反つて此失敗を求めし者か、非の、

○時は正に十一時十七分東西より悠々登壇せし兩勇士は

小手小手　藤田俊二郎
　　突　二木　重吉

巧にしてしも敏活なる藤君の大刀が、見事、已れより二寸有餘も長軀なる大兵の强敵を打ち敗りしは、見事の出來

○第五回　面　佐竹時之助
　　面胴　有馬章三郎

技量骨柄共に伯仲の間に有る兩士の相向ふや、見る者は皆疑はしき勝敗に、面白き太刀打を豫期したりしに二分時を待たず、茫々漠々の間に早や勝敗の決しは愛氣無かりし。

○第六回　胴　宮崎　稻作
　　小手小手　原田加賀之助

○第七回　小手　藤田　敏彦
　　引分　小手　水口　耕治

○第八回　胴　高梨　恂一
　　引分　面　小杉　謹八

雙龍白雲の間に跳り、風雲席卷の奇觀を呈せしめし此戰鬪の奇技さ、柔道のチャンを以て鳴る高君は、得意の大外刈をホノメかしつゝ、薪割流の滅多打を演ずれば、小君我流の亂打を以て此に當る、一浪捲き去ると見れば、忽にして又一濤來る、其奔鬪奮擊の甚しき、儒夫をして起たしむるの慨あり、高君先づ胴を得て小君の面此れに次ぎ、今少時と思ふ間もなく、可惜休戰の命は下りぬ、守兩君の更に英氣を養ひて陣頭に見ゆるの期や何時、余は刮目して此れを待たん。

○大坂落城の砌、勇名を轟かせし團右衛門十八世の孫、塙茂樹君に對して赤澤欽一郎入道殿の立合、あゞ勇ましかゝん事の有るべき、幻、滔、夢、影、谷の響、水に映る月、水の泡、鏡に寫る形、鳴る雷、聽て今一息と思ふ間に、引分けとなりしは殘念至極。

引分　小手　赤澤欽一郎
　　胴　塙　茂樹

○暗闘！暗闘！　哀れ覇氣滿々たる無聲堂を舞臺化せしめ、茲に一齣の暗闘を演せし好漢は誰ぞ、

引分　面　田宮　春策
　　突　銃　竹村　榮太

一は運動家として嘖々たる名聲、校裡を壓し、半千の健兒をして比肩の思を絶たしめたる田氏、打物執つても多く人に讓らざるに、不敵にも突一手の銃鎗を以て之に向はんとする竹氏、そもや腕に幾許の妙技をか藏せる。

突擊奮闘に時を經て勝敗未だ決せず、一は魚となりて水中を潜れば、一は蛇となつて水上を奔る、其狂態宛として劇の暗闘を見るが如し、觀衆爲めに絶倒す、此の如くにして遂に勝敗を決する能はず、引分けとなりしは猶以て竹村君の名譽となすに足る、銃鎗を以て太刀に向ひし君には。

○嗚呼銃鎗！　數百年の昔より諸名流達人によりて練りに練られし一本の竹刀、以て豺狼を屠るべく、以て鯨鯢を斬るべし、其道既に開け其技既に進む、銃鎗に至りては實に未だしき点多しと云ふべし、堂々敵に對して盤石の勢を示し又字に構ふと雖も、其乘ずべきは唯突の一手有るのみ、何ぞ其憫むべく熟せざる事や、而して其技を戰はすに至りては此が敵たふむ者、身を堅むる戰具の自ら異なる者有るべきなり、然らずんば或は道具外れの傷を受くる亦計るべからざるなり、余の敢て此の言を爲す所以れ者は、此兩君が英進突擊に見て端なく此の感を喚起せしによる、併せ記して以て諸子が意見を叩かんと欲するなり。

○時は將に正午ならんとす　双勇壇に立つや耳朶を裂ざく午砲の響に驚かされ一霞生の、俄らに空腹を感ず筆を投じて歸宅せし爲め、其勇壯なる戰闘を見る能はざりしは。

引分　小手　松下　雅雄
　　面　伊澤　一亮

の勝負なりき

○分又分　何ぞ斯く引分を亂用し、死而後止底の勇士をして遺憾多らしむるや、三十幾組の快戰は猶ほ後に遺されて半日は空しく去れり、時間の節約亦已を得ずと雖も、此れが爲め其興味をして索然たらしむる果して幾許ぞ、さがなき京童は口より耳に傳へて曰はく、賞譽が足り無いのだと。

○初見參！　師範校との初見參に劣らぬ者と打て出でしは。

面面　師　延命直次郎
面　德田　虎雄

劍端風を生じ喝下龍騰る、白刃の下兩雄死を賭して爰に一活劇を演出せし、哀れむべし德田氏焦慮に失して敗を取りしは、勝負の常とは曰へ千秋れ恨事。

○次は即ち

中　不破孝太郎
面面小手　松原　武

松氏が、軍陣の血祭にあはれ彼奴れ頭骨打碎いてくれん者との意氣凄ゝく、寸毫の假借もなく競ひ掛つて薙ぐ太刀先に、中學の大勇不破氏は名古屋山三なふぬ敵の英氣に呑まれて、受太刀の弱身となるを躊さず、切入て全勝の凱歌は松君の口より進りぬ。

○第十四回　小手　中　三浦龜次郎
面面　長谷川　葛

○噫好漢！　溢るゝ計りの笑を湛へたる紅顏秀眉の愛嬌兒は、圓龍朱胴れ扮裝甲斐々々しく戰

壇に上りぬ、宛として畫中の武者振を現つ世に見る心知して、滿堂先づ動き初めたり。此若武者を誰とのおす、嘗ては共立中學劍道のチャンピヲンとして、嘗ては又三重中學に於ける打物取つての羅王として、又一高に於ける擊劍の勝利者として、而も今は我北辰校れ一好劍士として、吾人が大に希望を囑せる所の林氏慶太郎君其人！

中　逢坂元吉郎

胴面面　林　慶太郎

中學の逢坂君又侮り難きの敵、然りと雖も眠れる獅子に飢えたる豺狼の如何ぞ威を逞ふするを得べき、冷笑自若雨と降る敵れ亂擊を見事竹刀れ先に飜弄せし林君の、俄に躍つて一擊躍面を得し奇拔さ、電光と曰はんか疾風と評せんか、忽ちにして聞く堂上轟然の音を、此君がバテントある足かけにて進み寄る敵を轉倒せし其の刹那なりき、倒されし敵れ起り上りしも一瞬、起り上る敵の眞向を打割しも一呼吸、斯る猛勢に薙ぎ立てられし逢氏の、少しく氣後れしてか其太刀先れ澁りし敵を、又もや付け入りて胴切にせし技量、何と評せんや唯辭なきを嘆ずるれみ。

○第十六回　胴　中　園部外三男

胴胴　鳥海　太郎

○第十七回　面　中　南　長三

引分　突　田宮　春策

○相對するは宛然たる戰國の兩雄、北陸の天下に雄名を轟ろせる直江山城守、豐臣の末路に其人ありと知られたる片桐市之正、吁兩勇百載の下相遇ふて雌雄を決せんとす、いでや洞ヶ峠に上らんかな。

小手　中　永江　直之

面面　中桐　虎炳

其昔賤ヶ嶽に大身の鎗を扱いて北軍の胆を寒からしめし東作、餘勇猶衰へず黑衣朱胴に身を堅むれば、敵もさる者一藩の軍師として、智計謀略神のと疑はしむる兼繼、柔道の奥と探りて爍たる絹袴に威容の幾分を加へたり、兩勇互に任を重ドて一擧苟もせず、攻むべくんば攻め退くべくんば退く、相迫りて斫り結ぶ丁々戛々の響場内に亂るゝ時、忽ち見る中君れ体の地上に横はるを、戰沒せしか非ず、咄嗟蹶起して滿々たる怒氣抑へ難く、無二無三に薙ぎ立て斬り立てたる中君は、遂に二回の勝を得ぬ、而も彼れに全敗の辱を免れしめんが爲に、自ら進んで莞爾死地に就きたる實盛的寛度！、吁寛宏なる度量余は之を斯道の士に望まずんば有らず。

○第十九回　引分　面　中　野村　與一

面　橋本新太郎

○第二十回　中　竹中　鋤三

面面小手　倉茂　範行

技に於て既に月鼈の差あり、竹君如何で倉氏に向ふを得んや、裂けるが如き倉君の絶叫は三度續けられて、全勝は其手に歸しぬ。

○滿堂靜肅　此時に至りて番組は既に二十を過ぎぬ、我北辰校學生と尋中生徒との間に技を競ひし事十回の多きに上りぬ、然れども其經過は一に我校の勝に歸し尋中は全敗の悲境に沈淪せり、是に於てか活氣鬱勃の好少年何ぞ其れ平なるを得んや、然れども不平を口に訴ふるは神州男兒の快とせざる所、さればにや今迄喧囂騷擾を極めし彼等は一整に靜まり返りぬ、他も此を見て默しぬ、次回の劍士未だ上らず、五百の北陸男兒を以て滿されたる無辟堂も、之時は聞として人無きが如く、凛々たる寒風れ戸隙に呻く聲の、耳立ちて聞ゆるれみ。

○眠は覺めたり靜は破れぬ

小手面中日向　五作

面　田中鷹太郎

突如として戛々の音は堂を壓しぬ、いでや味方が連戰連敗の恥辱を雪がんと、勢込みて打下す日氏の大刀風勇ましく、須臾、田氏は其鋭鋒の下に葬むられ了りぬ。

○亂虎一聲　殘月に嘯く時、山嶽震ひ萬獸穴に蟄も、唯見る颯々たる風は樹梢を掃ひて、月光の轉々細く白きを。

師　井田　貞之

面胴胴　三橋　篤敬

○滿堂をして思はず喝采せしめしは

引分　面　石田　福松

面　中村　春生

磅礴せる英氣を一時に迸發せしめし石君は、猛虎の勢を以て敵に當りしが、中君が叫喚して打つ太刀に先づ其眞向を割られ、愈々哮り狂いて滅打亂打の花々しさ、快爽に愈々極まりて、喊、戰壇の中央に力負けの一人角力、アナヤと氣遣ふ間もなく倒れ乍ら敵の面を取りし狂態、觀衆の頤を解き柏手拍掌已む能はざらしめし、君も又一世の軍略家なる哉。

○第二十四回　面面　師　脇坂　政平

面　小篠　正悌

○第二十五回　警　森山竹二郎

面面面　押原　參吉

○第二十六回　突　師　大島德二郎

面面　松下　雅雄

千木廼舍花樵人と云へば本誌文苑欄内に大達者として、和歌俳句に堪能なる文人として、其名校内に隱れもなき松下雅雄君が、優にやさしき姿を物の具に固めて、範校の劍士大島氏に向はんとす、其勇や多とすべし、而も一揖して相立つに及んでや、其態度其太刀筋悉く皆實相の觀に入り、離念無心の極法劍影成就して、一切れ術に自在を得るの樣、人をして喝采の聲を發せしめ、堂をして九鼎の沸く如くふしむ、吁斯人にして斯技、余輩は嘆賞して惜く能はざる所、而も見事續けて敵の面を得しに至りては、愉の極、快の極に。

○第二十七回　面面　師　高　牟二郎

面　中　野　深

○第二十八回　面面ェ　北川　龍雄

面　藤田　茂吉

○第二十九回　小手胴胴ヤ　辻　正躬

鈴木　美雄

敵は是れ尋中に於ける錚々たる劍士、人は皆豫め其勝敗如何を危みたりしが、相對するに當りて鈴君の鋭氣愈々增進し、屈せず撓まず、丁々發矢と鬪ひしも、君が病餘の羸身如何で此强敵を支ふるを得んや、未だ分時なふずして疲勞の色は握れる鋒先に示はれ初めたり、機を見るに敏ふる敵は、茲に全勝の榮を負へり、惜哉。

○第三十回　突　ヤ　高峰享一郎

面面　平岡　顯吉

○第三十一回　胴面面ヤ　山崎　駿二

松本　德三

○第三十二回　引分　面ヤ　久田　元彌

銃　竹村　榮太

○第三十三回　ヤ　田中　三彌

胴面胴　木村　義郎

優然小鼻ゝ蠢めかして陣頭に見はれし木君は、技に於て大に賴む所有る者の如く、胯乎として一瞥を敵に與へたる姿勢態度、悠々として心惡き迄なり、敵は此狀を見て何ぞ堪ゆべけんや、奮然跳りかゝりて打下す大刀は雨の如く、霰の如く、斫り結ぶ刃先は光鋩を發して、腥風切りに狂ふ、少時にして敵は漸く氣息喘々亦奮ふべきの勇あり、機や至れり時や來れりと、初の處女今は脫兎の勢を見はし、續け樣に敵を破りし木君

の得意、想ふべきあり。

○時は正に三時十分

面　面中飯田　魁
小手　駒田　定郎

體格の上より見るも技術の点より見るも共に此れ好敵手、而も駒氏の已れ自らふ小首を傾けつゝ、再三敵が横面を取りしは頗る滑稽ありき、其の敵の優勢を見乍ら少しも躊躇せず、エー、ホーの懸聲勇ましく、愈々奮戰して敵の小手を取りし等、余輩をして有りし昔の武夫れ面影を忍ばしめたり、君も亦好漢。

○第三十五回　胴中時澤　貞義
引分　面　保坂　正治

知らずや二個れ白鏡を相對せしむる時、其映る所の影や何？、兩虎相挑むに當りてや和ならずんば即ち共に殪れむ耳。

○此を如何せん　技に於ては鏘々の響あり、打物取つては向ふに敵なき我校の好青年西岡君は、事に由り長く竹刀を手にせざりし故、知れる者は今日れ勝敗如何ならんと憂慮せしが、有遺は昔取りし杵、一度敵に對するに當りてや勇氣凛然姿勢沈着、構ふる大刀に一点の隙なく、頗る人意を強ふせしも、須臾にして氣息亂れ疲勞面に見はれしは無理ならねども殘念、先づ手痛き突の一擊を受けて愈々勞極まり、次ぎて面を得ふれしは尚々無念、されど流石は技巧、敵が英進の鋒を見事に受け流し遂に引分となりしは。

引分　面突中杉本俊一郎
西岡　忠夫

○第三十七回　胴中高橋爲次郎
突面　河合　文吉

○代りて立ちし者

面面中河合　芳雄
胴　小篠　正悌

○第三十九回　胴　突中毛利　勝男
胴　中野　深

毛利氏は尋中に於ける斯道の達人、中野氏又我辰章校の英士、而も技に於て共に伯仲の間にあり、其決戰奮鬪の烈しさ見る者をして拳に冷汗を握るを覺へざらしむ、中君進めば同學の諸子拍手ー、毛君進めば尋中の躍氣連快哉を呼ぶ、然りと雖惜哉終局れ勝利は毛利氏の手中に落つ。

○第四十回　引分　中釣谷次三郎
面　大藤　直哉

○第四十一回　引分　突中石川　久七
丹治　善藏

○第四十二回　突　監乾　芳久
面面　林　慶太郎

○第四十三回　警塚本　義範
小手面面　倉茂　範行

倉君の劒道に於ける、幽玄の機を存し、見性の神通を得たるんが如し、故に壇に立ちて叱咤一番、竹刀を取つて構ふれば敵は常に畏縮して君に勝を奉る、例へば箭の未だ弦を離れざるに的に命中するが如し、警察の塚本氏豪ありと雖も何ぞ君に對するを得ん、忽ち全勝を其膝下に呈して壇を下る。

○一は正々　一は堂々騷がず亂れず場に登りしは　警廣松甚太郎
面小手小手　木村　義郎

迅雷耳を蔽ふに遑あらず、疾風砂を捲きて天爲めに暗く、暗擔たる中に一木は既に倒れぬ、爰に至つて廣松氏得意の胴を得ふれざるを奈何せん。

○第四十五回　胴　胴警下田　豐作
突　銃松原　武

戰は始まれり、一は銃鎗を以て一、一は大刀を以てす、負けず劣らず互に勇を鼓して奮鬪する

刻一刻、滿場水をうちたる如く閑然たる中に、兩士の呼吸愈急に、隙を〳〵と睨み合ひし儘、或は進み或は退く、是れ宛然長州征伐當時の戰鬪のモデルを示すものなり、一勝一敗遂に松君は千秋の恨を秋草に灑ぎて、爰に戰死の悲運に陷りぬ。

○シヤ憎つくき敵が振舞かな　いでや我手並の程を見せて呉れんずと、優々たる三橋君が太刀筋を示されしは、

小手　監　富田　良吉
胴胴　三橋　篤敬

戰未だ數合あらず、二度迄も切胴の絶叫に、かくては止まじと全身の意氣を鼓して、此所懸命の場所、辛くも小手を打つて全敗の辱を免かれしは、富田氏にとりての榮譽。

○喝一喝　手に唾して起てるは、

引　面監　福島茂三郎

分突　押原　參吉

一擊一縛攻守宜きを得て乘ずべき寸隙なく、曳聲は堂外に響き、轉々人をして膽寒かゝしむ、吁團扇は何れにか上るべき、激戰數分に亙りて勝敗未だ決せず、睥睨數瞬互に心疲え氣勞るゝの色を示すに及んで、遽然引分の令は其頭上に落ちぬ、空〳〵く恨を飲んで相分るゝ、這般兩氏の心事果して如何。

○第四十八回
引分　小手警　廣岡兵治郎
面　中桐　虎柄

○第四十九回　胴警　羽野龜久男
小手胴　岩崎　法賢

其技に於て兄たり難く弟たり難き兩君は優劣遽にトすべかゝざる者あり、而も我校柔道の師範家たる岩崎の先生の竹刀を取つて働き振、唯天晴と曰ふの外なし、互に一勝一敗、最後に岩氏渾身の勇を奮つて斫込む大刀に、見事羽氏の小手を取りしは實に壯絶、爲に喝采の聲滿堂を覆しぬ。

○第五十回
引分　胴警　鴻野津吉郎
胴　橋本新太郎

○風雨將に至ちんする天地先づ靜なり
小手警　古矢與三次郎
面　面　林　慶太郎

一は青眼に搆へ他は上段に搆ふ、相待する事數刻、由來愛嬌を以て鳴る林氏は莞爾として敵手の虚を窺へり、果然一髪の機は龍虎奔騰の活劇を現出せしめぬ、忽ちにして敵は眞向梨割の悲運に遭遇し、怒氣心頭に徹し、此小冠者何ぞあらんと迫る、時や善しと君は又パテントれ投げによりて敵を倒しぬ、古君も今は懸命、勢込んで打つ太刀に其小手を取りぬ、次いで又複林君は投げによりて敵を土中に埋めぬ、滿堂は喝采と柏手に沸き返りぬ、是に至つて古君れ激怒早や堪もべかゝず、卽ち左手を伸べて林君の頭を打つ、吁、此れ如きの擧動、果して禮を知れる者と曰ふべけんや、觀衆は絶叫せり、耶次連は立ち騷げり、然れども全局れ勝は林君に落ちぬ、今日の勝負に於て君は三度戰勝の月桂冠を以て飾ふれぬ、吁、好漢！、吁勇士！、

○番組に乘せふれたる最終の勝負は卽ち

面監　西　田　東
面面　岩崎　法賢

美髯の雙勇壇に立てり、一は柔道を以て鍛へ上げし岩崎入道法賢先生、一は監獄署内無雙の劍士、今や竹刀を手にして相對す、知ふず如何ぞる霹靂や落下し來る。

滿堂は手に唾して起てり。

生か死か一道の凄氣兩士を覆ふと見る間に、奔流怒濤れ活修羅場は忽ちにして現はされぬ、一合一離、斫結ぶ太刀先に雲湧き龍跳る、而も其

宛轉自在にして一進一退、皆規矩に當るの妙、鬼神も猶端睨する能はざるの秘鍵に達す、嵐に紛れて面と叫ひしは誰れの、眞向を破りしは誰れの、中原の鹿を得しは何れゝ。

忽ちにして滿堂は岩崎先生萬歳の聲に壓せられぬ。

岩崎先生萬歳！。

○次いで番組外三組の飛入仕合は演ぜられたり即ち

第一　劍客不島　義美
　　胴胴胴　戸川文次郎

第二　劍客大垣　理吉
　　面胴胴　三橋　篤敬

第三　劍客桑原　薫勝
　　面　胴　胴　押原　參吉

咆哮喝采聲裡に不島戸川の兩君は悠々陣頭に駒を進めぬ、巖角月は冴へて猛虎嘯く、一度發せれば迅雨奔雷、戸氏がパテントなる胴は焦躁する敵を見事三斷して、揚々得々陣所に引き上げし行動の心惡くさ、神技とや許せん、老巧とや曰はん。

紅顏細腰の三橋君、一喝再喝三喝敵をして全敗れ辱を受けしむ、勝敗は元より時運の然らしむる所、然れども此くの如きは技に於て幾許かの遜庭なしとせんや、僕敢て他は曰はず、三橋君たる者須らく鼻を蠢ゝして可なり。

最後の桑原氏と押原君との奮鬪、實に懦夫をして起たしむるの慨有り、驀然疾風は枯葉を拂へり、兩者相寄る一走、渾身の勇を込めて打下ろす太刀は擊石電火、虚を斬らせて實を打つの秘術を盡し、殊死奮迅觀衆をして手に冷汗を握らしめし事幾度ぞ、此の如くにして數分に亘りし手合せの結果、又もや勝利は押君に落ちぬ、戸川君萬歳！、三橋君萬歳！、押原君萬歳！、

○當日進級せられし諸子は即ち

第三級へ戸川文次郎君、木村義郎君、押原參吉君、倉茂範行君。

第四級へ林慶太郎君、田中鷹太郎君、岸重次君、大藤直哉君。

第五級へ伊澤一亮君、田宮春策君、藤田茂吉君、佐竹時之助君、河合文吉君、植木隆太郎君、丹治善藏君、松本德三君、赤澤欽二郎君、駒田定郎君、荒木榮三郎君、平岡顯吉君。

○寒稽古悉出の賞狀を得られし諸子は

駒田定郎君、赤澤欽二郎君、藤田敏彦君、松本德三君、丹治善藏君、鈴木庸生君、金崎賢君、河合文吉君、植木隆太郎君。

○來賓　陸軍の將校を始め本縣の高等官連中は、時鐘一時を刻みし頃より搖一搖連續又連續、來つて終には一空席を餘さぬ迄に犇々と滿されたり、累々たる頭顱相合し相分れ私に其技を評しあへり、中に特に滿堂れ視官を聳然たらしめしは志波知事と今井教授との常に耳語をるにありき、此れ知事其人が來賓中の大達者たる所以なるべきも、其人の白頭倭軀なると教授の黑頭肥大なることが面白き對象を取りしに由りし者か、否の、

○來賓席中へ紛れ込みし紅顏清楚の金井講師が、同學諸子の勝利を得るの度毎獨り得々として柏手されしは頗る滑稽に類したりしも、我校學生を愛撫せらるゝ衷心の、端なく此所に迸發せしを思へば、吾曹は此所に特筆大書、以て先生が厚情を深謝すべきなり。

○吁諸子が劍道に精勵の結果、今日の勝負に於て驚嘆すべき迄の好成績を得られしは、吾校の爲め實に慶賀すべきの事なり、而も爰に吾曹の痛嘆止む能はざるの事あり、何ぞや、競技者の比較的小數なる事是なり、半千の健兒を有する

辰章校にして、僅々半百内外の競技者を出して以て諸子は足れりと思へるか、此点に關し吾曹は實に遺憾に堪へざる者有り、元より學生として其學に忠あるは可あり、然れども他日九皐の上に雄飛せんとするの士は、須ふく身体の健全を圖ふざるべからず、區々たる分時に戀々し、書を讀むにれみ是れ汲々とし、ミスカルキユレーション的奮勉をなし、遂には蒼顏羸軀れ懦夫たるを以て滿足するが如き、沒理的行爲に出る勿れ、諸子夫れ少しく顧る所有れ敢て蕪辭を呈す。

○全く會の終りを告げしは午後五時三十分

（霞生）

（柔道大會記事は都合に由り次號に讓る）

御斷り　遲くも客月中旬發行可仕筈の本誌印刷中御承知の通り當藩公三百年祭に際し爲に印刷所の都合も有之旁々以外にも延引仕候始末從て記事往々時に合はざる處重ねて御諒察の程切望候

投書心得

一投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし

一長文と雖も全文を寄贈せされは掲載せぞ

一雜誌上には雅號のみを記載するとを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし

一學理上の論説諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありたし勿論言の或は政治を論し或は德義に背くものは一切掲載致さゞるべし

明治三十二年五月十日印刷
仝　年五月十三日發行

編輯兼發行者　松村大吉
印刷者　佐々木惣一　金澤市長町川岸五番地清水祐世方
發行所　第四高等學校北辰會　金澤市川上新町三丁目二番地松本淺方
印刷所　活版合資會社　金澤市高岡町三十四番地